
ひかりちる世界

朔兎小鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひかりちる世界

【Nコード】

N6551L

【作者名】

朔兔小鳥

【あらすじ】

幼いころからずっといつしよに育ってきたヒカルとあかり。ヒカルが棋士としての道を選んでもそれは変わらずに——けれどなにかが、少しずつ変わっていく。

1 二人の距離

最近、ふと考える。

考えるというか、思い出す。

——調子が、少しずつ、狂っていく。

「進藤」

「……なんだよ」

時刻は午後四時。

場所は和谷のアパート。

いつもどおりのリーグ戦。

それから検討。

今は一休みして、団らん中だ。

このところのヒカルはものすごく調子がよかった。

今日だって全戦全勝だ。なのに機嫌は悪い。

すごく悪い。

今だってただ呼んだだけなのに、不愉快そうに眉をひそめていやや和谷のほうにふりむいた。

「なんだよ、じゃねえよ。どうしたんだよ。調子いいくせに不機嫌そうな面しやがって」

「……やっぱりそう見える?」

「は?」

なにを言ってるんだろっ、この男は。昔からわけのわからないところがある奴だったが、今日は輪をかけてわからない気がする。和谷は「おいおい」と進藤の頭をぼんとたたく。

「明らかに不機嫌な顔だけど」

「……自分でも、よくわかんないんだよなあ。暮に集中してる時はいいんだけど……」

ヒカルはぬうつ、とうなった。

元来、考えるのはあまり得意なほうではないのだ。なんでこんなに自分は機嫌が悪いのだろう。考えても考えても、答えは出なかった。

出ないからなおさら考える。わからないからイライラする。相乗効果で、時間が経てば経つほど、眉間のしわは深くなる。

「なんかイライラして、なんか物足りないというか、なんかこうむずむずするというか、なんかこう……」

「わけがわからん」

「俺もわっかんねー」

だるん、とヒカルは和谷の肩にもたれかかる。

「俺、どうすればいいかなあ」

「別にどうもしなくていいんじゃない？ 暮のほうは絶対調なんだし。俺にも勝ったし。ああ面白くない。しばらく鬱々してやがれ」

ヒカルはぺいっと床に投げ出される。

それに反抗する気力もなく、ヒカルはべちゃっと床に顔をくっつけた。

「なんだよ、進藤。なにか悩み事か？」

「伊角さん。……いや別に」

ほら、と缶ジュースを渡されて、ヒカルはありがたく受け取った。
和谷とちがって、伊角は本当に心優しい。
癒される。

本当に何なのだろう、このモヤモヤは。

「なんかスツキリしないんだよなあ……」

「一局打つか？ 気晴らしに」

「さっきまで打ってたじゃん」

「物足りないって顔だからさ。違うならいいけど」

「いや、打つ」

碁を打つてるときだけは、このもやもやから解放されるのだ。ヒカルは嬉々として碁盤に向かった。

——向かおうとした。阻んだのはチャイムだった。

ピンポン、と、ちよつと間の抜けた音がする。

「あれ？ 今日って他にも誰かくるんだっけ」

「たまたま都合ついた奴じゃないか」

和谷が言って、扉を開けた。瞬間、目をぱちくりとさせる。

「……えーと、誰？」

「こ、こんにちは。初めまして」

その声に、ヒカルはぎょっとふりむいた。
十六年間つきあった声だ。ききまちがえるはずがない。

「あかり？」

ひょいっと和谷の影から顔を出すと、思ったとおり、見慣れた幼なじみの顔がそこにあった。

あかりはヒカルの顔を視界に捉えると、ほっと笑顔になった。

「ヒカル」

「進藤の知り合いか？」

なんとなく和谷がうるたえているような気がするののは気のせいだろうか。

まあいいやと、ヒカルはあかりに顔を向ける。

「うん、幼なじみ。どうしたんだよ、あかり。よくここがわかったな」

「うん。ちょっと迷っちゃったけど、おばさんに地図書いてもらったから。それでね、これ、おばさんに頼まれて持ってきたの」

あかりは「はい」と持っていた紙袋を差し出した。

「サンドイッチだって」

「別にあかりに頼まなくてもいいのに」

おなかですいたころあいだったから、正直ありがたいけれど。

「出がけにお客さんが来ちゃったんだよ。たまたま私が通りかかって。まあ暇だったし」

「そっか。サンキュ」

「どういたしまして。がんばってるみたいだね」

「まあな」

「うわあ、自分で言うかな」

あかりがふふ、と笑う。

（あれ？）

ヒカルはその笑顔を見た瞬間、ふっと心が軽くなるのを感じた。
どうしてだろう。

ずっとずっと、この笑顔が見たかった——気がする。

なんでだろう？

「うるせ」

そんな気持ちを隠したくて、ヒカルは少しぶっきらぼうに言った。
あかりはくすくすと笑い続けた。

変わらない笑顔だった。昔と全然変わらない、いつでも隣にあった、笑顔。

そつえばあかりとは、ここ一ヶ月逢ってなかった。なんだかんだで忙しくて、和谷のところ泊り込みになることもしばしば——
あれ？

「じゃあ、お邪魔しちゃ悪いから、私もう帰るね」

「あ、ああ。悪かったな」

「どういたしまして。じゃあ、またね。ヒカル」

あかりはそう言って、ひらひらと手をふって行ってしまった。
扉を閉めて、突然の出来事に少しぼうつとしていると、和谷がいきなりヒカルの首を絞めた。

「うわっ。なにするんだよ、和谷！」

「なにするんだよ、じゃない！　なんだあの美少女は！」
「美少女？」

あかりが？

ヒカルは和谷をひっぺがした。

「あかりのどこが美少女なんだよ。和谷、眼が悪いんじゃないのか？」

「眼が悪いのはお前だ！」

「なんだよ。誰だったの？」

伊角がひょっこりと話題に入ってくる。和谷は「伊角さん！」と泣きつく。

「進藤の幼なじみっていう美少女だった！　くっそう、なんか負けた気分！」

「へえ。進藤の彼女なのか、その子」

「は？　いや、違うけど」

美少女？

あかりが？

艶のある長い黒髪。くるくると変わる表情。明るい声。笑顔。

……美少女？

「待て和谷。あかりって可愛いのか？」
「上物」

和谷はきっぱりと言い切った。

(そうだったのか……)

知らなかった。

ヒカルは目からうるこが落ちる思いで、その言葉を受けとめた。

(あかり……あかりねえ。ふうん、可愛いんだ……)

そういうことにまったく無頓着なヒカルは、「そうなのか」と認識を改めた。

だって生まれたときから見ている顔なのだ。

自然とそういう対象から外れる。

幼なじみで、一緒にいると安心できて、気がやわらいで、なんにもなくてもそこにいるだけであたたかくて——あれ？

(……イライラが消えてる？)

ヒカルの中にずっとあった、なんとなく物足りない焦燥感、それがきれいさっぱりなくなっていた。

「いいなあ。でも彼女じゃないんだ。じゃ、紹介してくれる？」

「紹介って……あかりは和谷のこと、知ってるんじゃないか？ 俺と同期だし。さっきも逢ったし」

「……お前、それは本気で言ってるのか？」

「本気でって、なんだよ」

ヒカルは首をかしげる。

「紹介っていうのはだなあ」

「和谷、和谷」

伊角がそこで、ばんばんと和谷の肩をたたき、さえぎる。

「進藤にそういう話しても無駄だと思うぞ」

「ちつ。進藤はおこちゃまだからな」

「おい和谷。おこちゃまってなんだ」

「言葉通りの意味だよ」

へへん、と和谷が鼻を鳴らす。ヒカルは馬鹿にされていることはわかったが、いかんせん何に対してばかりにされているのかわからなかった。それでそれ以上追求はできなかった。

和谷はさっそく紙袋からサンドイッチを取り出して食べ始めた。

三人で食べながら、話題はやっぱ「あかり」になってしまった。だった。

いや、ヒカルとしては別の話がよかったのだが、和谷がしつこいし、伊角も興味津々に訊いていた。

「そんなに可愛かったのか。俺も見たかったな」

「そうかなあ……」

「進藤の美意識って破壊されてるんじゃないの？」

「お前、失礼なこと言うなよ」

うがつとヒカルが和谷にかみつきそうになったので、伊角があわててフロアに入る。たとえプロになろうとも、この関係は変わらないらしい。

「でも、わざわざ届けてくれるなんて、いい子だな。そのあかりちゃんって子」

「あかりがいい子？ うげ、んなわけないだろ。ほとんど生まれたときからのつきあいだけど、けっこうわがままだぜ。あいつ。自分

勝手だし」

サンドイッチをぱくぱくとつまみながら、「でもそういえば……」
と思ひ出す。

「最近はどうでもないかな。昔に比べればおとなしくなったっつか。って、あんまり逢わないけど」

「逢えよ。贅沢なこと言っでないで」

和谷が「けっ」と毒を吐く。なんでこんなふうに言われなければならぬのだらう。

「贅沢ってなんだよ。だって生活時間帯合わねえしさあ」

「そこはどうとでもなるだろ。自発的に逢いにいけよ。幼なじみってことは、家も近いんだろ？」

「まあ、そうだけど」

「あのな進藤。あんなだけ可愛い子なんてそうそういないんだぜ。ゲツトしなくてどうするんだよ」

「ゲツト？」

ヒカルはまた首をかしげた。さっきから和谷はなんの話をしているのだ。

和谷は「駄目だこいつ」とくしゃくしゃと頭をかきむしる。

「……ちなみに念のため訊いておくけど、お前、彼女のことはどう思ってるわけ」

「どうって？」

「あるだろういろいろ。幼なじみなんておいしいポジションにいたらー」

「おいしい？」

「恋愛対象として好きかどうかってことだよ！」
「れんあいたいしょう？」

れんあいたいしょう。
レンアイタイショウ。
恋愛対象？

ようやく頭の中で文字が漢字変換される。
恋愛……？
ぽんっと、脳裏にさっきのあかりの笑顔が浮かんだ。
そしてけらけらと笑う。

「まさか！　ありえないって」
「論拠は？」

和谷がねちっこく聞いてくる。「うえ？」とヒカルはまた頭を悩ませる。

論拠……論拠？
論拠って、根拠？

「そう言われると……でも俺とあかりって、もう兄妹みたいなもん
っていうか。あ、もちろん俺が兄な、兄」
「どっちでもいいよ。ふっ、甘い。甘いぞ進藤」
「な、なにがだよ」

ふっふっふ、と和谷はいやらしく笑う。

「そうやって意識なんてしてなかった身近な女の子が、ふとそういう対象になっちゃうもんなんだよ」
「まさか」

ヒカルは笑い飛ばす。自分とあかりがどうにかなるなんて想像もできない。

なのに、和谷はちっちゃ、とひとさしゆびをふった。……どうでもいいがなんで和谷はこんなに熱弁してるんだろう。

ヒカルはついていけなかった。

「まあまあ、和谷。こういうことには人それぞれペースってものが」
「伊角さんジジくさい」

「ジジ……和谷、お前なあ」

「なあ、どうでもいいから打とうぜ。伊角さん」

ヒカルがげんなりした表情でぼやいた。

「待て進藤。これは重要な問題なんだよ」

「うるさいなあ。どうでもいいだろー。俺とあかりのことなんて」

「どうでもよくない！」

「だから和谷、人にはそれぞれペースが……」

三人の不毛な会話は、その後一時間に及んだのだった。

（無駄に疲れた……）

ヒカルはげんなりした表情で帰路についた。あれから延々和谷の話を聞かされたのだ。どうでもよくなっていたので、八割がた聞いていなかったが。

しかし、最近ずっと感じていたイライラはなぜか完全に解消されていたので、それほど気分は悪くなかった。なぜだろう。

（あかりが来てからなんだよな！。なんでだ？）

今日のヒカルはわからないことだらけだった。

ふと、道の脇にあるコンビニから、ひょっこりと見慣れた顔が出てきた。その人物はヒカルを認めると、昔から変わらない笑顔でヒカルの名前を呼んだ。

「ヒカル！」

「あかり」

ヒカルは思わず、ぱつとあかりから目をそらす。和谷に散々言われたので、つい衝動的に避けてしまったのだ。

その態度があかりには気に入らなかったらしい。

むうつと顔をしかめて、すたすたとヒカルに近づく。

「なによう、その態度」

「い、いや別に」

「感じ悪いなあ。それが差し入れを持って行ってあげた恩人に対する態度かなあ」

「悪かったよ。ごめん」

ヒカルが素直に謝ると、あかりもよし、とうなずいて許してくれた。

「じゃあ一緒に帰ろう」

時刻は7時を過ぎていた。もうすぐ夏とはいえ、外はもうまっく

らである。

あかりは自然にヒカルの隣に並んで歩く。肩が触れるか触れ合わないか、そんな距離。でも、ヒカルは不快ではなかった。近すぎるほどに近い距離、それがヒカルとあかりの自然な距離なのだから。

「にしてもさあ、久しぶりだよねえ。ヒカルに逢うの」

「そうだな」

「今日は二回も逢っちゃったけど」

「な。びっくりだよな」

「ヒカル、この頃ががんばってるよね。週刊暮、ちゃんと読んでるよ」

「俺はいつでもがんばってますよ？」

「うーん。でもさあ、ヒカル。あのね」

あかりは少し口ごもった。

ヒカルはなんだよ、と顔を近づける。

あかりはえーとえーと、と困った顔になる。

「あのねえ、あのう。ほら、昔はずっと一緒に、それがあたりまえだったじゃない？ だから、だからね。少しだよ、少し。子供だって笑わないでよね」

「なんだよ」

「うーん。逢えなくて、ちょっと寂しかったなあって」

あかりは「ちょっと気恥ずかしいなあ」と少し頬を赤らめた。そしてそろそろとヒカルの顔を盗み見る。

ヒカルは眼を見開いて、ぽけつとあかりを見つめていた。間の抜けた、なんというか、鳩が豆鉄砲くらったような顔。

「ヒカル？」

返事はない。

あかりはひらひらとヒカルの目の前で手をふる。

「おい。ヒカル」

そこでヒカルははっと覚醒したかのように目をぱちぱちとさせた。
あかりは「んん？」とヒカルの顔を覗き込む。

「どうしたのよ」

「いや……なんていうかこう……そうだったのか、と」

「なにが」

「俺が」

「……はい？」

あかりはますますわけがわからなくなった。対してヒカルは一人で「そうか、そうだったのか」と納得している。

ちよいちよい、とヒカルの服の袖を掴んで、あかりは抗議した。

「一人の世界に入らないでよ。一人じゃないんだから」

ちゃんと、あかりにもわかるように言葉にしてほしい。

「ああ、悪い」

「で、なにが『そうだったのか』なの？」

「んー」

ぼてぼてと歩きながら、ヒカルは笑って言った。

「俺も同じだったのかもってこと」

「同じ？」

「しばらくあかりに逢ってなくてさあ。なーんかイライラしてたんだよなあ。暮の調子は悪くないのに、なんでかなあと思ってたんだけど。俺たちずっと一緒だったからさ。それが普通だったから、気づかなかっただけ……」

「???」

あかりはまだわけのわからない、と言った顔をしている。
だから、と、ヒカルはおもむろにぴんつと指を立ててあかりの額を小突いた。

「痛っ」

「俺も寂しかったのかってことだよ」

「ヒカルが？」

「お前の間抜けな面が見れなくてさ」

「むかつ。誰が間抜け面よ！」

「お前だお前。藤崎あかり、十六歳。高校一年生。性別女」

「ヒカルに言われたくないよ！」

二人は並んで歩きながら、ぎゃあぎゃあ文句を言い合った。
空は曇っていて、薄暗くて。

変わったものもあった。

変わったもののほうが多かった。

でも、変わらないものもあった。

大切なものは、変わらなかった。

肩を並べて、家路を歩く。

いつかこの関係も変わるんだろうか。

変わらなければいい。

思いも心も、変わっていくものだけだ。

それでも変わらないものがあると、信じたい。

それはまだ、二人がなにも知らない頃、知らない間に願った祈り。

1 二人の距離（後書き）

はじめまして。朔兎小鳥と申します。

「小説家になろう」では初めての小説執筆になります^^

ヒカルとあかりが思いを自覚し、近づき、思いを通わせるまで、じっくりゆっくり、オリキャラ絡めて書いていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

2 重なる世界（前書き）

ヒカルが棋士として特集されている記事を読んで、どこか不安になるあたり。昔はあんなに近くにいたのに、彼はもう、遠い世界へ行ってしまったのだろうか。

2 重なる世界

不安なんかなかった。
ただ、寂しかっただけ。

心が崩れるのは、本当に一瞬。

「なんだか、遠い世界の人になっちゃったよね」

それは友達の久美子の一言から始まった。

今日発売の週間暮に、「新進気鋭棋士進藤ヒカル」の特集が組まれてあったのだ。

雑誌に載っていたヒカルは、まるで別人のようだった。

ヒカルは、こんな顔立ちだっただろうか。こんな表情をしていただろうか。

たまに道端で逢うヒカルは、昔と変わらずにあかりに笑いかけるのに。

ふと、涙が出そうになる。

どうしてだろう？

あかりは必死にこらえた。

「こんな人と、同じ囲碁部だったんだよね。私たち」
「うん……。そうだね」

久美子の言葉に、あかりは無理に笑顔をつくる。

「最近、新藤君と逢ってるの？」

「ヒカル、忙しいから」

雑誌を閉じて、あかりは笑った。ヒカルとあかりの関係を知っている久美子は、その笑顔に違和感を感じた。

——彼と、逢っていないのだろうか。

（そもそもあかりも進藤君も、お互いどう思っているのかなあ……）

幼なじみで、気心も知れていて、暮以外には無頓着なヒカルも、あかりの前では自然に笑顔になって。

それを、久美子は知っている。ずっとそばで見えてきたから。

あかりは気づいていないようだけれど、あかりもヒカルの前では遠慮なく笑い、ときにとてもかわいらしい「女の子」の顔を刷る。

久美子は忘れられない。ヒカルが囲碁部をやめるとき、あかりが迷いなく言った言葉。まっすぐにヒカルを見据えて、瞳に鮮やかな意思を宿して。

『私は——やめない。だってヒカルは……だってヒカルは、暮をやめるわけじゃないんだから』

強くなりたいたいから、もっともって強くなりたいたいから。

強くなつて、追いかけて、追いついて、追い抜かなきゃいけない奴がいるから。

そんなヒカルの気持ちを自然に受け止めて、理解して、あかりは言った。

そのときのあかりは、とても綺麗だったと久美子は思う。
ヒカルの事を考えているときのあかりは、とても綺麗だ。もともとあかりは「可愛い」という表現がぴったりあう女の子なのだが、この頃は艶っぽさが増して、「綺麗」と評するにふさわしい。
明るくて可愛くて人懐っこくて。ときどきの憂いを帯びた表情が美しくて。高校に入ってからあのあかりは、まるで蕾が花開いたようにその魅力が全開で、男子から絶大な人気があった。
本人まったくの自覚なしだが。

（進藤君も、もう社会人だからかもしれないけど、昔に比べてずいぶん大人っぽくなったし……よくよく見ると整った顔立ちしてるし、並ぶとなかなかお似合いなんだけどなあ）

久美子は「うーん」と考える。二人は、今うまくいっていないのだろうか。

もともと、別に付き合っているわけではなさそうだったが。

「あかり。あの……」

「藤崎。ちよつといいかな」

クラスメイトの男子の一人が、あかりに話しかけてくる。久美子はぴんときた。前々からあかりに気がありそうだった。

今は放課後。このタイミングで……ということは……。

「なあに？」

自覚なしのあかりは、やわらかい笑顔で応対する。少し頬を赤らませたクラスメイトは、「話がある」とあかりとともに教室を出て行ってしまった。

あの調子では、あかりは何の話か気づいていない。

告白された瞬間に慌てふためく姿が目に見えるようだ。

久美子はためいきをついて帰り支度を始めた。高校に入って二ヶ月あまり。あかりに告白する男子生徒はこれで三人目だ。結果は見えている。

自覚はなくとも、あかりの心を占めているのはたった一人だけだ。

胸の痛みが止まらなかった。

泣きじゃくつて、泣き叫んで、大声を上げたくてたまらなかった。それを必死にこらえるのが精一杯で、あかりは一刻も早く一人になりたかった。

『好きなんだ。藤崎のこと』

声が、ずいぶん遠くに聞こえた。

『俺とつきあってほしい』

ぼんやりと、視界がかすむ。胸がざわついて止まらないのに、目の前の彼に対して、心はひどく静かで、穏やかで。

気がつけば、あかりはとぼとぼと家路についていた。よく覚えてはいないけれど、あかりは彼の申し出を断ったのだと思う。

相手が気を遣ってくるほど萎縮して、ごめんなさいを繰り返した。

（……最低？かも。私）

震える声。はりつめた空気。真摯な言葉。

その全てを虚ろにしか感じるこののできなかった自分に、あかり

は激しく嫌悪する。

けれど今は、別のことで頭がいっぱいで。
なんだろう。うまく言葉にできない。

でも泣きたい。泣きたくない。泣きたい。

——逢いたい。

ヒカルに逢いたい。

強く強く、心が震える。

どこかにいつてしまわないで。

この気持ちをなんて呼べばいいんだろう？
ただ痛い。

——なんだか、遠い世界の人になっちゃったよね。

突き刺さった言葉。

はがれた心。

ヒカルはヒカルで、自分は自分で。

それでも、変わらないと思っていた。

逢えないのは寂しいけれど、思いつの中でのヒカルも、今のヒカルも、なにも変わらないと思っていた。事実、ヒカルは変わっていない。

あかりの知っているヒカルのまま、ヒカルはあかりに笑いかける。
だから、不安はなかった。ただ、逢えなくて寂しいだけ。

でもがんばってるから、ヒカルはともがんばっているから。

あかりもがんばらなければと思った。

遠い世界？

ヒカルは、遠い世界に行ってしまったのだろうか。

あかりのいない世界に。

手を伸ばしても、走っても走っても、あかりには行けない世界に。

そばにいるのがあたりまえで、一緒にいるのがあたりまえで。
ヒカルと一緒にいるのは楽しくて、うれしくて、好きだった。
暮を始めてからときたま見せる強い眼差しも。
変わらない無邪気な笑顔も。
全部全部、あかりは失くしてしまうのだろうか。
痛くて、怖くて、ただ、哀しかった。
世界で独りぼっちになってしまったような孤独を感じた。
世界が、暗闇に色を変える。

「あかり？」

聞きなれた、でも久しく聞いていなかったその声に、あかりはばつと顔を上げた。

気がつくと、あかりはヒカルの家の玄関前まで来ていた。

ヒカルはちょうど家の門に手をかけたところだった。

「今帰るか？ 俺もちょうど今、棋院から帰ってきたところで――」

――

ヒカルは眼を見開く。

あかりの眼から、大粒の涙がぼろぼろと流れ始めたから。

「あかり？」

もう一度、あかりの名前を呼ぶ。その瞬間、弾けたように、あかりはヒカルの胸に飛び込んでいた。そしてがっちりとヒカルのシャツを握りしめた。

「あ、あかり。おい……」

突然の事態に、ヒカルはついていけなかった。

あかりはそのまま顔をヒカルの胸に押し付けて、わんわんと大声で泣き出した。

「うわああああん」

ヒカル。ヒカル。ヒカル――

言葉は声にならなくて。せきを切ったように涙が次から次へとあふれて。

自分の胸の中で泣きじゃくる少女を前に、ヒカルは困り果てた。こんなふうに泣いているあかりを見るのは久しぶりだった。小さいころはお互いによく泣いていたものだったが。

昔から、あかりが泣くとヒカルはどうすればいいかわからなくなるのだった。

とりあえず、こじんまりとした形のいい頭と、細くてやわらかい背中に、そっとひとつずつ手を置いて、やさしく撫でてみた。

それでもあかりは泣きやまなかったが、泣き声がやむまで、ヒカルはそのまま、その場を動かなかった。

ひたすらにやさしく、小さい身体を抱きとめた。

ココアの甘い匂いが鼻をくすぐる。

ひとしきり泣いた後、ぐすんぐすんとすすりなくあかりの手をひきずって、ヒカルは家の中に入った。そのまま部屋に入れると、クッションを放り出し、その上にあかりを座らせた。

しばらくして、ヒカルの母がホットココアを持ってきてくれた。ヒカルはそれをあかりの手に握らせる。

あかりはそれを一口飲んで、ようやくふう、と息をついた。

「落ち着いたか？」

ヒカルの言葉に、あかりはこっくりとうなずいた。ヒカルの手が、やさしくあかりの頭の上に置かれる。ぽんぽん、となでられて、それだけであかりの中にあつた不安が払拭されていく。にも関わらず、涙はじんわりとにじみでるのをやめてくれなかった。

「ごめんね、ヒカル。いきなり……」

それでもようやく冷静さをとりもどして、あかりは謝った。恥ずかしさともうしわけなさでいっぱいになる。道の往来で、ヒカルに抱きついて泣きじゃくるなんて。

しかしヒカルは「なにが？」と笑った。変わらない、あかりの知っている笑顔だった。

「柄にもなく遠慮してんなよ。っていうかだなあ、うーん。なんかうまく言えないけど」

ヒカルはぼりぼりと頬をかく。

「ヒカル？」

「あかりが泣いてること、俺は知らないままより、知ってるほうがいいからさ」

「……どうして？」

真っ赤になってしまった眼でヒカルを見つめると、ヒカルは首をかしげる。

どうして、と聞かれたことが意外なようだ。当たり前だろう、というふうに笑う。

「昔から、俺だってあかりの前ではわんわん泣いてたし。あかりだって泣いてたし。お互い、我慢しなくてもいい相手じゃん？」

ここまで派手なのは久しぶりだけだなあ。

その言葉に、あかりは少し考える。
なるほど。だとしたら。

「じゃあヒカルも、泣きたいときは私のところに来てくれるの？」

「俺はもう泣かねえもん」

「北斗杯では泣いてたくせに」

「うっ。あれはだな……」

「だって、私ばかり」

あかりがすねた顔を見ると、ヒカルがぷつと吹き出した。

「わーかったよ。俺も泣きたくなったら、あかりのところに行くからさ」

「本当？」

「おう。だから、今日の俺のように、ちゃんと慰めろよ」

「うん！」

あかりは笑顔でうなずいた。
いつのまにか、涙は止まっていた。

「で、なんだったんだ？」

パチパチと、ヒカルはあかりに指導碁を打ってくれていた。そのときには、あかりはもうすっかり元気になって笑っていた。

その笑顔にほっとして、ヒカルはようやくその言葉をつむぎ出すことができた。

あかりは突然の質問に首をかしげる。

「え？」

「泣いてた理由」

「……………さあ？」

たっぷり十秒考えて、あかりはてへ、と笑った。

ヒカルはする、と足を滑らせたくなった。座っているのでありえないが。

「さあつて、おい。理由もなく、お前はあそこまで泣けるのか」

「違うよ。理由はあったよ。えーつとね……。なんだろう。なんて言えばいいのかな……」

打つ手を止めて、あかりは腕をくんで考えこんだ。

ヒカルはあかりの言葉をじっと待つ。

うーんうーんと考えながら、あかりはゆっくりと言葉を紡いだ。

「ええつとね。ヒカルがどんどん強くなって、それはうれしいんだけど……。でも、ヒカルが私の知らないヒカルになって、ずーっとずっと遠いところに行っちゃって、私の世界とヒカルの世界は、もう重なってないのかなあ、とか思ったら、ちよつと、こう、ナーバスになったっていうか、考え出したら止まらなくなって……. ほんと、悪い方向に考えちゃって……」

「バーカ」

ヒカルはあかりの悩みを一刀両断した。呆れ顔である。

「うつ……」

「じゃあ、今ここにいる俺とお前はなんなんだよ」

ヒカルの言葉に、あかりはぱちくりと眼を見開く。
今、ここにいるヒカルと私？

「ちゃんと重なってるんじゃないの？ 俺の世界と、お前の世界って奴」

「……そっか」

あかりは呆然としたままうなずいた。
そうか。

いま、ここで。いつしよにいる。

「そんなこと考えてたのかよ。変わるわけないじゃん。たとえば俺がタイトルホルダーになっても、そのタイトル奪われちゃっても、あかりがそこらへんのOLになっても、スーパーの店員になっても、バリバリのキャリアウーマンになっても。俺はきつところやって、泣いてるあかりをどうにか泣きやませて、指導碁打ってると思うぜ？」

どんなに世界が色を変えても。

どんなに時が巡っても。

目の前の君は、変わらずに微笑んでいる。

あかりは胸の奥から、ほくほくとあたたかいなにかが生まれてくるのを感じていた。

あたたかくてやさしい気持ち。

この気持ちを、なんて呼べばいいだろう。

「俺の泣き場所になるんだろ？」

「うん。まかせて！」

「まかせられっかなあ。悪手ばかりの奴に……」

「碁以外では、ヒカルに劣つてるところなんかないわよ。料理も掃除も洗濯も勉強もできないくせに」

「体育は勝ってる」

「しばらく身体動かしてないから、なまってるんじゃないの？」

「言っただな。さっきまでなくさめてやった恩人に対する言い草か、それが？」

「売ってきたのはヒカルじゃないのよーっ」

ていつとあかりは石を置く。

「はい、悪手」

「えーそんなあ。打ち直してもいい？」

「駄目」

「ケチ！」

あかりが泣くと、どうしたらいいかわからなくなる。

途方にくれる。

困り果てる。

でも、笑ってくれるとうれしい。泣いた後の笑顔はとびきり可愛いんだ。

だから、泣いているのは困るけど、自分の知らないところで泣かれるより、我慢されるより、ずっとずっといいんだ。

歩いていく道はきつと違つけど、それでもずっと、君が隣にいれ
ばいい。

2 重なる世界（後書き）

ヒカルとあかりのお話、第2話です。まだまだ恋は始まらないけど、その予兆……みたいなお話。原作でもふたりの関係は遠慮がなくて、ほのかにラブがただよっていて、いいなあと思うわけです^^

3 君に伝えたいこと（前書き）

5月5日。それは、大切なあの人が、永遠に自分の前から消えてしまった日。唐突に訪れた喪失。だれも彼を知らなかったから、だれとも、この気持ちばかりあいにくなかった。けれど、きみは言っていたから。ヒカルはあかりに逢いにいく。

3 君に伝えたいこと

喪失。

この痛みを、誰にも知られなくなかった。
この痛みを、誰とも分かち合いたくなかった。
だけど。

『泣きたいときは、私のところに来てくれるの?』

泣きべそで、でもちょっと悔しそうに、うれしそうに言うから。
だから――

「どこに行くの?」

「……誰もいないところ?」

そう言っただけで微笑むヒカルは、いつもより大人びていて、少しだけ哀しげだった。ヒカルがそんな顔で微笑むのを、あかりはいままで一度も、見たことがなかったから。

だからあかりは、繋がれた手を離すことなく、無言で歩くヒカルについていったのだった。

始まりはほんの十分前。ゴールデンウィーク最終日。することもなく、あかりは手持ち無沙汰でベッドに寝転んでいた。両親は出か

けている。

どうしよう。ケーキでも作ろうかな。

そんなことを考えていたら、インターフォンが鳴ったのだ。
ドアを開けると、見慣れた笑顔があった。

「よっ」

「ヒカル」

あかりもつられて、ぱつと笑顔になる。

昔はそんなことなかったのに、あかりはこの頃、たまに逢えるプロ棋士の幼なじみに、奇妙な感情を抱いていた。

いまだに自分でもよくわからない。

ただ、ヒカルに逢うと、自然に顔がほころんでしまうのだ。たまにしか逢えないから、なおさら。そして長く逢えないでいると、胸にもやもやした変なものがたまる。

悪いものを食べて、おなかをこわしたときみたいに。

「今日は、仕事ないの？」

「うん。あかり、暇？」

あかりは素直にうなずいた。よし、と、ヒカルはあかりにずっと手を差し出した。

「なに？」

「お手」

「わん」

あかりはぽすつと、その手に自分のそれを重ねる。ヒカルはその手をきゅつと掴んで、満足げにくるりとあかりに背を向けた。

「行くぞ」

「は？」

首をかしげるあかりの手をひきずりながら、ヒカルはすたすたと歩き出す。

かくしてあかりは何の用意もなく、なにも知らないまま、無言で歩き続けるヒカルと行動を共にすることになったのだった。

「どこに行くの？」

ひっぱられるのもなんなので、手を繋いだまま隣に並んで歩きながら、あかりはたずねた。

そういえば手を繋ぐなんてずいぶん久しぶりではないだろうか。小学校低学年くらいまでは、よく一緒に手を繋いで学校に行ったものだけだ。

（ヒカルはすぐいろんなものに目移りするから、よく遅刻したっけなあ。道づれで、私もいつしよに）

あのころとは大分変わってしまった。ヒカルの手はあかりよりも大きくて骨ばったものになり、硬くて、あかりの手をすっぽりと包み込んでしまう。

そしてなにも目移りすることなく、棋士一直線の道を歩いてる。ヒカルはあかりのほうを見ないまま、一言だけ言った。

「……誰もいないところ？」

誰もいないところ、と聞いて、あかりは「どこだろう」と頭をめぐらせた。

昨今、人口過密状態のこの東京に、人のいないところなんてある

だろうか。むしろそれならば、あかりの家では駄目なのだろうか。
両親は出かけていていないのだし。

でもまあ、今日はヒカルには逆らわないようにしよう、そう決めて、あかりはそれ以上にも言わなかった。

ヒカルのまとう雰囲気、まるで何かを我慢しているみたいだったからだ。

着いたのは、ヒカルの祖父の家の倉だった。ヒカルは祖父に挨拶したあと、あかりを連れたまま倉の中に入る。そして周到に、がちちゃんと扉に鍵を閉めた。

かろうじて天窓からさしこむ光だけが中を照らしていたが、薄暗いことに変わりはない。

しかしヒカルはためらいもせずに、倉の中の屋根裏にあたる部分に向かって設置されているはしごをのぼりはじめた。わけがわからないことは確かだが、あかりもその後が続く。

あかりがのぼりきった時、ヒカルはじつと古い碁盤を見つめていた。

「ヒカル……」

あかりの声にもこたえずに、ヒカルはただ、そこにたたずんでいた。まるで碁を打っているときのようで、あかりは「しょうがないなあ」とためいきをつく。

こうなってしまったら、あかりの言葉に耳をかたむけてくれるわけもない。身勝手で我儘なヒカル。でも、それがヒカルだから。

ちょこん、とヒカルの隣にたたずんで、あかりも一緒にその古い碁盤を見つめた。

——そういえば、始まりは、この碁盤だったんだっけ？

あかりは四年前を思い出す。

(……もうそんなになるんだ……)

ヒカルが碁を始めてから。

初めはいやいやみたいだった。どうして続けてるんだろうと、あかりは不思議でならなかった。

そもそも、どうして碁なんかやろうって思ったんだろう。

ヒカルは運動は好きだけど、頭を使うのは大嫌いだったのに。思えば、この碁盤に触れて、いきなり倒れて——それからだったような気がする。

（頭を遣うのが嫌いなのは……ま、今も変わってないか。あ、でも、対局のときは考えてるのかな）

いつのまにか、ヒカルは碁にどっぷりはまりこんでいて、あかりもそれにくっついていった。

ヒカルの顔がともきらきらしていて、まぶしくて、ずっとずっと見ていたいと思った。

ヒカルが碁を始めた本当の理由。それは、あかりにはわからなかった。ヒカルも、教えてくれない。でも、あかりは別に聞かなかった。

聞きたいかと言われれば聞きたいけれど、でもそれは、あかりにとっては大して重要な問題ではなかったから。

ヒカルがヒカルらしく、隣で元気に笑っていてくれれば、そりゃあ喧嘩もするし、腹立たしいこともあるけれど、それだけで十分だと思えるのだ。

（背も伸びて、手も大きくなって……大人っぽくなったよなあ。ヒカル）

ちらつと、隣にいるヒカルの横顔を盗み見る。その顔にずきんと胸が痛んで、あかりは思わず、ヒカルの服の裾を握りしめていた。

それに気づいたヒカルが、ようやくあかりのほうを向く。
遠く遠く、ここではないどこかを夢見ているような、そんな瞳だった。それはすいこまれそうなほど深く、綺麗で、怖くて。
泣きそうなあかりの顔に、ヒカルは思わず笑みがこぼれた。

「……あかり、前に言ったよな」

「え？」

「俺の泣き場所になるって」

「——うん。言った」

あかりがうなずくと、ヒカルは倒れこむようにそのままあかりの肩に自分の頭をあずけた。あかりは自然と、そんなヒカルを支えるように、ヒカルの背に両腕を回す。

「ヒカル……？」

「じゃあ、約束、守ってくれないか？」

「……いいよ」

あかりの、やさしくて甘い声音が耳元に届いた瞬間、ヒカルの中におさめていた気持ち、ぱっと弾けた。

あかりはなにも知らない。知らなくても、聞かない。そして、受け入れてくれる。

雫が、ぽたりと、あかりの膝の上に落ちた。

ヒカルはくいつとあかりをひきよせて、その腕の中におさめた。
いきなりでびつくりしたので、あかりは少し抵抗したが、すぐにおとなしくなる。

少しだけ声を出して、ヒカルは静かに泣き続けた。

ヒカルの腕の中はあたたかくて、愛おしくて、あかりもつられて泣きたくなったけれど、それはぐっとこらえなければならなかった。
あかりはただ、ヒカルを抱きしめた。泣いているあかりに、やさ

しくヒカルが手を差し伸べてくれたように。両腕に力をこめて、やさしく、でも、強く。

ヒカルがどこにも行かないように。ヒカルの泣ける場所が、ずっとここであるように。

なにも言わないヒカルの痛みが、少しでも安らぐように。

——どれくらいの間、そうしていたのだろう。

気がつけば、ヒカルとあかりは二人そろって碁盤の横で抱き合ってたまま眠っていた。

最初に眼が覚めたのはヒカルだった。ぼんやりと視界がかすんで、ようやく「眠っていた」ことに気づく。腕が重くて、持ち上がらなかった。

眼を何度か瞬かせ、視界がはっきりしてくると、その理由がわかった。すやすやと、あかりがヒカルの腕を枕にして眠っていたのだ。まだぼうつとする頭を、懸命に覚醒させる。泣いたせいか、少し頭がずきずき痛んだ。

視界いっぱい、あかりの寝顔が広がっていた。

(……昔と全然変わってないなあ。こいつ)

でも、やっぱりちょっと、変わったかもしれない。

ヒカルは思い直して、まじまじとあかりの顔を観察することにした。

(あ、まつげ長いなあ。肌も白いし……やわらかそうなほっぺだなあ。かみつきたいかも……駄目だよな。やっぱり)

かみつきたい衝動をどうにか抑えて、ヒカルはぶにぶにとあいている手の人差し指であかりの頬をつついてみた。おなかすいた。

(……ふうん)

こうしてじっくり見てみると、なんとなくわかった気がした。

あかりは美人——なのだ。和谷が言っていた時は目医者に行きたほうがいいんじゃないかと真剣に思案したものだったが、ヒカルは思い直す。

(中身はあんまり変わってないのに)

つい先日、ヒカルの胸の中にいきなりとびこんできて、子供のように泣きじゃくった。わけもわからないままなぐさめて、理由を聞いてみたら「寂しかった」である。

ヒカルが遠い世界に行ってしまうようで怖かった、と、泣いていた。

(こいつ、俺より頭はいいくせに、けっこう馬鹿なところあるよなあ)

遠い世界、とはどこだろう。——佐為は今、どうしているのだろう。

消えてしまった、とは、成仏したということだろうか？

佐為が消えたのは、一年前の今日——窓の外ではこいのぼりがゆれていた。

あまりにも突然の別離。耐え難い喪失の痛み。

佐為が本当に亡くなったのは今日じゃないけど、ヒカルにとっての佐為の命日は「今日」だから。——本当は、一人でいようと思った。

運がいいのか悪いのか、対局も仕事もなかったし、一人でこの痛みに耐えようと思った。

でもふと、あかりの言葉を思い出して——思い出したら、無性に逢いたくなった。思い立ったらすぐ行動、がヒカルの信条なのでヒカルはすぐさまあかりの家に向かった。

ひょっこり顔を出したあかりは、直視するのもまぶしいような笑顔でヒカルを迎えてくれた。いつもどおりのあかりにほっとして、ヒカルは手を差し出した。

——で、今に至るわけである。

ヒカルの腕の中で、あかりはすやすやと規則正しい寝息を立てていた。床はひんやりと冷たくて、窓からさしこむ月の光があかりを美しく照らしていて……。

佐為が消えた日だから、佐為のことだけ思っていようと決めた。けれど佐為を思い出すと、どうしても涙がこぼれそうになって。

出逢ったところのこと、塔矢や名人との対局、たわいない日常、ずっとずっとずっと、家族よりも近くにいた。一年前の今日、突然消えるまで。最後に打った一局を打ちながら、今でも鮮明に思い出される記憶に打ちのめされて。

泣きたくて、でも、なんだか一人でいたくなくて。誰にも知られたくない思いなのに、矛盾していると思うけれど。そうして、ふとあかりを思い出したのだ。

佐為に、初めて出逢ったときも、あかりはそばにいた。あかりは佐為を知らない。知らないけれど、あかりなら、何も言わない、身勝手でわがままなヒカルでも、許してくれると思ったのだ。

泣きたい理由を、あかりは聞かないでいてくれた。

あかりの、やわらかくて、あたたかくて、確かなぬくもりが、どれほどヒカルを救ったか、あかりにはきつとわかっていないのだろう。

(……にしても、よく寝るなーこいつ。いいかげん起きないのかな)

ヒカルの心の声が聞こえたのか、あかりの唇がぴくつと動いた。

（ん？）

寝言だろうか。興味津々に、ヒカルはあかりの唇に耳を寄せた。そしてぎよつと目をむく。あかりの目に、うつすらと涙が滲んでいたからだ。

ヒカルはその場から動けなかった。その涙に、一瞬で魅入られて身体がぴくりとも動かなかった。まるで時が止まったかのようにだった。月の光で青白く光るあかりの頬は、そのまま透き通って消えてしまいそうなほど美しくて――

（……消える？）

佐為の、ように。

「……ヒカル」

唇に寄せた耳に届いた、かすかな声。

甘く、甘く、媚薬のように理性を狂わせる声。

顔にかかっている一筋の髪をすくう。触れる感触の全てが自分の身体とはまったく違う。もっとやわらかくて、ずっとこの心地よさに溺れていくくなる。

髪をすくったほうの手で、少しだけあかりの顔をもちあげる。

つなぎとめるように。いなくなってしまうないように。いいしれぬ不安をかき消すように。

――ヒカルが遠い世界に行ってしまったみたいで。

あかりの言葉が、脳裏に浮かぶ。遠い世界に行ってしまったのは佐為。二度と逢えない。

ヒカルがあかりのいない世界に行ってしまったら、ヒカルはあかりに逢えなくなる。そういうことだ。それは——喪失だ。

あかりにとつては、「ヒカルがいなくなる」でも、ヒカルにとつては、「あかりがいなくなる」のだ。

ヒカルには、想像するだけでも耐えられそうになかった。どうしてだろう？

考えるより先に、身体が動いていた。答えなんて、まだわからないけれど。

指先で涙をぬぐい、そつと、その小さな唇に口づけた。

——固まった。

（あれ？）

ヒカルは今自分がなにをしたのか、すぐには理解できなかった。

（え？）

目の前では、変わらずにあかりがすやすやと眠っている。とりあえずほつとする。

（よ、よかった……。気づいてない……）

どつくんどつくんと心臓が飛び跳ねる。

今、あかりになにをしてしまった？

（あ、あ、あ、あれ？）

たらたらと変な汗が出てきてしまつて、ヒカルはおろおろとろたえる。。

「ん……」

あかりがごろんと寝返りをうつ。ヒカルは身体をこわばらせた。声も出ない。窒息死しそうだ。うまく呼吸ができない。やめる。

いまこのタイミングで起きるな！

——という願いは、無情にも聞き届けられなかった。

「むぁ……」

おつとりと、あかりが瞼を開けた。

「あ……ヒカルだ……」

まだ寝ぼけているようだ。ヒカルはひきつった笑みを浮かべた。

「お、おう。お、おはよう」

「おはようって……あれ？」

あかりはむっくりと起き上がる。ヒカルは硬直しきっていた。どうしよう。自分はこれからどうするべきなのだろう。ばれた？ ばれてない？

（つていつかなにしたんだ、俺）

「わぁ！ もう夜？」

あかりが窓の外にぽっかりと浮かんでいる月を見つけて大声を上げる。

ヒカルもなんとか起き上がった。あかりに枕していたほうの腕がしびれている。が、怒る気にはなれなかった。

なれなかったというか、別のことで頭がいっぱいというか……。

「ヒカル、なんで起こしてくれなかったのよー」

「あ、ああ。悪かった」

思わず視線をそらす。

駄目だ。声がどもる。あかりの顔がまともに見れない。

そんなヒカルの様子に、あかりはひょいっと首をかしげて近づいた。

「どうしたの、ヒカル。なんか変だよ」

「べ、別になにも変じゃねーよ」

あかりが近づいてくるので、ヒカルはあわててあとずさった。

（近づいてくるなーっ！）

あかりは「変なヒカル」とくすくす笑った。よかった。これ以上詮索はされずにすみそうである。

「もう大丈夫？ ヒカル」

「なにが」

「なにがって……知らないけど。訊いてもいいの？」

「……あ、ああ。大丈夫」

泣いてしまったことか。ヒカルはほつと胸をなでおろす。

いや、ほかになにがあるというのだ。なにもない、なにもない。

ヒカルは雑念を追い払った。あのことは後で考えよう。今は忘れるのだ。

あかりは「よかった」と笑う。

そこでヒカルは、あかりに心配をかけていたことによつやく気がついた。——考えてみれば当たり前だ。いきなり家から連れ出して、眼の前でボロボロと泣いてしまったのだ。

「じゃあ帰ろう」

「——ああ」

なのに、何事もなかったかのように笑うあかりに。なにも聞かないあかりに。ヒカルは心から感謝した。

五月の夜は、まだ少し肌寒かった。変わらない道を、並んで歩く月の光。伸びる影。重なる世界。

こんなふうに、一日一緒にいたの、久しぶりだね。何年ぶりかな。そう言つて笑えばなしのあかりが愛おしくて、ヒカルは手を伸ばす。

——そして気づかれないようにひっこめる。

……しばらくは、自分の中に生まれてしまったこの奇妙な感情の検討が必要みたいだ。

3 君に伝えたいこと（後書き）

第3話です。ヒカルにとって5月5日は特別な日ですよね。原作読んでてもびくつとしてしまいました。本当にこんなあっさり何気なく、いきなり、いなくなってしまうんだなあと。ヒカルがそのとき、けっこう態度悪かっただけになおさら。うう。でもその傷を癒してあげるのは、あかりであってほしいなと。ヒカアカ派としては思うわけです。

4 彼氏彼女の事情（前書き）

最近、様子のおかしいヒカルに、あかりは苛立ち、ヒカルは逃避に
ふける。近づいたような、離れたような、曖昧な感覚。「幼馴染」
という居心地のいい距離が、いまはもどかしくて。

4 彼氏彼女の事情

この頃の俺は、変だ。

変というより、おかしい。

あれ？

「変」と「おかしい」って同じ意味か？

この頃のヒカルは、変だ。

変というより、おかしい。

あれ？

「変」と「おかしい」って、同じ意味だっけ？

今日の対局は散々だった。……いや、これは正確な表現じゃないな。

認める。

この頃の対局は散々だ。

おかげで塔矢に怒られてばかりだ。

あいつ、俺の対局にはすごくうるさいんだよなあ。

俺もあいつの暮にはうるさくなっちまうけどさ。

でもなんとか勝ち拾ってる。

プライベートを暮に持ち込むなんて情けないからな。

……持ち込んでるんだけどさ。

持ち込んでるよ。

それも認める。

だって頭から離れてくれないんだ。
できることなら考えたくないのに……。

最近のヒカルの対局はなーんか変だ。

一応勝ってはいるけど、どうもこうすっきりしないというか、力押しというか、無理矢理というか、うん……スマートじゃない。

まあ昔は「スマート」なんて言葉とはかけはなれた性格してたけど。

こんなんじゃ塔矢くんに怒られちゃうんじゃないかなあ。

毎日のように暮について言い合ってるって言ってたもんね。

仲がいいんだか悪いんだか。

でも、なんだか面白い。

ヒカルってわかりやすいなあ。

……でもやっぱりおかしいのよね。それとは別で。

この前ばったり逢ったときも、なんか様子が変わったし。

なにかあったのかしら？

私が聞いたら駄目な話かしら。

さらさらと指に絡みつく髪。……とか。

腕に感じる心地よい重み。……とか。

すべすべで、絹みたいにやわらかい頬。……とか。

それから――

……駄目だ。

末期だ俺。

何を思い出してるんだ俺。

すっかりしろ俺。

ムズムズする。

ムカムカする。

イライラする。

……なのにもまた、触りたいとか思ってるなんて……。

とかだから思うなッてば俺！

ケダモノか俺！

……駄目だ、穴があつたら入りたい気分だ。

俺だッて馬鹿じゃない。

……いや馬鹿だけど。

しかも鈍いけど。

和谷からもよく「お子様」とか言われるけど。

このむくむくとわきあがる感情がなんなのかくらい、ちゃんとわかってる。

本音を言ッと、わかりたくなかったけど。

……だッて面倒くさい……。

げんなり。

すごく疲れる。

まだなにも始まッていないこの状況でさえ疲労困憊なのに。

俺、なにやッてんだろ……。

あいつが悪いんだ、あいつが。

そっだ、あいつが悪いんだ。

寝言で人の名前つぶやいたり、泣いたり、ばかなこと言ッたりするから……。

……まあ確かに、うん、まあ、あの、あれだ、なんだ、うん。

……思い出すのはやめよう。身体に悪い。

つか、心臓に悪い。

くっそッ、なんであいつはあんなにふにふにしてやがるんだ。

「おい進藤。どうしたんだよーこの頃。俺と当たるときもあんな打ち方してみやがれ。百万返しにしてやるからな」

「……なんだ和谷か。明日だっけ、俺の相手」

「なんだよそのやる気のない態度。俺なんか眼中にないってか」

和谷がこめかみをぴくぴくさせて近づいてくる。

「いや、そういうわけじゃないけどさあ……。それどころじゃないんだよ……」

ああ、暮一色に染まっていた日々が懐かしい。

北斗杯、高永夏には腹が立ったけど、負けの記憶しかないけど、それでもあのころのほうがまだ心は平穏だった……。

いや、平穏じゃなかったけど……むちゃくちゃ悔しかったし腹が立ったけど。

でもなあ……今のこう、なんとも言えない感じよりは幾分マシっていうかさ。

なにやら面白そうな気配を感じ取ったのか、和谷がにやにやして顔を近づけてくる。

「ほほう。暮馬鹿のお前がそれどころじゃない、と。ほほう。ほほう」

「な、なんだよ」

「なんだよ。気になるじゃんかー。なにに、なにがあつたの？」

「なんにもねーよ!」

「なんだよなんだよ。あの幼なじみの美人さんとなにかあつたとか?」

「!」

「……いや、冗談だったんだけど……。進藤お前、顔が真っ赤、だぞ……?」

「まままま、真っ赤になんかなってねえよ！」

俺はあわてて顔を背けた。

しかし、すでに遅かった。

和谷は顔全開で笑っている。……ム力つく。

「……じゃあ、また明日」

「待った」

「……なんだよ」

「で、お前なにしたんだよ」

「なにつて、なんだよ」

「押し倒したりとかしちゃって逃げられちゃったとか？」

「お前じゃねえよ！ キスしたただけだ！」

「……キスしたんだ」

……しまった。

「いやでも、気づかれてはいな……っ」

「ふーん。寝込みを襲ったんだ」

……もう黙れこの口は。

真っ赤になつてうつむく俺の肩を、和谷はつんつんとつつく。

「あれ？ ただの幼なじみじゃなかったっけ？」

「……今もただの幼なじみだよ」

俺はぶすつとふくれた。

……やってらんないよなあ。

だから気づきたくなかったっつーのに。

お互いに大切な存在なのはわかりきってる。

大切に大好きな幼なじみだ。

……それで、それだけでよかったのに。
どうして、気づいてしまったんだろう？

「なんだ。告白してないんだ」

和谷が呆れた顔でつぶやく。

「する暇もねーよ。あかりは平日学校だし、俺は休日仕事だし」

「んなもん、時間はいくらでもつくれるだろ。幼なじみってことは、家も近所なんだろ？」

「……実はこの前もばったり偶然。……逢いたくないときも逢っちゃうのは、近所っていやだよなあ」

「へえ。で？ で？」

「逃げた」

「ふうん、逃げ……っておい」

だってしょうがないじゃないか！

変わらない笑顔で、あんなふうに笑いかけられて、鈴がりんって鳴るみたいな声で話しかけられて、意識してるからか一挙一動に眼がいつて……。

気がついたらくると背を向けて走り出していた。

「ヒカル？」

おどろいたあかりの声が、耳に残ってる。

……はあ、俺、暮のプロになっててよかった……。
気まずくても、学校で逢う可能性はないもんな。

「じゃあ、告白しないのか？」

「そういう段階じゃねえよ。俺はもう自分のことだけでいいっばい」

はーっと深くためいきをつく。

きつとまだ、意識し始めたばかりだから、こんなふうになってしまっただ。

時間がたって、あかりの顔を普通に見られるようになったら、またいつもどおりにつきあえる。

この気持ちが当たり前に心にしっくりとなじんだら……。しかし、和谷が不吉なことを口にした。

「そんなのんきなこと言ってる、とんびに油揚げってことになっちゃうかもしれないぞ」

「は？」

「別の男に彼女獲られちゃうかもってことだよ」

「……やめろよ。そういうこと言うの」

今は軽口につきあってられる余裕が本当にないんだ。

俺はげんなりと肩を落とす。

なんで俺、和谷なんか相談してんだろ……。

一人で鬱々しててもしょうがないしな……。

ちよっと自己嫌悪に陥るけど。

でもやっぱり、誰かに聞いてほしかったんだろうなあ……。

こういう話って、俺本当にわからないし……。

わからなくても全然いいんだけどさ。

興味ないし。

だから自分がこんな状況に陥るなんて本当に夢にも思わなかったって言うか……。

他の男ねえ……。

気づきたくもない事実気づいてしまったあの日。

……あかりって美人だったんだよなあ……。

まあ……それも……その……あかりが悪いんだ、あかりが。

しかし意識したその瞬間になんてことしてんだろ、俺。

いくらなんでも早すぎだろ俺。

……もてんのかな……。

中学のころはそんなでもなかったけど……。

鈍感な俺でも気づくくらいだから、他の男も気づいてるんだろう。そもそもあいつって好きな奴とかいるのかな？

いたら俺に泣きついたりしてこないか。

「でもま、そんなの負けた言い訳にすんなよな。進藤」

「しねえよ。勝つのは俺だ」

「ふっふっふ。恋の悩みで頭がイッパイなお前に勝てるかな？」

「るせっ」

あかりが原因でなんて負けられるか。

そんなことになったら……そんなことになったら……ただ負けるより、ずっと悔しい。

あかりはいつだって、……なにもなくても、力になるから。

塔矢と打つ前も、あかりと打ったおかげではりつめていた気がゆるやかになった。

——ひさしぶり。

——がんばってるね。

——昨日勝ってたね。おめでとう！

——ヒカル。

変わらない場所で、変わらないあかりが笑っていてくれるから、歩いていけるんだ。

きつと、きつと、どこまでだって。

そういや俺、あかりとはなにがあっても、きつとずっと一緒なんだろうなって、無意識のうちに考えてたんだよな。

そんな保証、どこにもないのに。

だからあのとき、あかりがいなくなってしまうんじゃないかって思ってた……。

佐為のときみたいに、なにもせずに、なにもできずに、気づかずに。

そんなのは絶対にいやだったから。

だからあかりを、ここにつなぎとめておきたくて――

……ここってどこだ？

いや、よくわからないけど――「俺の隣」……かな？

……自己分析って恥ずかしいもんだなあ。

和谷と別れて、いつもの帰り道を歩く。

この頃は、あかりとの思い出ばかりを思い出す。

こうやって歩いてると、後ろからあかりがくっついてきたよなあ。うざったく思ったことも正直あったけど、あかりが後ろにいない

と、なんだか物足りない気持ちになったことを覚えてる。

「ヒカル！」

そうそう、こんなふうに後ろから――

え？

「あかり？」

ふりむけば、求めていた変わらない笑顔がたたずんでいた。

気になって、気になって、やっぱり気になって。

友達と別れて、やっぱりどうしても気になるから、ヒカルの家に行こうかどうか悩んでいて……。

仕事のこともあるし、毎日毎日遅くまで暮を打ってるヒカルに、迷惑じゃないかなあ、とか、単なる杞憂かもしれないとか……。

そんなことをうつらうつら考えていたら、目の前に見慣れた背中が映し出された。

後姿だって、私には一目でわかる。

何年この後姿を追いかけてきたのかな。

たまには逆でもいいんじゃないかと思うけど。

でも、まあ、どっちでもいいんだ。

だってもう、顔がにやけているのがわかる。

心がほくほく弾けてる。

「ヒカル！」

私の声に、ヒカルはびっくりしてふりむいた。

「あかり？」

「奇遇だね。今、帰り？」

「あ、ああ。お前も？」

あ、まだもってる。

なあんかやっぱり、この頃変だよねえ。

目も泳いでるし。合わせようとしないうつ。

「ヒカル」

「な、なんだよ」

だからもってるってば。

私がじとつとねめつけると、ヒカルはうつと口ごもった。

「……ヒカル、なにか隠してない？」

「……いや？ 別に」

「ふうふううん」

「……わかった。ある。あります。隠してます。でも訊かないで」

ヒカルが「降参」と手を上げる。

ちえつ。

話してくれないのか。

そりゃあヒカルの頭を占めているのはほとんど暮のことばかりで、その話になると私なんか力になれないかもしれないけど。

……やっぱり、ちょっと……。

「お前も学校帰り？」

「秘密」

「……あ、そう」

対抗して、少しすねてみる。

……別に秘密にしなきゃいけないことでもなんでもないんだけどさ。

ただの学校帰りだし。

でもさ、でも、ヒカルは話してくれないのに、私ばかりあけっぴろげっていうのも口惜しいじゃない。

そういえば、と、私は思い出したことを口にした。

「明日は和谷って人と対局なんだね」

「ああ、週間暮見たのか？」

話題が変わってほつとしたのか、ヒカルが話に乗ってくる。あいかわらず視線は反対方向だけど。

なんなんだろう。

怪しいなあ。

「うん。ヒカルと同期の人だね」

でもまあ、つつこまないでいてやるか。

「お前も逢ったことあるよ。ほら、前に差し入れ届けに来てくれたとき」

「ああ、あの人」

ヒカルじゃなかったから、ちょっと緊張しちゃったことを覚えている。

和谷って人の顔は……あれ？

よく覚えてないけど。

でもそれなりにかっこいい人だったような……。

「やりづらいんじゃない？ 友達なんでしょ？」

「そんなこと言ったらやりづらい相手ばかりだよ。和谷とは院生のときから腐るほど対局してるからな。全然余裕」

「おお、頼もしい」

「——お前は？」

「え？」

「週間学校、なんて雑誌は出てないからな。学校ではどうなんだよ」

ちよつとぶつきらばうに、ヒカルはたずねる。

あれ、もしかしてちよつとてれくさい？

まあヒカルが私の近況聞いてくるなんて、あんまりないもんねえ。

「どうって言われても……。あ、囲碁部に入ったよ。同好会だけど」
そうだそうだ。
報告を忘れてた。

「久美子と二人で入ったの。先輩が大喜びしてたよ」
「なんで？」
「今まではむさくるしい男三人だけだったからって」

ぴくつ。

あれ？
今、ヒカルの肩がふるえたような……。

「ヒカル？」
「いや、なんでもない、なんでもない」
「？」

「……で？」
「でって、なにが？」

「……楽しいのか？」
「うん。楽しいよ。先輩たちみんな優しいし。さすがに、ヒカルほど強い人はいないけどね」
「当たり前だろ」

あれ、なんで怒ってるんだろ？
私になにかおかしいこと言ったかしら。

「ねえヒカル。なにか怒ってる？」
「怒ってない」
「眉、よってるけど」

「……よつてねえ」

ヒカルはくいくいとみけんをのばす。
なーんか、変だなあ。

あ、そうだ。

「ヒカル、約束覚えてる？」

「なんだっけ」

「もう！ 指導暮してくれるって約束！」

「ああ、ああ。覚えてる」

「嘘」

「……いや、嘘じゃないって」

あいかわらず、ヒカルは私と顔を合わせようとしない。

むかむかむかつ。

私はこらえきれなくなつて、ぐいっとヒカルの両頬をつかんでひきよせる。

ヒカルはびっくりして真っ赤になつたけど、そんなこと気にして
いられない。

「いいかげんにしてよね！ なんで私のほつを見ないのよ！」

「べ、別にそれは——は、離せよ！」

「いや！ なんだっていうのよ、気になるじゃない！ 私に詮索されたくないなら、もっと普通の態度で接してよ！ 気にしてつて言つてるようなもんじゃない！」

せつかくひさしぶりに逢えたのに。

次に、いつ逢えるかわからないのに。

学校に行つたつてヒカルはいない。

私の「日常」に、ヒカルはもういない。

「特別」な時間を待つしかない。

なのに、ようやく逢えたのに、まともにヒカルの顔見れないなんて。

そんなの、そんなの――

「わかったから、離せて！」

「いや！ わかってないもの！」

「っ！」

ヒカルはぐいつと私の両腕を掴んで、ひきはなす。

その力があまりにも強くて、私は抵抗できなかった。

まっすぐなヒカルの瞳が私を射抜いて、私は身動きができなかった。

ヒカルの顔が近づいてくる。

そして、頬が触れるか触れないかのところで、止まった。

声が出ない。

胸が、苦しい。

「……わかったから」

しぼりだすような声で、ヒカルはつぶやいた。

そのあと、ヒカルはなにも言わなかった。

私も、なにも言わなかった。

私の家の前で、ヒカルが「じゃあ」って言っていたような気がしたけど、よく覚えてない。

ベッドになっころがって、枕に顔をうずめて。

思い出すのはヒカル之眼と、掴まれた手首に残された熱だけで――

その、熱に、侵されて。
身体中が熱くなる。

熱に、侵されて、動けなくなる。
思い出すだけで、支配される。

――最悪、かもしれない。
自分が自分じゃいられなくなる。
自分がわからなくなる。

もやもやとして、ぐらぐらとして、ゆれる。

……ちがう。

わかりたくないものを、無理矢理、眼の前に見せつけられている
ような――そんな感覚。

4 彼氏彼女の事情（後書き）

お互いに、ぼんやりと自覚はしていますが、はっきりとはしていません。な、お話。ヒカルはヒカルで大変。あかりはあかりで大変。和谷は和谷で大変（そうか？）。次はちょっと波乱……かな？

5 芽吹く心（前書き）

つい、あかりに不器用な態度しかとれないヒカル。けれど足踏みをしたままでは、どこにも行けないから。気づいた気持ちに名前をつける。そしてあかりは、一大決心をして一步を踏み出す。

5 芽吹く心

神様。

私に勇気をください。

藤崎あかりは、幼なじみである進藤ヒカルの自宅前で両拳をぐつと握りしめ、きつと家を睨みつけていた。

女は度胸である。

その一時間ほど前。

ヒカルは和谷の家でリーグ戦をしていた。この頃のヒカルは調子が上がらず、勝率もやっと五割といったところだった。

とはいえ、この勝率は和谷家主催のリーグ戦の話で、手合いの勝率はまだまだ好調だ。

今日集まったのは大家である和谷、伊角、小宮、そしてヒカル。対局したのは和谷と伊角、小宮とヒカル。結果は伊角の二目半勝ち、小宮の中押し勝ちだった。

ヒカルは検討する気も起きずに、ごろんとその場に横たわった。

「不調が続いてるなあ。進藤」

小宮のほうも検討する気はないらしい。今回の勝因はヒカルのミスで、小宮がなにか仕掛ける前に、一人で勝手にくずれていたのである。検討するまでもない。じゃらじゃらと碁石を片付けながら、小宮が笑った。

「でも手合いの調子は相変わらず好調なんだよな。なんで？」

「なんでって……手合いで負けるわけにはいかないだろ」

「そりゃあそうだけど。進藤、なにかあったのか？ 俺でよければ話聞くけど」

「……小宮、いい奴だな」

真摯な言葉に、ヒカルはじんわりと切なくなった。

あれから一ヶ月がたった。

あれから、というのはどこからか。

あかりにキスをして、そんな自分の行動が信じられなくて、あかりを避けて避けて避けまくっていたらあかりに怒られて、思わずあかりの両腕を掴んで——道の往来でキスをしようとした。途中でやめたけれども。

きつと、あかりは気づいていない。けれどなにかを感じ取ったのだろ。その後は終始無言で、どうやって別れたのかも、ヒカルは曖昧にしか覚えていなかった。

そしてそれから一ヶ月。今日でちょうど一ヶ月。女々しくもヒカルはあかりに逢えなかったこの一ヶ月間、視界に入るカレンダーから眼を背けることができなかった。

でもあかりには逢えなくて、がむしゃらに碁に集中することでそれはなんとかふりきれた。けれど和谷の顔を見ると、どうにもあかりのことが衝動的に思い出されて——和谷にはあかりのことをいろいろ知られてしまっているの——碁に集中することができなかった。

我ながら情けない、と思う。

「進藤は恋の悩み募進中なんだよな」

和谷が余計な口を挟む。そう、全ては和谷のせいなのだ。いや、もつと根本をたどると、辛抱の足りない、精神的に未熟な自分のせ

いなのだが。

ヒカルは和谷を睨みつけるが、和谷はちつともこたえていないようだ。

「へえ。進藤、好きな奴がいるんだ」

小宮が意外だなあと眼をきらめかせる。

「どんな子？ 可愛い？」

「……まあ、多分」

「多分ってなんだよ。進藤。すごい美人じゃないか」

和谷がしょうこりもなく口を挟んでくる。伊角は「余計な口は挟まないでおこう」と一人で詰碁を始めてしまった。

「小宮は、彼女いる？」

「いるよ。つか、最近できた」

あっさり和小宮がうなずいたので、伊角も思わず碁石をからんと手から落としてしまった。和谷も伊角も彼女なしである。

ヒカルもおどろいて、三人で小宮に詰め寄った。

「聞いてねえぞ、小宮！」

和谷は眼の色を変えている。彼女がほしいお年頃らしい。

ヒカルはその和谷の心情は理解できなかったが、小宮の「彼女」については興味があった。

「別にそんな、報告するほどのことでもないじゃないか」

「相手は誰なんだ？」

「んー。まあありきたりで悪いんだけど、幼なじみ」

ぴくつとヒカルの肩が震える。

しかし和谷も伊角も、そんなヒカルの様子にはかまっていられないようだ。

なれそめをせがまれ、小宮は「しょうがないなあ」とぼつりぼつりと話し出す。

「別になれそめってほどもないんだけど……。生まれたときからのお隣さんでさ。一つ下だったんだけど、小さいころはずっと一緒に。でもまあ、俺が暮を始めてからは疎遠になってんだけど……。近所だからたまに逢いはするけど」

まるで自分とあかりのようだ。ヒカルはつい真剣に聞き入る。

そこで和谷が「あれ？」と首をかしげた。

「でも小宮、昔からもててなかったか？ けっこう彼女をとつかえひつかえしてたような」

「うん。してた」

これまた小宮は素直にこっくりとうなずいた。

「幼なじみって微妙なポジションなんだよなあ。なんかもう兄妹みたいなもんだからさ。逢わなくなっても親しみは消えないし、かといって恋愛対象にはならないし。全然異性として意識できなくてさ」

逢わなくなっても親しみは消えないし、全然異性として意識できなくて――

ヒカルもそうだった。あかりをそんなふうな眼で見たことなかった。

でも、大切だった。佐為みたいに、もう、自分の空気みたいな存在だった。

「でも、あいつに彼氏ができてさ、それを報告されたときにいきなり自覚したんだよなあ。近くにいすぎて気づかないって事、ない？」

……ある。ヒカルは心の中で激しく同意した。

可愛い女の子や恋愛に、まったく興味が無いわけじゃない。でも、どこか冷めていた。夢中にはなれなかった。それはやっぱり「暮」の存在が大きかったからだけど……。

あかりが、いたからだ。

その事実には、ヒカルはようやく思い当たる。あかり以上に好きになれる女の子なんていない。あかり以上に、この心の中に侵入してくる奴なんかない。

無意識にわかっていたから、他人の恋愛にも自分の恋愛にも、無頓着でいられたのだと、今ではわかる。

「まあそれから二転三転あったんだけどさ。結果的にはその彼氏から奪っちゃったことになるんだけど」

「おお、略奪愛！」

「和谷。その言い方はどうかと……」

伊角と和谷のかけあいには、小宮は「なんでもいいよ」と笑う。その顔はとても穏やかだった。

「なんでもいいんだ。手遅れになる前に気づいてよかったって。もしあいつが俺のほうを向いてくれなくて、俺以外の誰かについて思うだけで、どうしようもなくなっちゃうから」

あかりの笑顔が、あかりの好意が、自分以外の誰かに――

そう思っただけで、心がちぎれそうだった。

「小宮がそんなこと言うとはねえ……」

和谷の中の小宮の印象は、けっこう軽くて、あっさりしていて、
「去るもの追わず、来るもの拒まず」で、けっこう遊び人のイメージだった。

もちろん、碁に関しては真剣だった。

和谷は感心した。恋は人を変えろというが、本当のようだ。
黙ってしまったヒカルに、小宮はくるりと表情を変えた。

「進藤、なにか参考になった？」

「……うん。けっこう」

「じゃあ、もう一局打つ？」

「打つ。今度は負けない」

ヒカルの目に鋭さが戻り、小宮は気をひきしめた。ヒカルと打つのは口惜しい。その才能の差を感じずにはいられないから。しかし、同時に心が躍るのだ。彼の放つ一手の光に魅入られて――

結局その日、その一局の検討が長引いて、家に着いたのは夜の七時を過ぎていた。

玄関には見慣れぬ女物の靴が一足。……どこかで見たような。

「ただいま」

「お帰りヒカル。遅かったわね」

「うん。検討が長引いてさ。ところで母さん、誰か来てるの？」

「え？ 別に誰も来てないわよ。……あ」

ヒカルの母は「忘れてたわ」と口元を押さえた。

「母さん？」

「……あかりちゃんが来てるんだったわ」
「あかり？」

ヒカルは思わず顔を引きつらせた。ちょっと待て。心の準備が。

「三時間くらい前に来たのよ。『ヒカルいますか』って。今日はそんなに遅くならないって言ってたでしょう。だから上がって待っててって言ったんだけど……」

「忘れるか？ 普通。俺の部屋にいるの？ あかり」

「ええ。だって物音一つしないんですもの。つい……」

「つい、じゃないよ。母さん」

ヒカルは深々とためいきをつく。三時間前って……。

心の準備はまったくできていなかったが、ヒカルはあわてて階段を駆け上がった。

しかしドアノブに手をかけようとして、ぴたっと動けなくなる。

……逢ってなにを話せばいいというのだろうか？

——あいつが、他の誰かに……。

小宮の言葉を思い出す。よし、とヒカルは目の前で空手の「押忍」のポーズをとる。

そしていきおいよくドアノブをまわす。

「おいあか……り……」

その光景を視界に捉えた瞬間、ヒカルはへなへなとその場にへた

りこんでしまった。

（……なんだ、この状況……）

ヒカルの気も知らずに、あかりはヒカルのベッドに寝そべって、くうかくうかと寝息を立てていた。

（……危機感とかってないのか……。こいつ……）

幼なじみとはいえ「男」の部屋で、いくらなんでも無防備すぎるんじゃないだろうか。

意識していないといえばそれまでだが……。それはなんだか面白くない展開だ。

こっちは意識して意識して意識して、まともに顔も見れそうにないのに、それでも手遅れにはなりたくないからと清水の舞台から飛び降りるつもりでこのドアノブをまわしたのだ。

開けてみればこれである……。脱力もするだろう。当然。

（小宮がうらやましい……）

二転三転あったかもしれないが、まさか帰ってきたら好きな子が自分の部屋のベッドですやすや眠っている状況はなかったであろう。しかも布団までかぶって。

しかしその幼い寝顔を見ていたら、毒気がぬかれてしまった。やれやれ、とためいきをつく。

床にどかっと腰を下ろすと、あかりがぴくつと動いた。

（お、起きるか？）

二の轍を踏まないように、ヒカルは顔をのぞきこまないようにす

る。

「……ヒカル？」

「おう、起きたか」

「えっ……あれ、私、眠っちゃった……？」

布団までしっかりとぶって、「眠っちゃった？」もないだろう。
と心の中でつつこみつつも、ヒカルはいろいろうしろめたい手前、
腕時計を覗いて時刻を報告してやる。

「只今7時21分」

「嘘！」

「本当」

「……ねえヒカル」

「なんだ？」

「なんで後ろ向いたままなの？」

びきつ。

（やっぱり不自然だったか……）

あかりのなにも考えていないようでも絶対にヒカル
を意識なんかしていないあの目でとっくりに見つめられると、……今
のヒカルには理性が働きそうもない。

自覚なんてするもんじゃない、と、ヒカルはしみじみと思う。こ
の気持ちに気づかなければ、「幼なじみ」を思う存分満喫できたの
に。

しかし小宮のいうとおり、手遅れになった後気づいても……だし。
大いなる矛盾がここに存在する。

（仕方ない、いっせーのせで、覚悟を決めてふりむこう。がんばれ俺。いっせーの）

「……あのねヒカル。そのまま訊いて」

出鼻をくじかれ、ヒカルはふりむきかけた首を無理矢理元に戻すはめになった。

あかりはヒカルがふりむかないことを確認してから、布団の上に正座する。

「突然来て、ごめんね」

「いや……かまわないけど」

「しかも寝てて、ごめん」

「……それは、お前、もうすんなよ。心臓に悪いから」

「心臓？」

「いや、なんでもない。ってか、お前、同じこと、他の男の家に رفتたときとかにするなよ」

「他の男って……こんなふうには遠慮なく部屋に上げれるの、ヒカルだけだよ。私、男の子の友達なんてそんなに多いほうじゃないし……」

その言葉にじんわりと地味にうれしさをかみしめていたヒカルがいたことを、表情が見れないあかりは知らない。

（って、にやけてる場合じゃないって。俺）

あかりはしょんぼりとした声で続ける。

「あのね、別に寝ようと思ってたわけじゃないんだよ。ただ、手持ち無沙汰で……。でね、ベッドがあったから、ヒカルはいつもここ

で眠ってるんだなって思ってた。思ったらその……ちょっと、どんなふうかなあと思って。……ごめん」

そうして布団にもぐりこんだら、ヒカルのおいがして、ヒカルはいないけれど、ヒカルと一緒にいる気がして、うれしかった。

そんな心地よいうれしさにつつまれていたらうつとうとしてきて……とは、恥ずかしすぎてさすがに言えないが。

「……寝てた理由はわかったよ。で？　俺はいつまでこうしていればいいわけ」

「う……もうちょっと」

「はいはい」

なんだか昔に戻ったみたいだなあ。

ヒカルは自然に笑みがこぼれてしまう。顔を見ないでいるからか、自然に言葉が出てくる。うん、大丈夫だ。

「それでね、その……話っているのは」

「うん」

「一ヶ月逢えなかったでしょ。それがね、その……それでいろいろ考えたんだけど」

「うん？」

「やっぱり、仲直りしたい」

そうきたか。

ヒカルは天井を仰いだ。この前の出来事を、あかりがどう受け止めているか、それだけがずっと気がかりだったのだが……。

「……私、怖かった。ヒカルのこと」

ぎく。

ヒカルは肩をこわばらせる。確かに、けっこう力を入れてしまった気がする。

あちゃあ、と頭を抱えなくなった。

「ヒカルのこと、怖いって思ったのは初めてだった」

「……ごめん」

「謝ってほしいわけじゃないの」

「……ごめん」

顔が見えないから、怒ってるかどうか声からは判断できなかった。それでも長年の付き合いだ。ヒカルは思案する。

怒気を含んでいるわけでもない。いつもより少しだけ小さい声。

あかりは、なにを思ってるんだろう？

「ヒカルがなにを考えてるのかわからなかった。……それもあったし、ヒカルが、私の知ってるヒカルじゃないみたいで。でも……やっぱり……逢えなかったら、逢いたいと思った。……ヒカルに逢えなくて、寂しかった」

これは告白だろうか。

ヒカルは頭をひねる。いや、どう考えても「告白」じゃない。少なくともヒカルの求めている「告白」じゃない。

「……ヒカル、なにか怒ってた？」

「……怒ってないよ」

「じゃあ、なにか、悩み事？」

「……まあ、近いかも」

「それでイライラしてたの？」

「……うん、まあ、そんなところ」

厳密には違うが、訂正するのも面倒だったので、ヒカルは適当に相槌を打つ。

「ヒカル」

「うん」

「……抱きついてもいい？」

「ぶっ」

思わぬ展開に、ヒカルは思わずふりむく。——ふりむいて、おどろいた。

あかりが、どんな顔をしているかと思った。

「……駄目？」

「駄目……っていうか、その……あかり。顔、真っ赤だけど……」

「……自覚はある」

耳まで真っ赤になって、あかりはうつむいた。

「だって、いやなんだもん」

「なにが？」

「ヒカルを『怖い』ままでいるのが」

「……そんなに怖い？」

ヒカルがゆつくりと、あかりの頬に手を添えた。

あかりは拒まない。逃げない意思を宿した眼で、ヒカルを射抜く。
——どうして今まで気づかなかったんだろう？

ヒカルは自分の鈍さに、つくづく思い知らされる。もうずっとずっと前から、ヒカルはあかりが好きだった。こんなにもまっすぐに、自分を見つめてくれる女の子は、きつとあかりだけだから。

「……怖くないよ」

そしてあかりは笑うのだ。少しだけ、はにかむように、照れくさいように、でもとびきり美しく——笑うから。

あかりをひきよせる。

細い肩。壊さないように、やさしく。

「……やっぱり、ごめんな」

「——ちゃんと眼を見てくれたから、もういいよ」

「うん。もう、そらさないから」

向き合っていく。ちゃんと、大事にするから。あかりを好きだつて気持ちる。

あかりは両手をヒカルの背にまわして、おそろおそろ抱きしめた。広い肩。大きい胸。——昔は、あかりのほうが大きかったのに。あかりは怖かった。力強いぬくもりが、怖かった。——怖かったのに、どきどきした。

（これって、変かなあ？）

怖かったけど、嫌じゃなかった。今もそうだ。

今は怖くないけど、やっぱりどきどきする。心臓の音がうるさすぎて、ヒカルの声が聞こえないくらいに。

でも、嫌じゃない。ずっとずっと、こうしていたくなる。

「あのね、ヒカル」

「うん」

「……指導暮、打ってくれる？」

「……今日は遅いから、明日な」

「仕事は？」

「夕方は空いてる」

「……そっか。うれしい」

あのね、ヒカル。

本当は、もっともっと、言いたいことあったんだよ。

本当は、悩んでることとか聞きたいし、文句だって言いたいし。

ヒカル、私、わかったんだよ。

この前、告白されたんだよ。

その時に、ヒカルを思い出したよ。

ヒカルだったら、ヒカルが好きって言うてくれたら、私、うれしいくてうなずいていた。

目の前にいるのがヒカルだったら、私、「うん」って言うてた。

それってね、そういうことでしょう？

気づくの、ちょっと遅かったかなあ。

でも、逃げないって決めたんだよ。

逃げてもやっぱり、「逢いたい」って思っちゃうから。

気持ちには、止められないから。

だから——まだ、言えないけど、言ったら、ヒカル、どんな顔するかな？

そんなことをあかりが腕の中で考えているとはつゆ知らず、ヒカルは必死に今日小宮と打った一局の検討を思い出し、理性が飛ぶのをどうにか抑えていたのだった。

ずっとずっと、二人でいた。

いつからだろう？

始まりはきっと、誰も知らない。

気づいたら始まっていた。

気づいたら好きだった。

知ることが、そしてそこから踏み出せることが、大切だから。

5 芽吹く心（後書き）

ヒカル・あかり、ともに自覚編でしょうか。遅。ようやく恋の入りに立った感じです。遅いですね。でも幼馴染ってこの焦れっさがいいんですよね！近いんだけど近すぎていまいち距離感がわからなくなっちゃうみたいな。ま、実際の幼馴染ってこう甘酸っぱくはならないと思いますけど。

6 水面の波動（前書き）

お互いに気持ちを自覚したヒカルとあかり。けれどその先、どうすればいいのかは、まだやっぱりよくわからない。そんなとき、「彼」が、あかりの心を見透かしたように笑う。――やめて。その「心」は、ヒカルにしか見せたくないのに。ほかのだれにも、わかってほしくなんかないのに。

「彼」はオリキャラです。あとで名前も出てきますが、今回は出てきません。

6 水面の波動

「ヒカルが好き」

そう自覚した瞬間から、私の中で何かが変わった。変わったわけじゃない。

気づいただけ。

でも、「気づいた」から、やっぱり、「気づいていなかった」時に比べたら、やっぱり変わった……と思う。

……自覚してからは、ときどき頭が痛くなった。

——恋愛なんて面倒くさい。

なんて、女の子が思ったらやっぱりマズいのかなあ。

「あかり、この頃なにかあった？」

ぎぎくつと、あかりは身をこわばらせた。ぎぎぎ、と機械のように久美子の方をふりむく。

「……別に？」

自分でも視線が泳いでいるのがわかったが、どうしようもなかった。あかりは元来嘘がへたなのである。そもそも、それほど嘘をつく必要のある人生ではなかったし、嘘をつくのは気分的に好きじゃ

なかったの、進んで嘘をつくこともしなかった。

が、ここはあかり人生史上稀にみる「嘘をつかなくてはいけない」場面だった。いや、「つかなくてはいけない」わけではなく、「あえてつきたい」場面だろうか。

久美子は「？」と首をかしげる。そんなにおかしなことを聞いただろうか。

「なんでそんなこと聞くの？」

「うーん。なんとなく雰囲気変わったかなあって」

「雰囲気？」

「うん。色気が増したというか、艶っぽくなったというか」

「ななななな、なにを言ってるのよ、久美子！」

あかりは顔が真っ赤になるのを止められなかった。

ぼとつかばんを落としてしまう。あわてて拾うが、時はすでに遅かった。

久美子が眼を輝かせて聞いてくる。

「え？ なになに、なにかあったの？」

「な、な、な、なにもないよ」

そう、なにもない。ない……と思う。

あかりは口元を押さえた。思いつかないようにしているのに、こんなふうになつた瞬間に思い出してしまふ。頭の中が、なにやらおかしくなってしまったみたいだ。

特別な「なにか」があったわけじゃない。ただ、ずっとずっと昔から心に芽吹いていた存在に気づいただけだ。あかりの知らない間にむくむくと、この気持ちだってあかりの一部なのに、「まるで知らない」とそっぽを向いて自分勝手に成長してしまった。

まだうまく折り合いをつけることはできないけれど、この気持ち

をなくすことなんてきつとできないから、なんとかやっていくしかない。

「藤崎さん」

とはいいつつも、やっぱり不安はつきないわけで……。

あかりは「はあ」と息をつく。そもそもあのヒカル相手にこんな感情を持ってしまうなんてなんたる不覚だろうか。あの、ヒカルである。

朴念仁で、鈍感で、暮にしか興味がなくて、どう考えてもあかりを「女の子」として意識しているとは思えない。

「……藤崎さん？」

そもそも、そういったことに興味があるのかないのか……なさそうだ。

「女のカタマリ苦手」とか言って、いつも男子とつるんでいるよ
うなやつだったし。

ヒカルの能天気な笑顔を思い浮かべて、あかりは「むかつ」と苛
立ちを感じる。

「あの、藤崎さん？」

大体ヒカルはあかりをなんだと思っているのだろうか。

先日、ヒカルとあかりはちょっとしたいざこざがあつて、ぎくし
やくした関係にあつた。どうしてそうなったのかは、あかりにもう
まく説明できないのだが。その一件でヒカルへの気持ちを見つけた
あかりは、「このままでは駄目だ」と一念発起してヒカルの家に行
ったのだ。

ヒカルがいなかったの、あかりはヒカルの部屋であろうことが

くうくうと寝入ってしまったのだが、まあそれは置いておこう。

（……だってそりゃいくら自覚したとはいえ幼なじみであることに変わりはないし……。いまさら緊張なんてできないんだもん）

とはいえ、やっぱり本人を目の前にした時は心臓ばくばくものだったが。おかげでヒカルの眼をまともに見ることができなかった。

「……藤崎さん。あの、聞こえてる？」

それでもがんばって、がんばって、そりゃもうがんばって、これ以上ないというくらいにがんばって「抱きついてもいい？」と言ったことを、どうせヒカルはわかっていないんだろう。

ヒカルの胸の中は安心して、でもとても心が熱くなって、でも、その熱が愛しくて、その腕を離したくなかった。ずっとずっと、その胸の中にいたかった。

……とかいう乙女心を、ヒカルが理解しているはずはないのである。どうせ幼なじみが泣きついてきたから「まだまだ子供だなあ」とあやすような気持ちで抱きしめてくれただけなのである。

それはやっぱり、やっぱり、自分ばかりがヒカルを求めているように――

「……面白くないなあ」

「藤崎さん」

「え？」

そこでようやく、あかりは自分と呼ぶ声に気がついた。顔を上げると、クラスメイトの男子生徒の一人が困った顔で笑っていた。

「ずっと呼んでただけ……。なにか、考え事でもしてたの？」

「え、えつとまあ……そんなところかな。ごめんね、気づかなくてなにか用事だった？」

頭から無理矢理ヒカルを振り払って、あかりは笑顔で応対した。

「僕たち、生物の係だろ？ 先生がプリント取りに来てくれって」

「プリント？ また課題かなあ」

「多分ね。あの先生、馬鹿みたいに課題出すからさ」

「あの先生の担当してるクラスって、生物の平均点が異様に高いよね」

「課題サボると怖いからね」

あかりはくすくすと笑う。よかった。いつもの調子が戻ってきた。よし、と心の中でガッツポーズをして、あかりは席を立った。

「じゃあ、もらいに行こうか。いやだけど」

「いやだけどね」

ほら、ヒカル以外の男の子なら、全然大丈夫だ。むやみに苛立ちを感じることもない。胸が痛くなることもない。笑っている顔を見るだけで、心がぐつとしめつけられるようなこともない。

心は静かに揺れるだけ。ふわふわと、波打っただけ。

彼との距離は遠い。肩一つ分の距離。その距離を保ちながら、廊下を歩いた。けれど「遠い」とは思わない。それが当たり前前の距離だからだ。

ただ、ヒカルと比べると遠いだけだ。それを寂しいとは思わない。彼との距離を、あかりは縮めたいとは思わない。

職員室で山のようなプリントを手渡され、二人で分担して持ちながら、教室へ戻る。

「藤崎さんって、男子苦手？」

ふいに、彼が尋ねる。

あかりはきょとんとしながらも、首を横にふった。

「そんなことないけど……。どうして？」

幼なじみがヒカルだったせいか、あかりは一般的に見ると、男子とよく会話をするほうだと思う。すすんでおしゃべりしたりはしないし、やっぱり女子と話しているほうが楽しいが、話しかけられれば話すし、クラスメイトなら挨拶もする。苦手だと感じたことはない。

「『距離』があると思って」

彼はにつこりと笑って言うと、さっさとプリントを配り始めた。

——あかりはなぜか、その笑顔が頭にこびりついて離れなくて

(……距離……)

彼と、あかりの距離。

ヒカルと、あかりの距離。

あかりは彼というより、ヒカルというほうが好きだ。彼と手を繋ぎたいとは思わない。彼に、抱きしめてほしいとは思わない。好きだからと自覚する前から。それは彼だけではなく、ほかのどんな男の子と比べても変わらない。

考えるまでもなかった。当たり前のように、あかりの中に存在していた思いだったから。

……そんな心が、見透かされた気がした。どうしてだろう？

そんなことを考えている自分が、とてつもなく恥ずかしく感じた。

自分でもうまく扱えないこの気持ちを、誰にも知られなくなかった。
——ヒカル以外にさらけだしたくなかった。久美子にさえ、大切な親友にさえ、見せたくないと思っていた、大切な大切な心。それを暴かれた。そんな気がして、あかりはざわめく心をしずめることができなかった。

（……だからってなあ。私もけっこう、行動派だよなあ）

目の前にはでかかど「日本棋院」の文字。今日は手合いのある日だから、ヒカルもいる……はず。

いてもたってもいられなくなり、ヒカルの顔を見て安心したくて、学校が終わったと、あかりは日本棋院に直行したのだ。

ヒカルの家でもよかったが、一刻も早く逢いたかったから。

（……もう終わっちゃったかなあ。あ、検討してるかもしれないよね。……でももしかしたら、和谷さん、だっけ。あの人の家に行っちゃってるかもしれないんだよね。……ヒカルも私も携帯持ってないからなあ）

こんなときは、携帯って便利だなと思う。しかしあかりは、若者としては非常に珍しく、携帯が苦手だった。友人にも「買いなよ」と薦められるのだが、いまいち乗り気になれないのだ。

そもそもあまりメールが得意ではない。あかりは結構猪突猛進型なので、話したいことは直に逢って話したいし、無理なら電話でもいい。自分の口から、自分の言葉で、自分の気持ちを伝えたい。

（ヒカルが持っていないのはただ単に……だだくさんだろうな。う

ん)

ヒカルは、人に束縛されるのがあまり好きではないタイプだし、携帯を持つということは時間や人に束縛されるということだ。ヒカルにとって大切なのは「暮」だ。その世界に、きつと携帯電話のようなものは必要ないんだろう。

でも、こんなときはやっぱり、便利だなと思ってしまう。

(少しくらい束縛したいときもあるよね……。やっぱり)

入って待っていようか。いやでもかし……。うつむ。悩みどころである。

あかりにはなんとなくためられた。ここはヒカルの「プロ」としての世界だ。そこに、あかりの幼なじみのヒカルはいない——気がする。

ヒカルにこんなことを言えば、「馬鹿」と一蹴されるだろう。「俺は俺だろう?」と、ヒカルはきつと笑う。その笑顔を見ていると、あかりも「そうだなあ」と思う。思うが……。不安は完全にはぬぐいきれないものなのだ。

——誰にも見せたくなかった。

『ヒカルが好き』

戸惑いと不安ばかりで、でも、うれしかった。ヒカルが好きな自分、愛しかった。

本当に本当に馬鹿かもしれない。あんなことで、何気ないたった一言で、ここまでゆさぶられてしまうなんて。

じんわりと、涙が瞳からあふれる。あかりははつとして、あわててその涙をぬぐう。あかりは、この頃泣き虫になってしまった。

昔は確かによく泣いていたが、小学校高学年になるころには卒業

していた。なのにまた——泣き虫に逆戻りしてしまった。最近
泣いてばかりだ。

原因は——わかってる。口惜しいけれど、負けた気分になる
けれど、認めるしかない。

「……ヒカルの……ばか」

「開口一番それかよ」

「きゃあ！」

いきなり耳元で不機嫌そうな声が聞こえて、あかりはびっくりし
てとびのいた。

声と同じ不機嫌そうな顔をしているヒカルがそこにいた。

「ヒ、ヒカル」

「……なんでまた泣いてるんだよ」

あかりの涙に気づいて、ヒカルが呆氣にとられたように、一瞬で
不機嫌そうな顔から困った顔になる。あかりはごしごしと眼をこす
って、無理矢理笑顔を作った。

「べ、別に何でも」

「なんでもなくはないだろ。だいたい、なんでこんなところにいる
んだよ」

ヒカルに逢いにきたの。

「た、たまたまとおりがかって」

……とは、やっぱり言えないあかりだった。情けない。

「ふうん、たまたまねえ」と、ヒカルは明らかに訝しげにあかり

をねめつけた。

「で、なんでいきなり俺がばか？」

ヒカルの問いに、あかりは「う……」と口ごもる。
なんでって、なんでって、それは――

ヒカルを好きだって気づいたせいで、泣き虫に戻っちゃったから。

「そ……それはその……」

とはやはり言えずに、あかりはもごもと言葉を濁すことしかできない。

そんなあかりの様子にますますヒカルは疑いを深めた。怪しい。
どう考えても怪しい。

うつむいて、こっちの顔を見ようとしてもしない。そもそも日本棋院に「たまたま通りかかった」が怪しい。

（……日本棋院に俺以外の知り合いなんていないよなあ。でも別に家は近所なんだし、俺に逢いにきたってのも変だし……）

微妙な乙女心なんてものを理解できる脳みそを、ヒカルは持つていなかった。

（……和谷とか？ あとは塔矢くらいか……。でも親しいってほど親しくはないよな……）

二人無言になり、「うーんうーん」と気まずい雰囲気 flowed。

「藤崎さん」

そこに、ぽんつと別の声が割り込んできた。クラスメイトの、例の彼だった。びくつと、少しだけあかりの顔がこわばった。その微妙な変化に、ヒカルは気づく。

「微妙な乙女心」は理解できなくても、あかりの表情には敏感だった。伊達に幼なじみをやっているわけではない。

「あ……えっと」

「俺の家、ここの近く」

「あ、そっか。……そうなんだ」

無理に笑っていることがバレバレだった。ヒカルは面白くない、と眉をひそめる。何が面白くないのか、具体的には言えなかったが。

「あ、ヒカル。あのね、クラスメイトの——」

「藤崎さんの彼氏？」

男はにつこりとヒカルに微笑んだ。しかしヒカルは笑えなかった。

——こいつ、嫌いだ。本能がそう告げた。

あかりは戸惑いながらも、小さく首を横にふる。

「お、幼なじみだよ。やだなあ」

「そう。よかった。じゃあ僕はこれで」

男はそれだけ言うと、ひらひらと手をふって行ってしまった。あかりはほっとしたように息をつく。

……やっぱり、おもしろくない。

「クラスメイト？」

「あ、うん。あの、係が同じで……」

「ふうん」

あかりは彼がいなくなっただけでほっとしたが、ヒカルの様子がおかしくなっていて、また不安になった。なんでまた不機嫌になっちゃったんだろう。

「新しい友達できてよかったじゃん」

言葉とは裏腹に、眼が笑っていない。あかりは小さく「うん」とうなずいたけれど、彼の話より、ヒカルが気になってしょうがなかった。

さきほどから、今度はヒカルがあかりと目を合わせてくれない。

「俺はもう帰るけど、あかりは？」

「……帰る」

「じゃあ、行くぞ」

ヒカルはぶっきらぼうに言って、歩き出した。二人が並んで歩くことはなく、あかりはヒカルの少し後ろを、とぼとぼについていくことしかできなかった。

——俺はやっぱ、嫉妬しているんだと思う。

ヒカルはあかりと別れ、家に帰って、母親の言葉を適当に受け流し、部屋に閉じこもり、暮も打たずにベッドに寝転んでいた。

頭から消えてくれない。あかりのクラスメイトだという男のいやな笑顔と、「よかった」という意味深な言葉。それに、一番気になるのは、なにかを隠している様子のあかり。

……否、隠していることはいい。本当はよくないけれど。本当はとてもとても気になるけれど、でも、あの泣き顔と、その後の辛そうな顔が忘れられない。

あかりの泣き顔には、ヒカルは本当に弱いのだ。綺麗だとは思う。愛しいと思う。でもそれ以上に、やっぱり「笑っていてほしい」と思うのだ。そして、どうしたらいいかわからなくて途方にくれる。昔からずっとそうだ。

物心ついたときから、ずっとずっと、ヒカルはあかりの泣き顔には弱かったのだ。

（なにがあったか……聞いてもいいかな。俺……）

本音を言えば聞きたいし、悩みがあるなら力になってやりたい。思いを自覚してから、いつそう思うようになった。同時に、辛い。

ヒカルは碁を捨てられない。ずっとずっと、碁と一緒に生きていく。その道を歩く。そう決めたから。……迷いはない。後悔もない。だから、辛くなる。

家と棋院を往復するばかりの毎日。仕事で遠出することも少ない。碁一色の日々。あかりに逢うのは、本当に稀だ。それでも逢えたらうれしい。好きだと思う。

——でもそれは、ヒカルの勝手ではないだろうか。ろくに逢えないのに、あかりの悩みやプライベートに、干渉する権利があるんだらうか？ただ、好きというだけで。ただ、幼なじみというだけで。

できることならなんでもしてやりたい。気持ちに嘘はない。けれど「棋士」であるヒカルに、できることはあまりにも少ない——

「こんなこと鬱々考えているようじゃ……駄目だよな」

あかりがいなくなったら。あかりを喪ったら。あかりが、自分以外の誰かの隣にいたら。

考えるだけでぞっとする。そんな思いをしないために、この思いを、手遅れにならないうちに伝える。そう決めたのに。……決心が鈍る。

ヒカルは、あかりのためになにができるんだろう？

考えれば考えるほど、ヒカルよりあのクラスメイトのほうがあかりと一緒にいるのだ。一緒にいるし、近くにいます。あの様子からだ——あかりのことを憎からず思っていることは確かだ。

頭が痛い。——あかりを誰にも渡したくない。本当は吐露してしまいたい。もう隠しておけないほど、自覚した瞬間から気持ちは大きくなりすぎて。

「……やっぱり、無理かな……」

ぼそつと呟き、ヒカルはベッドから起き上がった。そしてゆっくりと深呼吸をして、暮を打ち始めた。

それから一週間が経った。ヒカルも勝ちがたまって忙しくなり、あかりと逢うことはなかった。クラスメイトである彼も、あかりが避けて避けて避けまくっていたので大した接触はなかった。

しかし一週間後のその日、放課後。いざ帰ろうと下駄箱に向かったあかりの前に、彼は現れたのだ。彼はいつものように微笑を浮かべて、あかりを待っていた。

「——藤崎さん。話があるんだ」

聞きたくない。直感でそう思った。けれど、その眼から顔を背けることができなくて、あかりはうなずくしかなかった。

いつもの道を帰る。しかし隣にはいつもとは違う彼がいる。それが不思議だった。息がつまる。——その原因があかり自身にあるのはわかってる。知られたくないことを、言われたくないことを言われてしまったことに対する身勝手な嫌悪感だ。

それでも、早く終わらせてしまいたかった。でも、うまくそれを言葉にすることができなくて、彼も黙ったままで、二人はあかりの家の近所の公園を通り過ぎた。

昔、ここでよくヒカルと遊んだことを思い出し、あかりは立ち止まる。こんなところをヒカルに見られたくない。そう思うと、きゅと身がひきしまった。

立ち止まったあかりに、不思議そうに彼はふりむいた。あかりは強い意志を瞳にたたえて、きっぱりと言った。

「——話ってなに？」

彼は笑顔をくずさない。くずさずに、あかりと人ひとりぶんの距離を保った位置で立ち止まった。

「——ここが、俺の許されてる距離、かな」

あかりはうなずかない。けれど、否定もしない。彼にはなにも言わない。なにも知られたくないから。ただ、見つめる。彼の真意を探るために。

「藤崎さんは、こういう状況には結構免疫があると思っているんだけどな」

「……」

「そんなに怒らないで。別に悪気はないんだ。——ただ、いろいろ

るちょっと、面白くないなと思って」

彼が一步、歩み寄る。あかりは一步、後ずさる。距離をつめるつもりはなかった。超えていいのは、その距離を越えていいのは、ヒカルだけだ。

視野が狭いのもかもしれない。考えが浅いかもかもしれない。世界にはこんなに人があふれているのに——もしかしたら、とても安易な考えなのかもしれない。でも、それでもいい。

あかりの中に、ヒカル以外を侵入させるつもりはない。

ヒカルに逢えない間、ずっと考えていた。ヒカルとあかり自身のことを。ヒカルは棋士——社会人だ。比べて、同じ年でもあかりは学生である。生活時間帯も、考え方も、……生き方そのものが、きつと変わっていくのだろう。これから、もつともつと。

よしんばヒカルとつきあうことになったとして、その違いを埋めるには、たくさんの努力が必要かもしれない。「好き」だけではどうしようもなくなる、そんな事態も、もしかしたら起こるかも知れない。

普通の、同じ年の、たとえば彼のようなクラスメイト——そのほうが、あかりには合っているんじゃないか、ふさわしいんじゃないか。

でも、それでもいいと、あまりにも簡単に、あかりの中では結論が出た。考えるまでもなかった。あかりはヒカルを選ぶのだ。

ヒカルと幼なじみじゃなかったら。

ヒカルが棋士じゃなかったら。

そんな仮定にはなんの意味もない。今、ヒカルは棋士で、あかりは高校生で。あかりはヒカルを好きだという、その気持ちがある。それだけでいい。

早く、ヒカルに逢いたい。そして仲直りをするのだ。こんなところで立ち止まってはられない。

「そんなに、幼なじみの彼が大事？」

そんなあかりの心に無造作に、彼は土足で入り込んでくる。悪気はなくても、いい気分にはならなかった。彼の言葉に、あかりは眼に見えて警戒を強める。

「藤崎さんは頑なだね。誰にでも優しいし、誰にでも笑顔なのに――
――本当の藤崎さんはとても頑固で、それから臆病だ」

「……」

「怖いのか？ ……僕が」

一歩ずつ、彼が歩み寄った分だけ、あかりは後ずさる。声が、出ない。

怖い。

「なにもしないよ。……ただ、伝えたいだけ。受け止めてほしいだけ。君が無条件に心を与え続ける彼が――とても疎ましいだけ」

彼の言葉が、声が、瞳が。あかりを動けなくする。

声を。声が、出ない。

ずっと、ずっと、呼んでいるのは、たったひとりだけなのに。

「藤崎さん」

どうしていないの。どうして、ここにいないの？

昔は飛んできてくれたのに。

「あかりを泣かすな！」って、ヒーローみたいに、私が泣きそうになってると、私をいじめていた男の子たちをやっつけてくれたのに。

そう、ヒカルはもういない。あかりから逢いに行かなきゃ、ヒカ

ルには逢えない。

だから、強くならなくちゃ。——ヒカルがいなくても、強くなれるように。

ぐっと、拳に力をこめる。負けたら駄目だ。泣いちゃ駄目だ。

あかりは後ずさりながらも、眼をそらすことはしなかった。彼の眼が、哀しく光ったように見えた。

「藤崎さん——僕は、君がずっと……」

瞬間、あかりの腕に重力がかかる。くいつと引き上げられたかと思ったら、ひっぱられて誰かの背中後ろにまわりこむ形になった。もう、彼の瞳は見えなかった。

——掴まれた腕に感じた熱で、視界いっぱい広がる背中で、あかりには顔を見なくても、この人が誰だかわかった。

「……事情はさっぱり飲み込めないが」

ヒカルは静かに怒りの意思を宿した眼で、彼を睨んだ。

「あかりを泣かすな」

「……泣かせてないよ」

彼はふっと自嘲気味に笑う。

「お前の目は節穴か。泣きそうだろうが」

「……そう？　そうかな……」

彼は「ふむ……」と意味ありげに考えこんだ。ヒカルはやっぱり、彼が嫌いだとあらためて思う。なんだか……行動の全てが気に入らない。

この余裕の態度も、なによりあかりを泣かせようとしていた事実も。

彼は「降参」と両手を挙げた。

「じゃあ、帰るよ。——さようなら、藤崎さん」

別にあかりから返事がほしいわけではないらしい。彼はそれだけ言うつと、すたすたと行ってしまった。

先日逢ったときも思ったが、えらくあっさりとした去り際である。二人の間に介入したのは、ただの「勘」だった。見た目にはただ話をしているだけのように見えた。けれどヒカルには、あかりが必死に戦っているように見えたのだ。齒を食いしばって、逃げないように、己を奮い立たせて。——だから介入するのは本当はためらわれたのだが、それでも踏み込んでしまったのは——単に、ヒカルの意地だ。

そのときふと、背中にあかりの熱を感じた。ぽすん、と、あかりの形のいい頭が重なる。

顔を見なくてもわかった。——泣いていた。ヒカルはなにもいわず、あかりの腕をひよい、と自分の胴に回し、あかりがヒカルに後ろから抱きついていてる形にして、公園の中に入っていた。

夕方でもまばらなその公園は、綺麗な橙色に染まっていた。手ごろなベンチを見つけると、よいしょ、とあかりの顔をうずめている位置をわきばらあたりに移動させて、すとな、とベンチに腰かける。

あかりは無言でぎゅっとヒカルを抱きしめたまま、ぴくりとも動かなかった。……この展開は、確か最近あったような気がする。

(……俺は安眠枕かよ)

いや、寝てるわけじゃないけど。……泣き枕？

そしてもう一つ、重大なことに気づく。——この状況はあまりよろしくない。あかりの身体はどこもかしこも信じられないくらいにやわらかくて、本当に同じ人間かと思うほどふにふにで骨なんかなさそうで——

いかん。この展開はいかん。しかし泣いているあかりを放り出すわけにもいかないし——

ぎゅっと、あかりが抱きしめる手に力をこめる。とき、と柄にもなくヒカルの胸が高鳴った。——が。

ぎゅっうっうっうっう。

「痛っ。……あ、あかり痛い……。あの、痛いんですけどあかりさん……」

「——か」

「え？」

声がかもって聞こえなかったので、ヒカルは耳を寄せる。あかりはおもむろに顔を上げると、泣きはらした顔で怒鳴りつけた。

「ヒカルの馬鹿っ！」

きーん。

「おせっかい！ 馬鹿馬鹿馬鹿——！」

きーん。

あまりの事態に脳みそがついていかず、寸前のとときめきもなんのその、気づけばヒカルは公園のベンチに取り残されていたのだった。

「……は？」

そしてただ、首をかしげることしかできなかった。

「馬鹿！」

あかりの家には今日は誰もいなかった。だから、あかりは遠慮することなく大声で本音をぶちまけることができた。

「馬鹿！ 馬鹿！ 馬鹿！」

涙が止まらない。でも、もう誰も見ていない。ヒカルも見えていない。だから、なにも気にすることはない。

「なんであんなタイミングで出てくるかな！？ 頼んでないじゃない！ これじゃ結局、私だって強くなれないじゃない！ せ、せっかく、せっかく——」

馬鹿みたいだ。

それでも死ぬほどうれしいなんて。

「……私も馬鹿……」

ひとしきり怒鳴ったら、どっと疲れがおしよせてきた。馬鹿みたい、じゃなくて、本当の馬鹿だ。

「……ヒカル、悪くないのに、怒っちゃった……」

侵されていく。逢えなくても、自覚したあのときよりも、もっと

ずっと、侵されている。

「ああ、もう……やってられない」

「ヒカル」という雑念を追い払うのに、しばらく時間がかかりそうだった。今日もまた、大量に生物の課題が出ているというのに——できそうにない。

顔のほてりが止まらない。声が、背中が、こびりついて。そういえば、結局ヒカルの顔を見ていない。それでも、ヒカルの顔が、笑い声が、優しい笑顔が。

たまに見せる力強い横顔が——
思いだして、身体中の力が抜けて、あかりはその場にへたへたと倒れこんだ。

「……生物、やらなきゃ」

呟くだけで、実行に移すことはできそうになかった。

6 水面の波動（後書き）

あかりにとって、ヒカルはヒーローかなと。普段はいじめられて泣かされていても、いざというときは助けてくれる、みたいなの。ふたりの子ども時代ってそんな感じだったんじゃないのかなあと思うわけです。思うだけですけど^^「彼」は完全にアテウマキャラですが、ま、腹黒いので、そんなに同情はしなくてもいいですかね。

7 「さよなら」の世界（前書き）

腹が立つ。イライラする。ムカつく。けれどもう、その理由をヒカルは知っていた。——だから、真っ向勝負だ。ヒカルはあかりに逢いに行く。

7 「さよなら」の世界

「馬鹿！」

——馬鹿で悪かったな。

「……ありません」

「ありがとうございます」

伊角ががっくりとうなだれる。このところのヒカルの調子はうなぎのぼりだった。手合いも、和谷家主催のリーグ戦も、ここ一ヶ月破竹の勢いだった。負け知らずである。先日はあの塔矢アキラにも勝ってしまった。まあ、超接戦の激戦だったのだが。

しかし、だというのに、和谷がヒカルに話しかけたときは、明らかに不機嫌そうに眉間にしわをよせていた。

「最近すごいじゃないか。進藤」

「なにが？」

「なにがって……怒涛の勢いじゃないか」

「そうか？ ああ——まあ、対局はな。でも、すげえ調子悪いぜ。俺」

イヤミか、と思ったものだが、本気で言っているようだった。あ

いかわらず不思議な男だ。

「調子がいいってより、ヤケになってんのかな。たぶん」
「……ヤケ？」

ヤケであの成績？
それはそれでムカつく和谷だった。

「じゃあ、俺、帰る」

じゃらじゃらと碁石を早々に片付けて、ヒカルはすくつと立ち上がった。

「おい。検討は？」

「悪い。今日は用事があるんだ」

「用事？」

「いや——うん。用事って言うか……」

ヒカルは考えこむ。

「殴りこみ……？」

「殴……？」

「……とにかく、行ってくる。じゃあまた明日」

「……お、おう？」

呆気にとられるメンバーを残し、ヒカルはさっさとその場を後にしたのだった。

腹が立つ。

腹が立つ。

腹が立つ。

ずかずかと競歩のように歩きながら、ヒカルはこめかみがぴくぴくするのを感じた。

原因はわかっている。今日はこれから、その原因と真っ向勝負だ。見てやがれ。

「……俺って短気……かな。まあいいか」

「カラオケ？」

あかりはぱちくりと眼を見開く。久美子は「うん」とにこにこ笑って頷く。

「ひさしぶりじゃない？」

「まあ、確かにもうずっと行ってないけど……」

「あと、舞と由利」

「そうだね。パーツと」

いいよ、とあかりは二つ返事でうなずいた。「よかった」と久美子はほっと息をつく。

あれ？

なにか様子が変ではないか？

「久美子？」

「あ、あとね。進藤君も来るって」

「……え？」

どきりとあかりの胸が高鳴る。それは「ときめき」ではない。

なぜなら久美子の言う「進藤君」はヒカルのことではないからだ。

「藤崎さん、来るって？」

あかりのクラスメイトであり、同じ係であり、現在あかりがもつとも苦手としている異性である——進藤御影が、久美子に声をかける。

以前彼に告白めいたことを言われてから、お互いにお互いを避けていたように思う。とはいえ、係は同じだし、クラスも同じだし、事務的な会話は交わしていたが。

一時期ほどの嫌悪感は今抱いていなかったが、しかしもう好意は持てそうもなかった。

「楽しみだな。藤崎さんの歌」

御影はにこりと微笑んだ。——同じクラスになって、同じ係りになって、初めて挨拶したときと同じ笑顔だ。あかりは最初、この笑顔が好きだった。

高校に入学したばかりで、新しい環境への期待よりも、不安のほうが大きかった。中学のときは小学校からの持ち上がりだったし——なにより、ヒカルがいた。

もうここに、ヒカルはいない。同じ学校じゃない。ヒカルは「高校生」ですらない。パリッとしたスーツをまとって、碁盤の星の上で戦う棋士なのだ。

「藤崎さん？ 進藤御影です」

だから、御影が穏やかに話しかけてくれたとき、ほっとしたことを覚えている。

そして同時に少しだけ親しみを感じた。それは御影の苗字が「進

藤」だから、という単純な理由。

「よろしくね」

「こちらこそ」

というわけで、御影とはそれなりに仲がよかったのだ。……が。あかりがヒカルへの気持ちを自覚して、それを直接にはなくとも御影に指摘されてから——あかりは御影には極力近寄らないようになった。

最初はうれしかった「進藤」という苗字もなんとなくいやになって、そんな身勝手な自分が嫌いだった。でも、あかりは開き直すことにした。あかりがほしいのは御影じゃない。御影に、あかりを好きになってほしいわけじゃない。

世界中の人に嫌われても——本当にそんなことになったら、後悔するかもしれないけれど——ヒカルがあかりを好きだと言ってくれるなら、それでいいと思う。

ヒカルを選んだことであらわになる汚い自分も、醜い自分も。いまはただ、受けとめようと思う。

御影は意味ありげに微笑む。

「僕がいるから、やっぱりやめておく？」

「……ううん。行く」

負けないように、あかりも少しだけ口の端をあげた。

「ねえ、あの人、誰かの彼氏かな？」

「えー。ちよつとかっこいいかも」

「本当だ。私服だけど……学校どこなのかなあ」

クラスの女子がいきなり騒がしくなる。窓の外を見て、なにやら

きやあきやあ黄色い声を上げていた。

あかりと久美子も気になって窓の外を見る。——あかりは思わず、幻を見ているのかと思った。

チエツクのポロシャツにデニムのジーパンというラフな格好。退屈そうに首をもたげて、校門の柱によっかかっている。今は下校時間なので、生徒の注目の的である。

校舎の中からだと顔なんて見えないが、あかりには一目でわかってしまった。——自分が少し誇らしくもありいやになる。

(……って、なんでヒカルがここにいるの?)

そこでようやく我に返る。

「私、ちょっと行ってくる!」

いまだ呆氣にとられている久美子を置き去りに、あかりは走り出した。

——やはり私服は相当目立つらしい。しかしヒカルはパンダではないのだから、そんなにじろじろ見ないでほしい。のだが。

(……あかり、まだかな。ったく、おせえなー)

必死に頭の中で詰め暮をしながら、「じろじろ見てるんじゃない!」と怒鳴りつけたいのを必死に我慢する。

「……あのう、誰か待ってるんですか?」

ふと気づくと、まわりを女子に囲まれていた。ヒカルはぎよつとあどすりたくなつたが、あいにくもともと柱際だったためにあどすされなかった。が、女子はずずつと近寄ってくる。

(げっ)

なんで自分は女子に囲まれているんだろう。そういうのはあれだ。もつところ、顔がよかつたり男前だつたりする奴らの……。

ヒカルは自分が暮の世界一色になつてしまい、いつのまにか埋もれていた才能が剥き出しになり、整った顔立ちがその大人びた雰囲気からひきたつようになり、同世代の他の男子に比べて、大差をつけて異性の目をひく外見になつてしまったことに気づいていなかった。

まあヒカルの場合、自覚したところで「どうでもいい」と足蹴にしてみうだろうが。

「……まあ、そうだけど」

「散れ！」と叫びだしたくなるのを必死にこらえ、ヒカルは無愛想ながらも一応うなずいた。

「あのー。それって彼女ですか？」

「……彼女？ いや、そういうわけじゃないけど」

「えーっ。じゃあ誰待ってるんですかあ？」

関係ないだろ。

……いや、抑える俺。

今日はこんなところで知らない女子に怒鳴りつけにきたのではないのだ。ヒカルはぐつとこらえる。

そこに、天の助けが現れた。

「ヒカル！」

その声にふりむけば、待ち望んだ人物がヒカルの元に駆け寄った。

「遅い」

ヒカルは仏頂面のままで眉をひそめる。
あかりは「むうつ」と思わず言い返す。

「べ、別に約束なんかしてないじゃない！　なんでいきなり学校に来るわけ！？　……にしても、よくわかったね。来たことあったわけ？」

「それはそうだけど——とりあえず場所、変えないか？」

周囲の視線を一身に浴び、結構限界のヒカルだった。こんなところで疲労困憊している場合ではないと言うのに……。
しかしあかりは「あちゃあ」と頭を抱える。

「今日は予定が入っちゃったんだよー。もう、なんでもっと早く来てくれないの？」

「これでもがんばって早く来たんだよ！」

「だいたいなんの連絡もなしに……」

「しょうがないだろ。思い立ったのが今日の朝なんだから」

「しょうがないよ。……思い立った？　なにを？」

いぶかしげな表情を浮かべるあかりに、ヒカルは「しまった」と視線を泳がせる。

「う、いやその、まあいろいろ。用事って？」

「カラオケ」

「カラオケ？ あかりってそんなの行くの？」

「ヒカルは行かないの？」

「行ってる暇があつたら勉強」

「……昔はあれだけ勉強嫌いだったのにねえ」

あかりは思わずしみじみしてしまう。「暮」限定とはいえ、ヒカルの口から「勉強」なんて言葉が出るとは……。

「暮は別」

「数学は？」

「吐く」

「嘘。寝るんでしょ」

まあ、ほかに特別変わったことがあるわけではないようだが。勉強が嫌いであることに変わりはないらしい。

「あかり！ 誰、誰？」

気づけば由利と舞、そして久美子が追いついていた。その後ろには黙って御影がついてきている。ヒカルは御影を視界に捉えると、「げっ」とあからさまに顔をしかめる。

「えーとね、近所に住んでるの。進藤ヒカル」

「進藤？ 進藤君と同じ名前なんだ」

由利がひょいっとヒカルに近づく。
進藤君？

(こいつ、進藤っていうのか)

ヒカルは御影をじろりと睨みつける。由利は気にもせず、用件を伝えた。

「あの、よかったら、一緒に行かない？ カラオケ」
「俺が？」

由利と舞の眼がきらきらと輝いている。

「いやでも……」

ヒカルが断ろうとすると、御影が間に入る。

「いいんじゃないかな。進藤——くん。よかったら、一緒にどう？ 藤崎さんも来るし」
「……」

挑戦的な言い方に、ヒカルはぴくりと眉をひそめた。
ちなみに、ヒカルは売られたけんかは買う主義である。あかりは頭を押さえた。

ややこしいことになりそうだ。いや、もうなってる？

「じゃあ、遠慮なく」
「よかったあ。ちょうど男の子が一人足りなかったの」
「……は？」

その言葉に、ヒカルだけではなく、あかりも首をひねった。

「……おい。あかり」

「……私だって知らなかったんだもん」

「けっ。どうだか」

「あ、なによ。その態度。だいたい私は頼んでないからね」

「売られた喧嘩は買う主義なんだよ」

「知ってるわよ。もう……頭痛い」

というわけで、カラオケボックスで他校の男子と合コン真つ最中であつた。

ヒカルは頭が痛かつた。暮漬けの毎日だったので最近の歌なんてまったく知らないし、また興味もない。知らない歌ばかりで退屈だし、かといって知っている曲を歌う気にもなれない。カラオケが始まって二十分、すでに帰りたかつた。

あかり一人置いていくわけにもいかないし……。

そういえば、「同世代の女の子」なんて、久々に逢う。あかりや奈瀬など、院生仲間は別として。

ヒカルも、佐為に出逢つていなければ、この輪の中にいたのだ。……合コンは多分してなかったと思うが。だって全然楽しくない。

(……でもあかりも、普通に考えたら、こいつらと一緒に……なんだよな)

あかりが楽しそうに見えないのは、ヒカルがいるからかもしれない。

でも、どんなふうにも考えても、どれだけ考えても、あかりは他の女の子とは違って見えた。ヒカルの眼がおかしくなっているのだろうか。

あかりの顔は、あかりだけは、やっぱり……可愛く見える。それ

に、わかる。きつと後姿だけでも、声だけでも、どこにいても、なにをしても、見つけられる。そんな確信があった。あかり以外の女の子と比べてみて初めて。

——ところでさきほどから気に入らないことがひとつ。「合コン」というものは男女交互に座らなければいけないらしく、あかりをはさんでヒカルと御影がそれぞれ隣を陣取っていた。

つまり、あかりの隣に御影がいるということ……なんだから、悪い予感がするのである。

とてつもなくいやな予感が——

「藤崎さんは歌わないの？」

思っていたら案の定、御影があかりに話しかけている。そのときふと、くいつとあかりがヒカルのシャツの端を握った。

「あか……」

「進藤くんこそ、歌わないの？」

ヒカルが声をかけるより早く、あかりは答えていた。

「今日の目的は、歌うことじゃないから。……藤崎さん、わかってる？ 今日の目的」

「知ってたら来なかったもの」

「僕も、藤崎さんが来ないなら来なかったよ」

「……え」

「だから、藤崎さん誘われたんだよ。まあ、久美子ちゃんは知らなかったみたいだけど」

「……そう」

あかりは必死に平常心を装った。隣にヒカルがいることだけが救

いだった。二人きりだったなら耐えられなかっただろう。御影の強い強い眼の力に。

見つめられると——怖くて、動けなくなる。

「藤崎さんが来なくても、三対三で数は合ってたんだけどね。だから、君の幼なじみを入れないと女の子があぶれちゃうところだったんだ。タイミングよかったね」

「……」

御影の眼が意地悪く光ったことに、少しうつむいていたあかりは気づかなかった。

「藤崎さんは、彼が好きなの？」

「なっ……」

会話は小声で行われていたので、歌とおしゃべりに夢中なほかのメンバーには気づかれていなかった。しかし当然、ヒカルには聞こえているわけで——

「……やっぱり、あんまり面白くないな」

「なにが——」

御影はおもむろにあかりをひきよせ、そしてその果実のように赤く甘い唇に軽く口付けた。

——え？

「やつ……！」

あかりは瞬間的に後ろに飛びのいていた。

なにをされたか理解できなかった。キスをされた。ファーストキスだった。そんなことよりも、なによりも、ただ、「ヒカルに見られた」という事実だけが、あかりを絶望に突き落とす。

次の瞬間、御影は隣に座っていた女の子にぶつかっていた。自然に涙があふれて、視界がかすむ。だからなにが起こっているか理解するのに時間がかかった。

ヒカルが思い切り御影の頬を殴ったのだった。ヒカルの顔が見えず、あかりは不安になる。けれど、怖くて顔を見ることはできなかった。

どうしよう。ヒカルに見られてしまった。よりもよってなんで

部屋の中がざわめきに包まれる中、ヒカルは無言であかりの腕を掴み、そのまま部屋を出て行った。

御影は殴られた頬をさすりながら、「やれやれ」とためいきをつく。

「し、進藤君。大丈夫？」

「大丈夫だよ。ありがとう」

御影が笑いかけると、舞はかあつと赤くなった。

あかりは、御影が笑いかけても、絶対に頬を染めたりはしなかった。だから、ほしかった。ほしいと思った。

あかりはいつでも、あの幼なじみのことだけを見ていた。だから、同じ苗字の御影にも気安くしていた。その事実が、全てが、御影に苛立ちを与えた。

彼女の笑顔が、好意のすべてが、自分以外の誰かに与えられる。それが——とてもいやだった。

(……まあ、しょうがないか。少しは気が晴れたし)

彼の気持ちは、初めて会ったときからわかっていった。昔からそういうことには勘が働いた。なにより、彼は最初から御影を敵視していた。

御影を遠ざけるくせに、彼との関係を守ろうとしているように御影には見えた。だから、少し意地悪をしてやりたくなったのだが――

（……少しはこじれないかな）

やっぱり、あっさりくつついてしまわれるのも口惜しいので、御影はちよつとだけ神に祈った。

繋がれた手が、伝わる熱だけが、あかりの理性をどうにか留まらせていた。この手を離したくなくて、でも、顔を見たくなくて、でも、離れたくなくて、でも、逢いたくなくて――

（どうしよう……）

ヒカルはなにも言わずに、あかりをひきずっていた。背中からは明らかに怒っている気配を感じた。

涙が止まらなかった。哀しくて、哀しくて、哀しくて。

あかりは、御影とキスをしたのだ。合意ではなくとも、女の子なら誰でもあこがれるはずのファーストキスを。

ヒカルの気持ちなんてわからない。けれど、あかりはいつか、ヒカルとキスをしたかった。ヒカル以外の誰とも、キスなんてしたくなかった。

「……あかり。家、ついた」

ぼそつと、ヒカルの声が耳に届く。気がつけば、あかりの家の前だった。ヒカルはすたすたと門の中に入って、インターフォンを押す。

「……あ、今日、お母さんいないの……。おばあちゃんのところに行つてて……」

「……鍵は？」

あかりはごそごそとポケットから鍵を取り出した。ヒカルはそれを受け取って、鍵を開ける。

「……入れよ」

「……うん」

あかりが玄関に入ると、ヒカルは繋いでいた手を離した。

「——じゃあな」

ヒカルの顔が、見えない。行かないで。行かないで。声が出なかった。

あかりはうなづくことしかできない。涙が止まらなくて、笑うこともできない。

「……うん」

扉が閉まる。ヒカルが見えなくなる。ぱたん、と、扉が閉じた音だけが、無情に心に響いた。

あかりは扉にすがりつく。ヒカルが行ってしまふ。もしかしたら、

嫌われてしまったかもしれない。

今言わなかったら、きつと、もう言えない。

——ヒカルが好き。ヒカルと、キスしたかったよ。

心は声にならなくて、届かなくて、あかりはただ泣くことしかできなかった。

もう、駄目なんだろうか。カラオケになんか行かなければよかった。そうしたら、今頃はヒカルと一緒に笑っていられただろうか。

『今日はどうして学校に来たの?』

『別に……。なんとなく』

『——あのね、ヒカル。この前はごめんね』

『まったくだ。せつかく慰めてやったのに』

『う……だから、ごめんってば』

『今度、ラーメン奢れよな』

『ヒカルのほうが金持ちじゃない!』

『なんだよ。俺に奢れていうのかよ』

『そうじゃなくて——』

そんなふうには、変わらない「二人」のままで、いられたはずだった。

たかがキスなのに。唇と唇が触れただけ。肩と肩がぶつかるのと、大して変わらないはずなのに。

——痛くて、痛くて。

こんな気持ちがあるなんて知らなかった。

「……ヒカル……」

がちや、と扉が開く。そこには、ヒカルがたたずんでいた。静かで綺麗な瞳だった。

「……ヒカル……？」

「——ごめん」

扉を閉めて、そう言うなりあかりを抱きしめる。

「……やっぱり、無理みたいだ」

「ヒカ——」

「誰にも渡したくない」

次の瞬間、あかりはヒカルの胸の中で、ヒカルとキスをしていた。見開かれた眼がゆっくりと閉じられていく。

——何？

苦しくて、息ができない。状況も理解できないまま、身体力が抜けていく。ヒカルにどうにかしがみついている腕と、腰に回されたヒカルの手だけが、あかりを支えていた。

ようやく離れたと思ったら、酸素を取り込もうと口を開いたあかりに、ふたたび貪るようにキスを降らせた。舌が絡み合い、なにがなんだかわからなくなる。

身体中が熱くなる。苦しくて、ドキドキして、もしかしたらこれが「酔う」ということになるのかもしれない。

ヒカルはあかりを離さず、あかりはヒカルを離さなかった。ヒカルは無性にあかりを求めて、あかりは無我夢中でヒカルを受け止めていた。

——それから、どれくらいの時間が経ったのだろう。

「……ごめん」

ヒカルの言葉で、あかりは現実に戻された。ふと腕の力がゆるみ、あかりはそのまま玄関に座り込んだ。ヒカルはびっくりしてあかりを覗き込む。

顔どころか、身体中が真っ赤にほてってるみたいだった。力なんか入らない。

「……あの、あかり。ごめんな」

「……」

なにが？

そう言いたいのに、あいかわらず言葉は不自由だった。

「あかりの気持ちとか、ちゃんとそういうのも、考えなきゃいけなかったのに——いや、考えようと思ったんだけど、やっぱり……無理だった」

ヒカルは眼をそらしたまま、少し頬を赤らめていた。

「あかりにキスしたあの野郎にムカついて、阻止できなかった自分にムカついて。でも、傷ついてるのはあかりだから、俺の気持ちを押しつけちゃいけないって思ったんだけど——結局、押しつけちゃったな。ごめん……」

「……」

「これじゃ、あの野郎と変わらないよな。……あかり、怒ってる？」

「……」

「——今日は、あかりに話したいことがあって、あかりの学校に行ったんだ」

「……」

「……あかりに馬鹿って言われて、そのときは呆氣にとられて、時間が経ってから腹が立って腹が立ってしょうがなくて——なにに腹が立ってたかっていうと、いろいろあるんだけど、一番は、あかりに好きだって言えないこと」

「……え……？」

少しどころか、ヒカルはもう耳まで真っ赤だった。眼を見開いて、あかりはヒカルを見つめる。すると「見るな」と頭を軽く抑えられた。

「——だからその……あかりの……気持ちとか……考えなくてごめん。でもどうしても我慢できませんでした」

ごめんなさい。

ぺこり、とヒカルは素直に頭を下げた。

好き……？

顔を上げると、あかりはまたボロボロと泣き出していた。

(げっ)

やっぱり無理矢理は駄目だったか……。ヒカルはその場から逃げ出したくなった。

ヒカルはあかりにつきあって、玄関にあぐらをかいて座っていた。あかりが泣くとおろおろしてしまうのは、どうやら克服できそうにない。

「あ、あかり——」

あかりはぼすん、と、ヒカルの胸に落ちてきた。

(へ?)

「……き」

「え?」

状況についていけず、ヒカルは行き場のない手をあかりの背中に回すか否かを思案していた。

あかりは泣きじゃくって、ヒカルの胸を涙でぬらした。夢を見ているようだ。もしかしたら、見ているのかもしれない。それでもいいと思った。夢でもいいから、ずっとずっと聞きたかった。

「ヒカルが……好き……」
「……………え？」

幻聴？俺も大概やられてるな……。
と思うほど、ヒカルは想像もしていない一言を言われた。
——あかり？

「わ……私も……ヒカル……好き……。ヒカルと……キ、キス……したかつ……」

好きで。触れたくて。キスをしたくて。
居心地のいい「幼なじみ」では手に入らないものが、どうしてもあつて。

ヒカルは静かにあかりの両頬に手を添える。瞳がぶつかる。
互いの瞳に魅入られて、二人は口付けを交わした。

「……………やっぱり、初めてはヒカルがよかったな……………」
「なにが」
「……………鈍感！……………キスだよ」
「……………ああ……………」——初めても、俺だと思っけど「

「え？」

「結構前だけど。……五月？」

「えーっ！ 知らない！」

「そりゃ、お前はのんきに寝てたから」

「ちよつと、ずるい！ なにそれ！」

「うるせっ。時効だ時効」

「なによそれーっ。開き直ってる！」

7 「さよなら」の世界（後書き）

ようやく両思いになりました。あかりはかわいいですね。御影はオリキャラですが、なんか最低な男になってしまいました。げふん。

8 始まりの二人（前書き）

晴れてつきあうことになった二人だが、忙しくてデートひとつして
いない。そんなことじゃだめだと和谷に忠告を受けたヒカルは……。

8 始まりの二人

「まだデートしてない？」

手合いの昼の休憩時間。弁当をつつきながら、和谷は呆れた声を出した。

「なんだよ」

「なんだよ、じゃねえよ。つきあって……えーっと、二週間？」
「……まあ、そんなくらい？」

もくもくとごはんをほおばりながら、ヒカルは指折り日数を数える。

本当はあかりとつきあいはじめたことを、誰にも言うつもりはなかったのだが——勘のいい和谷にはすぐ気づかれてしまったのだ。いわく、「お前はわかりやすいんだよ」だとか。

(……そうかなあ)

和谷はとくとくと語りだす。頼んでもないというのに。

「お前な、そんなんでどうするんだよ。つきあいはじめって言うたら、一番盛り上がるんじゃないのかよ」

「って言われてもなあ……。気心なんて知りすぎてるほど知ってるし……」

なにせ幼なじみだ。一緒に風呂に入ったこともある。

見られたくないところもお互いに見せまくっている。……いまま
ら格好なんてつけられないではないか。

和谷はじとつとヒカルを一瞥すると、「しょうがねえなあ」とた
めいきをつく。

「まあ、いまさらもりあがるもなにもないかもしれないけど……。で
も、少しくらいそういう雰囲気になってもばちは当たらないと思っ
ぜ。えーと……あかりちゃん？だっけ」

「うん」

「彼女は、デートの一つもしたって思ってると思うけどなあ」

「……やっぱりそうかなあ」

「そうだって。絶対。暮が忙しいなんて言い訳にならないんだから
な」

和谷はしみじみとうなずく。……なにか実感がこもっているよう
な気がするのには気のせいだろうか。

（デート……ねえ）

そんなこと言われてもなあ。

ヒカルはうぬぬ、と頭を悩ませたのだった。

「勝ったか？」

「和谷は？」

「ふっふっふ。中押し勝ち！」

「調子いいじゃないか。俺は一目半勝ち」

こきこきと肩を鳴らして、ヒカルは「疲れた」と息を吐く。

「そんなに手ごわかったのか？」

「うん。でも、結構楽しかった」

「へえ。余裕だな」

「そういうんじゃないけどさ……」

エレベーターの扉が開き、二人は乗り込む。

ちん、と音が鳴り、扉はすぐに開いた。そしてヒカルは箱から出た瞬間に、きよるきよるとなにかを探している見知った頭を視界に捕らえて「ぎよっ」と眼をむく。

あかりはエレベーターからヒカルが出てきたのを見て取ると、ほっとしてひらひらと手をふった。

「あ。ヒカルー」

ヒカルはあわてて走りよる。

「どうしたんだよ。なにかあったのか？」

「ううん。なにもないけど」

あかりはふるふると首を横にふった。……じゃあ、なんでだろう？

あかりは「えへへ」と笑った。

「学校が早く終わったから。逢えるかなあと思って」

「入れ違ったらどうするんだよ」

「……考えてなかった」

「……いや、考えるよ、そこは。お前って、相変わらず抜けてるよな」

あきれ返ったヒカルの声に、あかりは「むうつ」と顔を膨らませた。

「悪かったですねっ」

「誰もそんなこと言っていないけど。怒るなよ。ほおらぶすになる」

「むー」とあいかわらず不機嫌そうだが、とりあえずあかりは黙った。

そういえば逢うのは久しぶりだ。それは、純粹にうれしい。ヒカルは自然と笑みがこぼれる。

「おい進藤。俺、先に帰るからな」

和谷が気を利かせて、遠くから声をかける。

あかりが和谷を眼に留めて、くいくいとヒカルの服の袖をひっばる。

「和谷……さん、だっけ？」

「そう。和谷義高」

「ヒカル、あの人と用事あった？ 私、邪魔しちゃったかなあ」

「いや、別に。帰り一緒になったただだよ。それより、なんか食って帰ろうぜ。おなかすいた」

「ヒカルのおごり？」

「うつ……まあ、しょうがない。おごってやるよ」

「わーい」

「そのかわり、ラーメンな」

「えー。だったらファミレスに行こうよ」

「いやだ。ラーメン屋のラーメンがいい」

ゆずらないヒカルに、あかりは「ぷっ」と吹き出す。

「ラーメン好きだね。ヒカルは」

「悪いかな」

「悪くないよ。変わってないなあって」

「あかりだって変わってないだろ。すぐふくれるところ」

「あ」とヒカルは、そこで和谷の言葉を思い出す。そうだ、あかりは、デートしたいと思っているんだろうか。

でもこうして二人きりで歩いていても、「ときめき」よりも「和み」が先に来てしまうのだが……。

会話が途切れることはなく、「好き」という明確な気持ちもあるが、それでも「幼なじみ」であることに変わりはないのだ。……あかりだって、そうなんじゃないだろうか。

そりゃあヒカルだって、気持ちを自覚してから、「幼なじみ」から抜け出したかった。こう、色っぽい雰囲気……憧れないわけではない。

しかし、いまさら気恥ずかしいというか、照れてしまうというか……。

「……ヒカル」

告白した際もかなり強引な手を使ってしまったような気がしないでもないし……。

ここはやっぱり焦らずゆっくりと――

「うおい！ ヒカル！ 聞してる？」

「わあっ！ ……ごめん、なに？」

思わず思考の世界に入ってしまった。この癖は暮を始めてからだ。あかりがむっつりとむくれている。

「あかり、ごめんって。なに？」

「……暮馬鹿め」

「ごばか？」

「暮の馬鹿ってこと」

「いや別に、さっきは暮のことを考えてたわけじゃなくて……」
「……やんなるなあ」

あかりがしゅん、とためいきをついた。

ヒカルは「え？」とあかりを見る。

『暮が忙しいなんて言い訳にならないんだからな』

突如、和谷のささやきが脳に響く。ぎく。

あかりの「やんなるなあ」とはつまり……あれか。もう別れの危機ということなのか？

でもヒカルに暮は捨てられないし、でもあかりとは別れたくない

し――

「あ、あかり！」

「え？」

ヒカルはぐつとあかりの両手を握りしめる。あかりはとたん真っ赤になる。いや、「手を繋ぐ」自体は慣れているのでどうでもいいのだが、ここは道の往来なのだ。

夕方、人もたくさんいる。

しかし、ヒカルにはそんなことは眼に入らないようだ。

必死に弁明する。

「あのさ、俺、もっと時間作るようにするよ！ えっと……暮の勉

強は削れないけど——」

「……ヒカル？」

あかりは呆気にとられる。

いきなり何を言い始めたんだろう？

なんだか思考回路がまちがった形につながっているような気が……。

「その、で、で……デートっていうのも、なるべく頻繁に……するし。がんばるから！ だから別れるとかそういうのは——」

「……何の話？」

「え？」

ヒカルはぽかんとあかりを見つめる。

あかりはくすつと笑って、ついつとヒカルの頬を小突いた。

「馬鹿」

その笑顔がまぶしくて、綺麗で、——胸が、ときどきした。……キスしたい。

ヒカルは生まれたこの気持ちを、ぐつと閉じ込めた。

「やんなるなあっていうのは、別にヒカルに対してじゃないよ」

手を握って、ぼてぼてと歩き始める。

「ヒカルが暮を打ってるの、見るの、好きなの。私。ずっとずっと見ていたいの。暮をやめちゃったヒカルなんて、暮を諦めちゃったヒカルなんて——ヒカルじゃなくなっちゃう気がする」

一度だけ、「もう打たない」と言ったヒカル。虚ろな目で、なにもかもが「どうでもいい」そんな目で、あかりを見た。

無性に腹が立って、哀しかった。碁盤に向かって眼をきらきら輝かせているヒカルは、ときどきしてわくわくして、ずっと見ていたくなる。

「でも、それとこれとは別なの」

「別？」

「……あのね。すごく矛盾してるけど、変な顔しないでね」

すでにしているような気もするが——あかりがなにを言いたいかわからないので——ヒカルはこっくりと頷いた。

少し頬を赤らめて、あかりはぼやいた。握りしめる手に、力をこめる。

「ヒカルには、ずっと碁と一緒にいてほしい。でも、同じくらい——わがまま言うけど、もっともったくさん、私と一緒にいてほしい」

「……あかり？」

「やんなるなあっていうのは、心の狭い私。それから——碁にまでやきもち妬いちゃうくらい、ヒカルが好きな、……私」

心が、溶けてしまった気がした。

見開かれたヒカルの眼いっぱい、あかりの照れた顔が映る。

君が好きで、君が大切に——その気持ち、全部眼に見えて伝わればいいのに。

「でも碁はやめてほしくないの。もっともつと強くなってほしいけど——私のことも見てほしい。……ヒカルにとって碁がどれだけ大切な、わかってるよ。わかってるし、捨ててほしくないけど——

—だから、矛盾してるでしょう。気にしないでいいからね」

ヒカルがぴたつと立ち止まる。繋がれた手がびよーんと伸びて、あかりはつんのめる。

「ヒカル？」

深くて静かな瞳。

いつからか、ヒカルはこんな眼をするようになった。暮に向かっているとき。なにかを考えているとき。あかりはその眼を見るたびに動けなくなる。

吸い込まれて、魅了されて。

「……俺、わがまだから」

「うん。知ってるよ」

「暮かあかりか、どっちかは……選べない。どっちもほしい」

「うん。うれしい」

あかりの笑顔が。声が。ただ、いてくれることが。

……どれだけ、自分を支えてきたのだろう？

当たり前は永遠じゃないと気づいたときから、気持ちを伝えられない臆病な自分かもしかかった。今まで一緒だった。だからって、ずっと一緒とは限らない。

だから「約束」がほしかった。互いを繋ぐ「手」がほしかった。気持ちは届いて、今、ほしかった「手」はここにある。

「同じくらい、好きだと思う」

「……ヒカル？」

「暮も、あかりも、俺にとって——絶対に必要なものなんだ。どっちも、絶対になくしたくない。暮は俺の一部で、あかりは、俺と

は別の存在だけど……うまく言えないけど。どっちかを選ばなきゃいけないかったら——」

「……なったら？」

「……わかんねえ」

「——感動した」

あかりの頬をなでる。くすぐったそうに、あかりが笑う。ヒカルも笑った。

並んで、手を繋いで、歩く。

あかりは、ヒカルの一部じゃない。暮のように、ヒカルの中に存在するものじゃない。

別個の存在で、他人で、考えてることも、心も、気持ちも、見えないもののほうが多い。

——でも、だから知りたいと思う。そして求める。そう思うのは、あかりだけだから。

「おいしかった！」

「よく食べたなあ」

ラーメン、餃子、デザートにアイス。

見ていて気持ちよくなるくらい、あかりはぱくぱく食べた。

あかりは「いまさら気取ってもしょうがないもん」とすたすた先を歩く。

「太るぞ」

「ぐ。……う、うるさいな。いいんだもん。明日の食事で調節するから」

「へー」

「なによ。しおらしくないから駄目？ もっと女の子らしく、少食にしたほうがいい？」

「……どっちかというと、そっちのほうが駄目かも」

しおらしく、ラーメン屋にいけない女の子よりも、一緒にラーメンを食べて「おいしい」と言えるあかりがいい。

「あのねえ。初めての二人のデートがラーメン屋なんて、本当は駄目よ？ もっとおしゃれなカフェとか……」

「カフェって……腹にたまるもん、なさそう」

「パスタくらいはあるかも」

「麺じゃん。じゃあ、ラーメンでもいいじゃん」

「雰囲気の問題なんだよ。ま、私は慣れてるし、ラーメン好きだからいいけど。感謝なさいよ」

「……はいはい」

あかりは、どこでもよかった。

おしゃれなカフェでも、ラーメンでも。フレンチでも、イタリアンでも、和食でも。

見ているだけで、一緒にいるだけで、満足してしまうのは——
ちよっと、自分でも「都合よすぎるかしら……」と自己嫌悪に陥ってしまうが。

そう思ってしまうのだから、しょうがない。

それに、感動したからいいのだ。

暮もあかりも、同じくらい大切だと言ってくれたヒカル。ヒカルにとって暮がどれだけ大切か、明言してくれたことはないけれど、あかりには肌でわかっていたから。

——わかりすぎるほどに、わかっているから。
だから、感動した。そんなふうに強く強く、ヒカルの中にあかり

が
いることが。

うれしかった。感動した。ちょっと泣きたくなった。
でも、口惜しいから、言わないけれど。

「ヒカル。帰ったら、指導碁打ってくれる？」

「いいけど、たまには真剣勝負してみたいとか思わないわけ？」
「思わない。だってヒカル、絶対容赦なくたたきのめすでしょ」

「当然だ。真剣勝負つてのは、そういうもんだ」

「ヒカルに完膚なきまでにたたきのめされても、実力の違いを実感するだけで、上達しないんだってば」

「つまんね」

「ヒカルはプロ。私は学生」

「はいはい」

変わらない君と、変わらない君を。

永遠を信じることはできない。

けれど、ずっと、ずっと、一緒にいたい。

その気持ちは嘘じゃないから。

一緒にいられるように。

「あたりまえ」が、ずっと「あたりまえ」であるように。

——この手を離さないように。

二人きりになった後、ヒカルはやさしくあかりにキスをした。

8 始まりの二人（後書き）

色気もへつたくれもない二人の初デート。ですが、二人は満足のようです。あんまりわかりやすく甘くはないですけど、お互いにいっしょにいてリラックスできる関係っていいなあと思います。ヒカあかってそんな感じですよね！将来絶対結婚しますよね。公式でも！

9 気持ち色（前書き）

もうすぐヒカルの誕生日。つきあってはじめての誕生日。——それ
はやっぱり特別だから。

9 気持ち色

ここ数日、あかりは頭を悩ませていた。

長いような短いような夏休みが終わって、気づけばもうすぐ、ヒカルの誕生日なのだ。

毎年ケーキを作って家に届けていたが、今年もそれでいいだろうか。

……それだけでいいだろうか？

あかりは、「彼氏」というものができた経験がない。

数ヶ月前、幼なじみだったヒカルに恋心を自覚して、なんやかんやとあったものの、とりあえず気持ちは通じ合い、晴れて「彼氏彼女」という関係になったのである。

あらためて考えてみると、いまだに恥ずかしいのだが、「いいこと」だ。うん。うれしい。

今年の夏休みは特別だった。あかりが休みでも、ヒカルは手合いや指導暮など予定がびっしりなので、頻繁に会えたわけではもちろんない。だが、あかりがヒカルの予定に合わせる事はできたので、普段よりもたくさん逢えたのだ。

逢えたからといって、どこかに出かけたり、遊んだりと言ったようなことはほとんどなかった。大体がヒカルの部屋で暮を打ったり、本を読んだり、たまに外に出てラーメンを食べたり……いや、ラーメンとかうどんとかおそばとかてんぷらとか……。

（色気ないなあ……）

でも、映画はヒカルの趣味じゃないし、遊園地は楽しそうだけど、ヒカルは丸々一日オフなんてめったにないし、たまの休みは休ませ

てあげたいし——休んでいても暮は打つが。

まあ、恋愛なんて人それぞれである、と、あかりはこの頃達観できるようになった。

なまじ幼なじみなせいか、つきあっている日数は浅いの、なんとなく熟年カップルのような雰囲気をもしだしていることに、本人は気づいていない。

とは思いつつも、やはり「誕生日」や「クリスマス」、「バレンタイン」など、特別にしたい行事はあるわけで——

「……でもどうせ、仕事なんだろうなあ」

カレンダーを睨みつけながら、あかりは嘆息する。

あかりは聖人君子じゃないから、「海よりも広い心」なんて持つてはいない。「しょうがないよ。お仕事だもん」と笑って受け流せるほど大人でもない。

さらに言うなら、暮を打っているヒカルは大好きなのだ。……どうしろというのか、自分でもわからない。

あかり用の一日と、暮用の一日と、一日が二つあれば、あかりの悩みは解消するのである。どちらか一方だけでも駄目なのだ。

（でも一日が二回あったら、ヒカルが大変かしら？）

カレンダーとにらめっこしながらそんなことを考えていると、電話が鳴った。母は夕食の準備で出られないようなので、あかりが代わりに受話器を取る。

「はい。藤崎です」

『あ、俺』

「……オレオレ詐欺はお断りです」

声で誰かはわかったが、ちょっと意地悪を試みる。タイミングが悪いのだ。

なにも悩ませている本人が悩んでいる最中に電話をかけてこなくともいいではないか。こっちにも心の準備があるというのに。

『進藤ヒカルです』

「よろしい」

『ったく、なんだよいきなり。機嫌でも悪いのか？』

「別に。でも、お母さんが出たらどうするつもりだったのよ」

『そんなの、声でわかるよ』

「……あそう」

ヒカルは結構、テレもせずにテレくさいセリフを平気で言う。：

天性のタラシってことなんだろうか。

それはいやだなあ。いやでも、女の子苦手だよねえ。前も囲まれてヒイヒイ言ってたし。

電話口で赤くなっている自分をばかばかしく思いながら、「こほん」と咳払いをする。

「それで、なあに？」

『明日から仕事で静岡に行くんだけど。なにかおみやげいるかと思つて』

「静岡？ そうだなあ……。じゃあ、お茶」

『定番だな』

「定番以外のものなんて知らないもん。そういう場合は、ヒカルが適当に素敵なお土産を見繕ってくるべきなのよ」

『俺、そういうの苦手なんだよ』

「努力くらいしなさいよ」

『う……わかった。あさってには帰るからさ。あかりんち寄るよ』

それだけ、とヒカルが電話を切ろうとしたので、あかりはあわてて「待って」とつけくわえる。

「ヒカル、二十日は空いてる？」

『二十日？　なんでいきなり』

「……ヒカルの誕生日じゃないの」

忘れているのも毎年のことだ。いまさらあかりは呆れない。

ヒカルは「ああ」とあいづちをうつ。

『そうだった。ちょっと待って。えっと……あ、駄目だ。指導暮が入ってる』

「そっかあ。そんな予感はしてたよ。でもつまらないなあ」

『夜は空いてるけど』

「夜って、何時ごろ？」

『七時くらい』

「七時……」

あかりが「むう」と考えこむと、ヒカルが「そうだ」と提案する。

『あかり、指導暮の会場まで来る？　そんなに遠くないし。そうしたら六時には逢えると思うけど』

「行く！」

あかりは二つ返事でうなずいていた。あまりの反応の速さに、ヒカルも笑う。

『じゃあ、後で場所教えるから』

「うん。静岡、気をつけてね。拾い食いしないように」

『……俺は犬かよ』

「属性は似たようなものじゃない」

『おみやげはいらないんだな？』

「そんな脅し方するかなあ。そもそもまともなおみやげ買ってこれるの？」

『お前……喧嘩売ってるだろ』

「そおんなことはございせんことよ」

そんなたわいない会話を続けた後、あかりは電話を切った。切った後、ちよつとわくわくしながら、ちよつと考えこむ。

「……やっぱり、色気ないなあ」

九月十七日。

結局、おみやげはお茶と安倍川もちだった。……いや、おいしかったけど。

今日は一人で街をぶらぶらする。ヒカルの誕生日プレゼントを物色するためだ。とはいえ、あまり予算もないので、買えるものなど限られているが。

そもそも今、ヒカルはあまり物欲がない気がする。欲の全ては「暮」に集中しているというか――

ふと、店の中の一着の服が目についた。濃いグリーンと渋めのイエローのチェックのポロシャツだった。

（ヒカルに似合いそう……）

肌触りもやわらかくて、これから涼しくなるからちょうどよい。それにこれなら、ヒカルも気に入るそう。好みは熟知している。

値段を見ると、ぎりぎり予算内だった。

「うーん……」

簡単に決まってしまったが、いいものだろうか。もうちょっとまわってみようか。

でも——女は思い切りが肝心である。よし。

「すみません。これ、お願いします」

「いらっしやいませ。ありがとうございます」

「あの……プレゼント用のラッピングってできますか？」

「はい。包装に、少々お時間いただいてもよろしいですか？」

「大丈夫です」

「かしこまりました」

支払いをすませて、きよろきよろと店内を覗いているうちに、店員が袋を持ってきてくれた。

「ありがとうございます。またお越しくださいませ」

あかりはぺこりと頭を下げて、その店を後にする。

まさかこんなあっさり決まるとは思ってなかったから、時間が大分余ってしまった。どこかでお茶でもしようか。

ふと、おしゃれなカフェを覗き込むと、見慣れた後姿を発見した。あかりはあわてて壁の後ろに隠れる。

見間違っわけはない。あれはヒカルである。思わず声をかけそうになってしまった。買ったばかりのプレゼントを持っているというのに。

それでも気になるので、顔だけ出して様子を伺う。ヒカルと、一緒にいるのは——

あかりはきゅつと手を握りしめて、くるりとその光景に背を向けた。そして一度もふりむくことなく歩き続けた。

胸の奥がざわざわする。――ヒカルを好きだと気づいてから、つきあうようになってからも、こんなふうにいやな自分があらわになることがときたまある。

隠しようもない、これも真実の自分なのだと、受け入れようと――努力はしても、完全に克服できるものでもない。

「……馬鹿」

知りたくなかった。

知らなければよかった。

ただの「幼なじみ」だったら、こんなこと思わない。

ちよつと、胸がちくちくと痛むだけ。

涙が出そうなほど辛いのに、涙は一滴も出てくれなくて。その分だけ、気持ちちが中にたまっていくようで。

――気持ち悪い。

口を手で押さえて、あかりは帰路を急いだ。

九月二十日。

時計は午後五時五十五分を指していた。

「進藤先生。今日はありがとうございました」

「あ、いえ、こちらこそ」

委員の人に頭を下げられ、ヒカルもつられて頭を下げる。

「進藤先生はずいぶん人気がありますね。びっくりしました。若い方がたくさんいらっやって、いつもより活気があふれていたように思います」

「俺なんかより、塔矢のほうが人気ありますよ」

「塔矢先生とお知り合いなんですか？」

「よく打ってます」

「仲がおよろしいんですね」

「いえ、仲はよくないです」

暮会所での言い合いを思い出し、ヒカルは「けっ」と顔をしかめる。

委員は苦笑する。指導碁を打っているときはあんなにおとなびているのに、素顔の彼はこんなにもおさなびた表情をするのだ。

「塔矢先生も確かに人気がありますが、進藤先生も負けてはいないんじゃないですか？ 今日もたくさんサインをせがまれていますし」

「苦手なんですけど……。俺、字うまくないし。肩こるんですよ」
「ごくろうさまでした。もうお帰りになりますか？ よろしければお車を出しますが」

「あ、大丈夫です。ちょっと、人と待ち合わせをしているんで」

ヒカルは時計を見て、「それじゃ」とあわてて走り去る。委員はぽかんとしつつも、「ぶっ」と吹き出して、後片付けに取り掛かった。打っているときはあんなに大人びて見えるのに、こうして見ていると、やはり年相応に見えた。

ホールの玄関を見渡すと、柱にもたれかかっているあかりの姿を見つけることができた。

「あかり！」

ヒカルが声をかけても、あかりは返事をしない。

首をかしげて近寄る。あかりはぼうつとうつろな目をしていた。寝ぼけているのだろうか。ヒカルに気づいていないようだ。

「あかり？」

「わあっ。ヒカル。……驚かさないでよ」

そしてようやく、あかりは「はっ」と我に帰った。

「なにぼうつとしてんだよ」

「……別に」

返す言葉にも元気がない。ヒカルは「どうしたんだろう」と頭を悩ませる。

「具合悪いのか？」

ふるふると首をふる。否定。

「じゃあ、おなかでも痛いとか」

ふるふる。否定。

「……機嫌が悪いとか」

ふるふる。否定。

「あとは……あ、道に迷ったとか」

ふるふる。否定。

「……落ち込んでる？」

ふるふる。否定。

……もう思いつかない。

ヒカルは降参、と両手を挙げる。

「なんなんだよ」

「……手を繋ぎたい」

「は？」

また何を言い出すんだろう。そもそも、許可なんか取らなくてもいいのに。

ヒカルはあきれながらも、ひょいっとあかりの手を握る。

「それで？」

「二人きりになりたい」

ぶすくれた声で言われ、色気もへったくれもない。台詞そのものは悪くないのだが。

ヒカルはぽりぽりと頬をかくと、手を繋いだまま歩き出す。

あかりをタクシーに放り込み、自分もその隣に座る。

「駅前のイタリアン『イルマーレ』まで、お願いします」

あかりはぎゅっとヒカルの手を握りしめたまま、一言も話さなかった。まったく状況がつかめない。なにがなんなんだ。

店に着くと、ヒカルは店員に「予約していた進藤ですけど」と言った。

あかりはそこでようやく顔を上げる。

（予約？ ヒカルが？）

二人は個室に通される。

カジュアルな雰囲気、それでも品のいい部屋だった。

「……ヒカル」

「なんだ？ 機嫌直ったか？」

「……機嫌が悪いわけじゃないってば」

「ふふん。驚いたか」

「うん。……驚いた」

向かいの椅子に座って、あかりはぼうつと笑っているヒカルを見つめた。

「ご希望通り、二人きりになったけど？」

「……うん。満足」

「あと、要望は？」

「おなかすいた」

「了解」

二人で適当に料理を注文して、ふう、と一息をつく。

「で？」

「『で？』」

ヒカルの言葉を繰り返して、あかりは首をかしげる。はて、「で？」とは。

「今日は俺の誕生日なんだけど」

「わ、わかってるよ」

「おかしいよなあ。なんで俺の誕生日に、俺があかりのご機嫌を取ってるんだろう……。普通逆だよな」

「う……」

あかりは言葉を飲み込む。それはそうだ。いや、だから、機嫌が悪いわけじゃ……。

悪いのかな？

まあいいや、と、あかりは鞆からごそごそと袋を取り出した。

「はい。誕生日おめでとう」

「今年はケーキじゃないんだ」

「ホールサイズだから、形が崩れるといけないと思って……。帰りにうちに寄ってくれる？ もう焼いてあるから。今年はチーズケーキだよ」

「うん。楽しみ。で、これは——開けてもいい？」

「どうぞ」

ラッピングをろくに見もせず、ヒカルはびりびりと袋を破く。まあ、予想はしていたので、いまさらショックは受けない。取り出した服を見て、ヒカルはにへら、と顔をくずす。

「サンキュ」

「気に入った？」

「まあ、普通」

「こら。可愛くないぞ」

「すぐく気に入った」

「うむ。よし」

あかりが「ふふ」と笑う。ヒカルは内心ほつとした。よかった。いつものあかりだ。

それから時間は楽しかった。運ばれてきた色とりどりのおいしいごちそう。指導暮の話。学校でのたわいない出来事。

話が弾んで、店を出た時は八時を過ぎていた。夜道を並んで歩きながら、あかりがいきなり無口になった。

「すっかり遅くなっちゃったなあ。……あかり？」

「……やっぱり駄目」

「え？」

「私、黙っておくのって、できない性分だから」

「知ってるけど……。なにが？」

ヒカルにはさっぱり意味が飲み込めない。……最近こんなパターンが多い気がする。なぜだろう。

とりあえず、あかりの次の言葉を待つ。

あかりはくるっとヒカルのほうに向きなおった。泣きそうな顔をしている。ヒカルはとたん平常心が崩れた。

「あのねっ。あの——あの、あの……」

そしてその場にしゃがみこむ。

「あーもうやだぁ!」

そんなに言いにくいことなのだろうか。頭を抱えて葛藤している

あかりを前に、ヒカルは一緒にしゃがむ。

「あかり。どうしたんだよ」

「言うべきか言わないべきか悩んでるの」

「だから、なにを」

「私はね、ヒカルを信じてるよ」

「お？ おう」

「だから、疑ってるわけじゃないの。ただいやなだけなの。ただ、胸がむかむかするだけなの。でも、だからこれも矛盾してるんだけど……。予想はついてるのよ。予想通りだと思うし……。それなら仕方ないとも思うし……。でも、やっぱりいやなの」

「……もちよっとわかりやすく言ってもらわないと、ぜんぜんわからないんだけど。俺、察し悪いから」

「知ってる。どうしよう……。嫌いにならない？」

「それはない」

ヒカルはきぱつと言い切った。あかりは泣きそうな目のままでヒカルの胸ぐらを掴む。

「絶対だよ！ うざったい女とか、やかましい女とか、うつつしい女とか、そういうこと言わないでよね！ いや、思っちゃうかもしれないけど、せめて口には出さないでよね。やさしさとして！」「わ、わかったから、落ち着け」

あかりは覚悟を決めたというように、すくっと立ち上がった。つられてヒカルも立ち上がる。

「……ヒカル、プロの中で、仲のいい女の人、いる？」

「プロの中で？ ……いや、別に……」

奈瀬は院生だから違うだろう。櫻野さんは仲がいいというほど仲がいいわけではない。伊角の紹介で、挨拶を交わしたことが幾度かあるだけだ。

「本当？」

「嘘ついてどうすんだよ。プロの中でだろ？ 院生だったときからつきあいのある奴なら、一人だけ心当たりがあるけど——」

「その人と、最近逢った？」

「ああ。伊角さんと和谷と一緒に、タイトル戦の検討やろうって話になって。和谷の部屋が今汚いからって外で待ち合わせただけど——
——そうそう、そのときに、奈瀬からさっきの店の話を聞いて……」

正確には「聞かされて」だが。

『彼女と誕生日？ だったらここに行きなさい！ 駄目よ。ラーメン屋ですませたら。ムードもへったくれもないじゃないの。あんた、こういうときくらいかつこつけないと、いつか捨てられるわよ！』

と脅されたのだった。まあ、結果的にあかりが喜んでいたからよかったが……。

これからはたまにはこういうところに来るのもいいだろう。おいしかったし。

ん？なんであかりが知って——

その疑問に答えるように、あかりがぼそつと呟いた。

「……偶然、逢つてるところ、見たの」

「なんだ。声かければよかったのに」

「……プレゼント買った日だったから」

「……誤解したの？ それで」

ヒカルと奈瀬のことを？

考えるだけで恐ろしい。すでに奈瀬を女として見ていないヒカルにしてみれば誤解しようもない。

なにより、少しだけ哀しかった。自分の気持ちを信用されていないよう。

しかしあかりは、ふるふると首を横にふった。

「ヒカル、夢中になってしゃべってたから……。暮の友達かと思った」

「そのとおりだけど。……わかってるならなんで……」

「……理屈じゃないんだもん」

じんわりと、あかりの眼に涙がにじんだ。

え。

な、泣くのか？

ヒカルはぎよつと眼を剥いた。

「あ、あかり？」

「わかっててもいやなんだもん。見なかったら平気。ただ、話のついでにこういうことがあったんだよって聞けば、私だってなんとも思わないけど。でも、見ちゃったら駄目なんだもん」

「……あかり？」

「ごしごしと眼をこすって、あかりはすすり泣く。

「私、独占欲強い。嫉妬でドロドロってして、醜いの。子どもみたいな……。でもどうしようもないの。本当はヒカルにも知られたくなかったの。でも、溜め込んでおいたら、もっともつとドロドロになりそうで——」

ふわっと、ヒカルの匂いがあかりを包んだ。やさしくヒカルに抱きすくめられて、あかりはその胸に顔をうずめる。

「で、俺が嫌いになるって？」

「……ならない？」

呆れたような、それでもやさしい声音が、耳元にしんと響いた。

こんなにも自分で考えて嫌だと思うのに。

「馬鹿」

「うつ……。馬鹿って、そんなふうに言わなくても……」

「俺、いつもあかりに暮馬鹿って言われてるけど」

「……だって、そうだもん」

ヒカルを魅了してやまない「暮」に、やきもちを妬いてしまうくらいに。

「私はその女の子みたいに、ヒカルと一緒に検討なんかできないし……」

ヒカルと対等な位置には上がれない。そんな現実をまざまざと見せつけられた気がして、心が冷え冷えとなった。

ヒカルが、抱きしめる腕に力をこめる。

「あかりが奈瀬にやきもちかぁ。なんか変だな」

「……悪かったわね」

「でも、悪くない。結構うれしいな」

「なんで？」

「だって、俺もそれなりに嫉妬とかするぜ？」

その言葉に、あかりは「え？」と顔を上げる。

「誰に？」

「誰につて、ほら……俺と同じ苗字の奴」

「進藤君？」

「……俺はまだ怒ってるけど」

怒ってるとは、あの件だろうか……。カラオケボックスで、進藤御影にあかりがキスされた件。思い出すだけでも嫌悪感が蘇る。

「あかりのクラスメイトだし。……同じ教室にいますと思うだけでムカムカする。俺は学校には行けないし——」

「……ヒカル、子供みたい」

「あかりだって子供みたいって自分で言ってたじゃないか」

しばしの沈黙。そして、笑い声が響いた。

あかりはヒカルの胸に顔をうずめたまま、ヒカルはあかりを抱きしめたまま。

「あの……嫌いにしないでね」

「だから、ならないつて。疑り深いな」

「……だって私は、こんな私は嫌い」

「俺は嫌いじゃないけどな。へちやむくれのあかりも」

「……全然うれしくない」

へちやむくれだと？

「あ、えーとまちがえた。かわいいかわいい」

うそくさい。

かわいい……それはうれしいけれど、なにも自分が「嫌い」と思っているところを「かわいい」なんて言わなくても——うれしくないわけじゃないけど。

また矛盾が生じてしまった。ヒカルといると、あかりの中にくつもの矛盾がぼこぼこ生まれてくる。

握りしめた手は離さないままで、あかりは顔をしかめてしまう。こんな感情が、こんな感情を持っているあかりが、可愛い？

「うん。それでいいや」

「え？」

ヒカルが「うんうん」となにやらうなずいている。あかりは顔を上げた。

ヒカルのきかんぼうな眼とぶつかる。——ヒカルの笑顔は、お日様みたいだ。

もう暗いのに、確かな光を感じる。

「全部言つてよ。嫉妬もわがままも、えーとそれから……なんでも嫌いになんかならないから」

「そんなの……わからないじゃない」

「頑固だなあ。それを言ったら、あかりだって、俺のこと嫌いになるかもしれないんだぞ」

「なんで」

「俺だって、あかりに見られたくない、知られたくない、自分だつて受け入れたくない、そういう感情……ある」

「嘘。暮馬鹿のくせに」

「あるよ。お前、俺を聖人君子だとも思ってるわけ？」

あかりは「ううん」と、そこはきっぱりと否定した。

「だから、碁馬鹿だと思ってるんだってば」

「……俺が碁のことしか考えてないと思ってるだろ」

「違うの？」

「ちが……、お前……もう……いいや」

ヒカルは脱力する。

——あかりは知らない。

ヒカルが、どれだけ醜くて、貪欲で、強欲な感情を持っているか。碁に対してだけじゃない。むしろ碁に向かう感情は、いつも清廉で涼やかで、「口惜しい」という気持ちさえ純粹で。

でも、あかりに対する気持ちは、自分の中の醜い感情が次から次へとあふれてきて——

キスをしたい。

抱きしめたい。

閉じ込めたい。

自分だけのものにしたい。

離れたくない。

他の誰も見ないように、自分だけを見ているように。

全部、全部、あかりの世界にいるのが、自分だけになればいいのに。

気持ちはどんどん膨らんで、きつと消えることなんてない。必死に押さえ込むことで精一杯で。

あかりは知らない。なにも知らない。——絶対に、知られたくない。

ヒカルがそんなことを思っているなんて、あかりは露ほども思っていない。

なにせ、「碁馬鹿」としか思っていないのだ。……いや、実際そうなのだが。

それだけじゃない。

今だって、この小さな背中に回した腕をどうするか、それを思案しているところだというのに——まあ、もう、なんでもいいが。

「そろそろ帰るか。ケーキ食べたいし」

「……うん。ねえヒカル」

「ん？」

「私、がんばるからね」

「なにを？」

「……いろいろ。とにかく」

あかりはにこつと笑顔になると、くいつとヒカルの手を引いた。

「帰ろう」

慣れ親しんだ道。見慣れた街。
ずっとずっと、生きてきた道。

これからも、生きていく街。

二人で。

——二人で？

いられるだろうか。一緒に。

これからも、いられるだろうか。

この手を離さずに——ずっと。

一緒にいたいと願って、一緒にいようと努力することが大切なら。
——きつと、大丈夫だと思う。

9 気持ち色（後書き）

奈瀬に嫉妬するあかりでした。ま、ヒカルもわかりにくく嫉妬してるんですけど。たまにはデートらしいデートもないと、書いててつまらない！（そっちな）ラブラブでいいやねー。

10 むくもり（前書き）

文化祭で、あかりは主役をやることになった。演目はかぐや姫。帝役は——。オリジナルキャラが出てきます。あかりの友人です。その話をきいたヒカルは、ちょっとやきもきします。

10 めくもり

行かないで。

どこにも行かないで。

涙が止まらなくて。

追いかけて、追いかけて、でも、たどりつけなくて。

いつからこんなに弱くなっただろう？

好きで、ただ好きで。

たった一人でこの大地に立つことが、こんなにも怖いなんて。

あなたはただ前を見る。

その瞳がまぶしくて、愛しくて、そしてとても遠くて。

取り残された世界に、私は一人でたたずんでいる。

瞼を開けると、月の明かりが薄暗く部屋を照らしていた。

頬がぬれていることに気づく。

あかりは寝ていたベッドから半身だけ起き上がり、「ごしごしと眼をこすった。

「……駄目だなあ。私……」

両手で顔を隠し、あかりは静かに、少しだけ泣いた。
誰にも気づかれないうちに。

「劇？」

あかりが繰り返した言葉に、文化祭実行委員長である帷美羽は、とほりみはね笑顔でこっくりとうなずいた。

「そう。今度の文化祭のクラスの出し物。二日目は、全学年クラス対抗の舞台上演でしょう？　うちのクラスは、『かぐや姫』って決まったじゃない？」

「うん。知ってるけど……」

それでね、と、美羽はきらりと眼を輝かせる。あかりはぎくつと思わずたじろいだ。

なんだろう？

いやな予感がある。

しかしてそのとおり、美羽は「じゃじゃーん」と両手を大きく広げた。

「ヒロインかぐや姫は、藤崎あかりさんに決定いたしました！」

「ちよっ……聞いてないよ！」

「言ってるじゃないもん」

美羽はけろりと言ったのける。

そこまであっさり言われてしまうと、あかりはとっさに二の句が告げない。

「男子に投票したのよ。あかりもしたでしょう？　帝役、誰がいいかって」

「ああ……うん。そういえば」

三日ほど前、投票用紙が配られてきて、適当にクラスで人気のある男子の一人を書いた。

あかりのクラスには、学年の中でも人気のある男子が多いのだ。ヒカルがいるあかりにとってはどうでもいいことだが、他のクラスの女子にしてみればうらやましい話らしい。

「んで、男子はかぐや姫を決めるわけ。結果はぶっちぎりであかりが一位！ おめでとう。すごいわね！。パチパチ」

美羽が笑って手を叩くと、あかりはがたん、と荒々しく立ち上がる。

「私、やらないよ」

「駄目」

あかりの言葉を、美羽は問答無用で却下した。

「拒否権なんてあるわけないでしょ」

「なんでないのよ」

「劇の主演なんて、誰もやりたいわけじゃない。よっぽど奇特な人ならともかく。……じゃなくて、情熱あふれる人ならともかくでも、うちのクラスってそういう情熱みたいの、欠けてるじゃない。ああ、あかりも含めて」

「失礼だなあ」

のんびりしてて、和やかで、いいクラスではないか。あかりは学校に刺激など求めていないから、楽しく平和に過ごせればそれで大満足だ。

正直に言ってしまうと、気をもむのはヒカルだけでいい

ばいなのだ。

「美羽がやればいいじゃない。美人なんだし」

「あらありがとう。でも私、人気なかったわよ」

「嘘。告白なんて、いっぱいされてるじゃない」

「ほら、私、キツイから。イメージが合わなかったんじゃない？」

美羽がキツイことは認めよう。あかりはうなづく。

帳美羽。高校に入ってからできた友達で、綺麗で大きい瞳に潜む光は鋭い。混じりけのない漆黒の黒髪は長く、艶やかだ。

本人に言わせると、

「私は切りたいのよ。うつとうしいったらないんだから。洗うときとか大変だし。でも家族がねえ……うるさくて。『お前は中身がとんでもないんだから、せめて外見くらい気を使え！』って。ひどい言い草よね。まあでも、親孝行者だから。私」

らしい。その言われようだと、どう考えても親孝行しているとは思えないのだが。

あけっぴろげで、言いたいことはズバズバ相手がまわすにつつかって。理路整然と自分の意見を言うことができて、壁をつくっているわけじゃないのに、その内面に踏み込むことには勇気が必要だ。その分敵も多いけれど、あかりはそんな彼女が好きだった。

たまにぐさつとくるようなことも言われるが。

自分にまつすぐなその生き方が、ヒカルを思い出させたから。でも、と、あかりは首をかしげる。

「私の記憶だと、かぐや姫ってキツイ性格じゃなかった？ その髪といい、やっぱり、美羽が適役だと思うけどなあ」

指どおりのいい、艶やかで、細くて、闇色の髪。繊細で夢い顔立ち——中身はずいぶん違うが——と合わせれば、まるで絵巻物から抜け出てきたようだ。

しかし、美羽はちっちと指をふる。

「今回はパロディだもの。時代を現代にして、アレンジしてあるの」「そうなの？ 知らなかった」

「予算の都合でね。十二単なんか用意できるわけないでしょう。たかが文化祭で。でも浴衣っていうのも雰囲気壊しちゃうし。だったら根幹から変えてしまおうってことになったのよ。ストーリーの流れは大して変わらないけどね」

美羽の話によると、「現代版かぐや姫」文化祭編」はこんな話だった。

年金でほそぼそと平凡に暮らしている老夫婦がおりました。

ある日、玄関には可愛らしい女の赤ちゃんが捨てられておりました。

「まあかわいそう」と、二人は赤ちゃんをひきとって育てることに決めました。

「かぐや」と名づけられたその女の子はすくすくと元気で可愛らしい女の子に育ちました。彼女の可愛らしさは近所でも評判で、彼女は「かぐや姫」と呼ばれ愛されておりました。彼女の噂を聞きつけ、一目ぼれした政界・財界の大物の子息たちがこぞって彼女に求婚を申し込みました。

しかし幼なじみの男の子が好きなかぐや姫は無理難題を言って彼らを退けました。

ようやく好きな人と結ばれる、とそのとき、彼女が実はさる王国のお姫様ということがわかってしまいます。

幼いころに誘拐され、めぐりめぐって老夫婦の玄関にたどり着いたのです。

「帰りたくない」と泣くかぐやに、使いのものは無理矢理忘れ薬を飲ませ、かぐやは好きな人のことも忘れ、まっしろな状態で生まれた国へと連れて行かれてしまいます。

そして全てを忘れ去った彼女の前に現れたのは本当の父と母。国王とお妃様でした。

豪華絢爛な暮らしの中で、彼女はいろいろなことを覚えていきます。それまでのことを全て忘れたままで。

ある日の夜、ふと空を見上げると、まんまるの綺麗な月が浮かんでいました。

昔、かぐやはよく、遅くなるまで幼なじみの男の子と遊んでは、手を繋いで月明かりに照らされた道を歩いて帰ったのです。

ふと、ひとしずくかぐやの眼から涙がこぼれました。でも、かぐやはその意味を知ることができませんでした。ただ、胸の中に、ぽっかりと、小さな穴が生まれたような気がしました。

「で、月を見上げて泣きながら、哀しくなるのに眼をそらすことができないかぐやなのでした、で、幕」

あかりは思わず、ぱちぱちと手を叩いた。なんと、シリアスな話ではないか。

「最後、かぐや姫は好きな人を思い出さないんだね」

「まあ、原作では、月に帰ったその後、っていうのはないけど、かぐや姫は誰とも結ばれなかったしね。ハッピーエンドも考えたんだけど、思い出さないほうが涙をそそるじゃない」

「まあそうだけど……。え？ 美羽が考えたの？ この話」

驚くあかりに、美羽はきょとんとして、「言っていなかったっけ？」と頭をかいた。

あかりはこくこくとうなずく。

「他にやる人がいなかったんだもの。しょうがないじゃない。まあ、国語は得意だし」

「私だって国語は苦手じゃないけど、でも、絶対に思いつかないよ。すごいなあ。美羽」

「ありがとう。で、話は戻るけど」

座りなおしたあかりの前の席の椅子に腰かけて、美羽はきゅっとあかりの手を握った。

「著者の私から見ても、あかりってイメージに合ってるのよ。というわけだから、やってね」

「無理。演技力ないもん」

あかりはふるふると首をふるが、美羽はにっこりと微笑む。

「そんなこと言ったら、誰だってそうじゃない。文化祭のクラスの出し物なのよ。それでもどうにかするしかないのよ」

「まあ、それはそうだけど……」

美羽の言うことはいちいち的を得ているので、あかりは反論できなくなる。

「原作と違って、私の書いたかぐや姫は恋する女の子なのよ」

「恋する女の子？」

「そう。どんなにカッコいい男性からプロポーズされても眼もくれずに、一途に幼なじみの男の子を思い続けるの。幼なじみのほうの

気持ち最後までわからないんだけどね」

「そうなの？　じゃあ、両思いになった途端離れ離れてこと？」

「まあ、そういうことね」

「そうなんだ……」

あかりの胸がつきんと痛む。なんとなく、ヒカルを思い出してしまった。ただこの場合、置いてきぼりにされるのはあかりのほうだが。

遠い国のお姫様だったかくや。暮の才能を開花させ続けるヒカル。光あふれる愛しい人を、見送ることしかできない幼なじみ——
あかり。

そんなあかりの心を見透かすように、美羽は微笑んだ。

「最近のあかりって、男子にすごく人気あるわよね。まあ、前々から人気はあったけど——爆発したって言うか。それはね、やっぱり、あかりがすごく綺麗になったからだと思うの」

「私、綺麗じゃないよ」

美羽のほうが、ずっとずっとずっと綺麗だ。そんなあかりに、美羽は首をふる。

「あかりは綺麗よ？　同性の私から見ても。私を『綺麗』ってほめて、私はそれをちゃんと信じて『ありがとう』って言ってるんだから、あかりも素直に受け止めなさいよ」

「う……ありがとう」

そうなのだ。美羽は気は強いが無礼なわけではない。ほめられたらちゃんと「ありがとう」を言う。どんな些細なことでもだ。それは、ヒカルとは違う。

同じ空気を持っているけれど、ヒカルは無礼千万もいいところだ

ろう。昔からよく大人を困らせていた。

美羽は考える。あかりは、初めて逢ったころは『可愛い』というイメージだった。朗らかで明るくて、素直でよく笑って、美羽とは違う意味で裏表がなくて。

すぐに好きになった。人を好きになることなんてあまりない美羽が、すぐに好きだと思った。

気も合うし、すぐに仲良くなった。ベタベタするのが嫌いと言えば、「そうだね。私も苦手かな。でも、仲良くするのは好きだよ」と笑顔で返してきた。

いつからだろう？

彼女を形容するには、「可愛い」よりも「綺麗」がふさわしいと考えるようになったのは。

まるで青い果実が甘く赤く熟すように。熟した果実の甘い香りにひきよせられ、惑わされ、魅了され、人は彼女に恋をする。

しかし美羽の知る限り、彼女がその思いに応えたことは一度もない。他に好きな人でもいるのだろうか。かといって、詮索するつもりはなかったが。

だから今も、その真実はわからない。

そうそう、美羽の知り合いにも、彼女の心を手に入れることができなかった男がいた。なかなかしぶとい男なので、さて、そういえば諦めたのだろうか？

そしてかぐや姫の話を考えつき、シナリオを書き上げたときに、ふとあかりが思い浮かんだのだ。ときたま見せる憂いを覗かせた表情と、切なさを押し込めた透明な瞳が、かぐや姫にぴったりだったのだ。

投票を操作したつもりはない。けれど、そんな彼女のこぼれる魅力に惹かれているものが少なくないという証明だろう。

「というわけだから、いやなら、絶交ね。公正に決めた結果よ」

「……う……。……わかった。しょうがないなあ」

「そう。しょうがないのよ」

ぱっさりと美羽は言い捨てる。

「私、新聞部だから。あかりの宣伝しておいてあげるから」
「いらないよお。あーあ、恥ずかしいなあ、もう。そうだ、帝役って誰？」

今回は幼なじみの男の子がその役どころだろう。

「進藤御影」
しんどうみかげ

「……進藤君？」

あかりの微妙な表情の変化を、美羽は見逃さなかった。
ふむ。

「……やっぱりやりたくない、っていうのは、なしね」

美羽の言葉に、あかりは顔を上げる。

「進藤君から、なにか聞いたの？」

「なにも聞いてないわよ。なにかあったんだろうな、って思っ
てはいたけどね。聞いてもいいの？」

「だれにも言わない？」

「言っなっていうなら、だれにも言わないわ。御影にも言わない」

あかりのまつすぐな眼に应えて、美羽は穏やかに微笑む。

御影と美羽は幼なじみだった。家が近所で、腐れ縁らしい。

もう姉弟みたいなものだ、と、美羽は思っている。もちろん美羽が姉だ。御影は表面上は大人ぶっているが、中身は大変子供っぽいの

だ。

「でも言いたくないなら、無理に言わなくてもいいわ。強制はしてないつもりんだけど……ごめんなさい。してるかしら」

「……美羽は、『言わなきゃいけない』って気にさせられちゃうからなあ」

呆れたように、困ったように、あかりは笑ってためいきをつく。

美羽も笑った。

「そうね。それは、よく言われる。おかげで助かってるわ。私、新聞部だから」

「極秘よ」

「わかってるってば」

「……キスされた」

「あら。御影も案外行動派ね」

あかりが明るく言ったので、美羽も軽口で返す。それが、あかりにはうれしかった。

だれにも言わなかった。あのときあの場にいた友人も、一瞬のことでわかってる人はいなかったから。知っているのは当事者である御影とあかり、それから唯一その場で目撃したヒカルだけだ。

たかがキスだ。唇と唇が触れただけだ。それに、本当に一瞬のことだった。なにが起こったのか、すぐには理解できなかったくらいだ。

そりゃあそのときはショックだった。なにより、ヒカルに見られたことが。でも、今はもう平気だ。だからと言って軽々しく「私、進藤君とキスしたんだよ」と話せるほど、あかりの中で軽い出来事ではなかったのだ。

気にしているわけじゃない。でも、思い出したくない出来事だっ

ただ。

「好きって言われた？」

「……うん」

そう、と、美羽はうなずいた。

「でも、御影は人当たりはいいけど、あれでなかなか難しい性格してるから。あかりのこと、好きだったんだと思うわ。今はわからないわよ。少なくともキスしたときは。受け入れるとは言わないから——それは、知っておいてあげて」

「……うん」

「まあ、それは幼なじみとしての補完。あかりの友人その一としては——そうね、今度一発殴っておくわ。それで許してあげてちょうだい」

「ずいぶん前だけど」

「あら。こういうことに時効はないわよ」

「うん。じゃあ、よろしく」

あかりはくすくすと笑った。本当に、美羽はあっさりとした性格をしている。

味で言うと塩味だろうか。

「で、かぐや姫はやってくれる？」

ひとしきり笑った後、美羽は話を戻した。

「拒否権はないんじゃないの？」

「ないわよ。ないけど、やっぱり『やる』って熱意ある一言が聞きたいわけよ。実行委員としては」

「真面目ね」

「ありがとう」

「了解。ありがたくやらせていただきます」

「あかりがかぐや姫？」

その日の放課後、ヒカルの部屋で、いつもどおりに指導碁を打ってもらい、いつもどおり検討をし、「へたくそ」といつもどおりになじられたあと、ヒカルの母の持ってきてくれたお茶とお菓子をつまみながらの話題に、文化祭の話が出た。

「ミスキャストだな」

「そういうこと言うかな……」

「あかりが人気投票一位ねえ……」

「その、美羽って友達ね。美羽のほうがずっと美人なんだよ」「興味ない」

ヒカルはけろつと言い切る。あかりはためいきをつく。

そりゃあ興味津々になられても困るが、ヒカルの「興味ない」は「お前以外に目が入らないんだ」的な心ときめく意味ではなく、「碁以外に目が入らないんだ」なのである。

「その文化祭、いつ？」

「再来週の土日。でも、劇は見に来れないよ。一般不参加だから」

「なんだ。行こうと思ったのに。忍び込もうかな。年齢的には違和感ないし」

「……ヒカル、面白がってるでしょう」

「当然」

あかりがじとつとにらみつけると、ヒカルは悪びれなく笑った。
この顔は本気で「忍び込もうかな」と考えている顔だ。

昔からいたずら好きだった。暮を始めたころは小学生なのに中学生に紛れ込んで暮を打っていたこともある。それはまあ、あとから聞いた話なのだが……。

「気が重いなあ」

「相手役も気の毒だなあ」

「……進藤君」

びく、と、ヒカルの手が動く。

ちよつと意地悪だったかな、と思いつつも、あかりは「えへへ」と笑った。

「気になる？」

「……当然、だろ」

間をおいてから、ヒカルは面白くなさそうにぼやいた。

あかりが近寄ると、なにも言わずにその腕の中に閉じ込める。

「あかりは平気なわけ？」

「そうだなあ……。まだなんともいえないけど……」

「いやじゃないのかよ」

「いやだけど……」

空いた腕をヒカルの背中に回しながら、あかりはとくとくと考える。
る。

進藤御影。最初は友達だった。でも、心を見透かされ、キスをさ

れ——「嫌い」ではないと思う。でも、思い出すから、避けてしまう。

それはやっぱり「嫌」だった。

「でも……断れなかったし……。あんなふうになる前までは、仲良かったし……」

「良かったのかよ」

「？ うん。同じ係だったから、まあそれなりに……。気になる？」

無言。

あかりが顔をあげようとすると、ぎゅっと胸に押し付けられた。黙ったまま、一言もしゃべらない。

沈黙が流れる。破ったのは、ヒカルだった。

「俺が——」

「え？」

「俺がいなかったら、あいつを好きになる？」

「ヒカル？」

力強い腕から解放されて、あかりは顔を上げる。ヒカルの真摯な瞳とぶつかった。

「俺が幼なじみじゃなかったら、あいつを好きになった？」

どうして、ヒカルがそんなことを聞くのかわからなかった。ヒカルがいなかったら？

どうして、そんなことを聞くんだろっ。どうして——

「……ごめん」

突然、ヒカルが謝る。

「どうして？」

「……泣いてるから」

ヒカルに言われてようやく、ヒカルの瞳に映った自分を見つけてようやく、あかりは泣いていることに気づいた。

あわてて濡れた頬をぬぐおうとすると、その手を遮って、ヒカルがあかりのそれより大きな手で頬に触れた。

右眼の瞼に、そして、その隣の瞼に。やさしくキスを降らせる。
あかりはふたたびヒカルの胸に顔をうずめた。

「意地悪」

「おま……っ……悪かったけど……。でもなあ、仮にもか……かれ……し……というものの前でそんなふうなことを言うのは……」

「ドモッてる」

「……とにかく、やめろよな。俺だって……不安に……なる」

不安？

ヒカルが？

今朝見た夢を思い出し、あかりはまた泣きたくなくなる。ヒカルがいなくなる。あかりを置いて、どこかに行ってしまう。そんな、いいしれぬ孤独があかりを包む。

「学校の話とか、友達の話とか聞いてると、……話をしてくれるのはうれしいけど、たまに不安になる」

昔、あかりの友達は、ヒカルの知っている人間だった。ヒカルの

友達は、あかりの知っている人間だった。

あかりの中に、ヒカル知らない世界はなく、ヒカルの中に、あかり知らない世界はなかった。

今はそのつながりが、とてもとても細くなってしまった気がする。あかりは前、「世界が遠くなった」とヒカルに言った。

置いていくのはヒカルなのか、それともあかりなのか。

ヒカルがいなかったら、あかりは御影を好きになったのだろうか。御影でなくても、ヒカル以外の誰かを。

——これから好きになるかもしれない。すれ違って、逢えなくなつて、そうしたら。

置いていかれるのは誰だろう？

「自分だけ怖いとか、そういうふうに思うなよ」

「……ヒカルも怖いのか？」

「——怖いよ」

喪失の痛みは、深く深く、心を切り裂くから。
きつとあかりよりも、知っている。

「……ごめんなさい」

「謝らなくてもいいけど……」

「——変だね」

「なにが？」

誰よりも、誰よりも、同じ時間を共有した。変わらないと、お互いが無条件で信じていた。でも、たくさんのものが変化した。

距離。環境。世界。——そして、心。

知っているはずなのに。信じているはずなのに。
疑いがあるわけじゃない。

求める心が——深く深く、沈みこんでいく。

不安は、きつと、消えないのだろう。

まだ、歩き始めたばかりで。

手を繋ぎなおしたばかりで。――だから。

「怖いなあ……」

「だから、なにが」

「ヒカルがいなくなったら、生きていけなくなりそう……」

抱きしめる腕に力をこめて。

これは依存だろうか。

でも、この手が、この腕が、なくなってしまったら。
考えただけで怖くなる。

そこまでのめりこんでいる自分が、いやになる。
どこまで好きになったら、気がすむんだろう？

「……いいな。それ」

「え？」

「生きていけなくなればいいな……。本当に」

あかりが、ヒカルなしで生きていけなくなったら。

全部、全部、時間も心も、ヒカルだけのものになったら。

――あかりは強いから、本当は、自分で思っているよりも、
ずっとずっと強いから。

きつと、そんなことにはならないけれど。

息もできないくらい、強く強く、深く深く。

あかりでなければ駄目だから。

理由なんて、どうでもいいから。

そばに、いよう。

「……キスしたい」

ヒカルの言葉に、あかりは笑って目を閉じた。

このぬくもりを、ずっと、手放さない。

10 めくもり（後書き）

ちよつとやきもちをやく話。ヒカルはわかりやすく、なんでもまっすぐぶつかっていく感じなので、やきもちも素直にやきます。御影くんは次に出て……くるかな？オリキヤラ増えました……美羽ちゃんです。よろしく。

11 愛に咲く花（前書き）

プロ棋士と学生。その立場の違いが、なんとなく、ぼんやりと、あかりを追いつめる。それでもやっぱり、好きだから。最後には、その気持ちしか残らない。文化祭のお話。

11 愛に咲く花

「わ、私はずっと、あなたのことが、好きでした」

「……僕も——君のことが好きだよ」

「本当に……？」

「……本当に」

「カット」

べしこんと、美羽は容赦なく御影の頭を台本を丸めたものでひっぱたいた。

「……美羽、痛いんだけど」

「痛覚麻痺してないなら、痛いと感じて正しいのよ」

「あそう……」

頭を押さえて、御影はそれ以上の抗議を断念した。美羽は昔からこうなのだ。逆らっても無駄だと、脊髄にたたきこまれている。

文化祭まであと二週間で切った。一日目の甘味処の準備と、二日目の劇の練習と、同時進行で進めなければならないので、あかりたちのクラスはまさに眼の回るような忙しさだった。

たかが学校行事になぜここまでしなくてはならないのだろう——
—とは思っなかれ。一日目、二日目、それぞれの人気投票で入賞すると、賞金が出るのだ。

生徒はその賞金を使って打ち上げで盛り上がりたいがために、毎年それは必死になるのだった。

「御影、黒い」

美羽は御影を一瞥すると、一言そう言った。
相手役であるあかりは「あはは……」と乾いた笑いを浮かべるし
かない。

「帝はシャイな男の子なのよ。告白シーンはちゃんと照れなきゃ駄
目じゃない。なにあっさり『好き』とかぬかしてんの」

「……わかったよ。努力する」
「休憩入れましょう」

美羽の一言で、クラスに「ふう」と大きなため息がこぼれた。

あかりは椅子に座って、台本を一読してみる。なにせセリフが多
いのだ。登場人物のほとんどと絡まなければならない。

「ご苦勞様」

「進藤君」

御影が話しかけてきても、前のように避けることはなくなってい
た。あかりは普通に應對する。美羽のおかげだった。

劇を通して接する機会が増えたので、普段でも壁をつくらなくて
も大丈夫になったのだ。もともと仲はよかったから、あかりも内心
ほっとしている。美羽も、そこまで計算しているわけではないだろ
うが。

「進藤君のほうが大変なんじゃない？ 演技指導」

「まあね。美羽は、僕には容赦がないから」

僕も昔から、なんでか美羽には逆らえないんだ。

ぶつぶつと愚痴をこぼす御影は、なんだかほえましかった。あかりはくすくすと笑う。

御影にはいつもペースをくずされてばかりだから、たまにはこういうのも悪くない。それにしても、幼なじみというものは、人が変わっても、関係性にはあまり変わりはないらしい。あかりも、ヒカルに対してだけは、昔から容赦なく怒鳴ることができた。

「でも、こんなラブストーリーを、文化祭でやってもいいのかなあ」「第三者的な立場としてだったら、僕は見たくないけどね。でもまあ、原作は竹取物語だし、学生らしくていいんじゃない」

学生らしくて、かあ……。

あかりはふむと考えこむ。「学生」と言う言葉に、最近敏感になっってしまった。

——違うか。最近ではない。ヒカルが「学生」ではなくなったときからだ。

一緒にいられて、気持ちを通じ合って、しあわせなのに。それは確かなのに。

どうしてこんなに、胸がざわざわするんだろう。

思い出して、あかりはしょんぼりする。この頃、気持ちの上がり下がりが顕著な気がする。しあわせなときはものすごくしあわせで、落ち込んでいるときはすごく落ち込んでしまう。

かぐや姫は、一途に幼なじみの男の子を思い続けて、求婚を断り続ける。

「このかぐや姫って、藤崎さんみたいだね」

「……え？」

心の水面に、ぼちゃんと小さな石ころが落ちた気がした。波紋は

広がって、そしてすぐに消える。いつまでもいつまでも、心にしこりを残すことは、もうない。

「ごめん。意地悪だったかな？」

「……進藤君って、自覚はあったんだね」

御影は薄く微笑んだ。少し前までは、この笑顔が怖かった。平気になったのは、なぜだろう。強くなったからだろうか？

—— たぶん、それも違う。

御影は「それなりには」と肩をすくめる。

「一応自制はしてるんだけどね。藤崎さんって、なんとなくいじめてみたくなるんだよね」

「いじめるって……」

「でも、これは——どっちかというと、美羽の、僕に対するいやがらせのような気もするけど」

「そんなこと、ないと思うけど……」

「彼とはうまくいつてるの？」

「……言わない」

「休憩終了」

にゅいつと美羽が入り込んでくる。

御影はじろりと美羽をねめつける。

「邪魔をしないでくれないかな」

「まだ諦めてないの？ みじめったらしいわね」

「一途と言ってくれないかなあ」

「うつつうしいだけよ」

美羽にばっさりと斬り捨てられ、御影は大人しく降参した。

胸が、痛む。あかりはきゅっと手を握りしめて、その痛みに耐えた。

思ってもしょうがないことだ。自分の中で、結論は出ている。納得もしている。

それでもやっぱり、寂しかった。ヒカルが、「ここ」にいないことが。

「美羽さあ、前々から思ってたんだけど、僕に何か恨みでもあるの？」

「数えただけでも両手じゃ足りないわ。ええと、一番古いのからいく？　一番新しいのからいく？」

「……言わなくていいよ」

それを言うなら僕のほうじゃないかなあ。

御影が、見たことのない顔で困っているのを、あかりは遠い遠い過去を眺めるような気持ちで見つめていた。

そして文化祭当日。一日目。ヒカルはなぜか塔矢と一緒に焼きそばを食べていた。

お互いに気まずい空気が流れていた。なぜこんなことになったのだろう……。

手合いが終わった後、塔矢と二、三たわいない話をしていたら、芦原が通りかかったのだ。

『進藤君、これからどこか行くの？』

『はい。高校の文化祭に』

『彼女？』

『え？ えつとまあ……はい』

『アキラも行けば？』

『は？』

『お前、ただでさえ高校生らしくないんだから。友達と文化祭！
たまには高校生らしいこととしてこい！ 若人よ！』

『友達じゃないんですけど……』

『またまた。テレるなよ』

——というわけである。芦原の妙な押しの強さに断れなかったのだ。ちなみに双方、決してテレてはいない。本心だ。

暮の話なら盛り上がるが、こういった場所に塔矢と二人、というのは、どうも空気が悪い。それは塔矢も同じようだった。

「何で僕が……」とぶつぶつ言っている。しかし覚悟を決めたようだ。顔を上げて、ヒカルに向きなおる。

「で、どこに行くんだ？」

「あかりは甘味処やってるって言ってたけど……。どこなんだろうな」

「またそう適当な……」

塔矢が呆れてためいきをつくとき、ヒカルはむっと眉をひそめる。

「しょうがねーだろ。クラスなんて知らないんだから！」

「前もって聞いておけばいいだろう！」

「忘れたんだよ！」

「威張って言えることか！」

「誰かお探しますか？」

ひよつと誰かの声が会話に割り込んできた。

二人がふりむくと、そこには長い髪をお団子にまとめ、青い浴衣

を身にまとった美人が立っていた。

「よろしかったら、ご案内しますけど」

美人は言って、微笑んだ。

ヒカルと塔矢は顔を見合わせ、「じゃあ……」と用件を告げる。

「藤崎あかりって奴がいるクラスがやってる、甘味処なんだけど……」

「あら。うちのクラスだわ」

美人はポンツと手を叩く。

「二人とも、あかりの知り合いなの？」

「は、はい」

「まあまあ。まあまあ。まあまあ……」

美人はぱつと笑顔になり、二人をくるくると凝視する。

二人は思わずたじろぐ。しまった。美人だけに変な人だ。

「私、帳とばりみはねといいます。帳とばりみはね美羽。あかり、今ちょうど仕事してるころなんですよ。どうぞ寄ってください。ご案内しますから」

「あ、どうも」

「お二人とも、お名前は？」

美羽がくるんとふりむく。

「進藤……ヒカル」

「塔矢アキラです」

「進藤？」

名前を聞いた途端、美羽はすすりつとヒカルに近寄った。なんと、御影と同じ苗字ではないか。

「本当に進藤？」

「……はあ？」

「あら、ごめんなさいね。うちのクラスにもいるのよ、進藤って」
「……それって……」

美羽の言葉に、ヒカルの顔が陰しくなる。勘のいい美羽は、すぐにぴんときた。

「進藤御影。……ご存知みたいね？」

「……別に、知ってるってほどでもないけど」

ははあ。

どちらかがあかりの思い人か何かだと思ったのだが、どうやらこっちの「進藤ヒカル」のほうのようだ。

美羽は「ふむ」と、思わずじっとヒカルをねめつけた。

バランスのいい身体つき、均整な顔立ち、鋭い眼。もう一人のほうもなかなかレベルが高いが、あかりの好きになるタイプではなさそうだ。

「……あの？」

「あら、ごめんなさい」

いぶかしげなヒカルの視線に気づき、美羽は素直に謝った。三人並んで歩きながら、美羽は二人に話しかける。

「あかりとは、中学の同級生？」

「ああ。えっと、俺は幼なじみなんだけど……」
「僕は、学校が同じだったことはないです。面識は何度かありますけど」

ということは、「進藤ヒカル」のつきあい、ということだろうか。それにしても目立つ二人組みである。普段ならこんなおせっかいはしないのに、つい声をかけてしまった。

雰囲気——惹かれるのだ。なぜだろう？

「学校はどこ？」

「あ、俺は行ってないから」

「僕は海王です」

「あら、進学校ね。進藤くんは——じゃあ、もう働いているってこと？」

「俺だけじゃねえよ。こいつは両立してるけどな」

美羽は柄にもなく驚いてしまった。へえ、なるほど。

しかしここで、「なにをしているか」まで聞くのはちょっとためられる。逢って数分だというのに。

(……でも、御影がふられたのって、多分この人が原因よね……)

ああ、詳細が知りたくなってきた。新聞部の血が騒ぐ。友人であるあかりのプライベートを根掘り葉掘り探るつもりはないのだが……。

そうこうしているうちに、目的地についてしまった。内心少しがっかりしながら、美羽は教室に入り、あかりを呼んだ。

給仕をするあかりの姿は男子の注目の的らしく、甘味処は大盛況であった。無論、美羽も客寄せの役目を背負っていた。校内をうろろしていたのは、甘味処の宣伝のためだったのである。

浴衣姿でうろつくだけで、男子が馬鹿のように寄ってきた。人の性とは哀しいものだ。

「あかり」

美羽がひらひらと手をふると、ちょうど給仕を終えたあかりが顔を上げた。「美羽」といおうとして、その横から出てきたヒカルを視界に捉えて笑顔になる。

「ヒカル！」

「よ」

あかりの浴衣は毎年見ているので、格段の驚きはなかった。ただやはり、他の女子よりは可愛いと思う。

「あれ。塔矢君？」

「どうも」

あかりは首をかしげる。どうして塔矢がいるんだろう。ヒカルとそんなに仲がよかっただろうか。どっちかというと喧嘩している記憶しかない。

「ヒカルが誘ったの？」

「誘ったというか、誘った人がいたというか……なりゆきだよ。単なる」

なりゆき？

どんななりゆきだろう。

ともかくも、あかりは二人を席に案内する。

「塔矢君、甘いものは大丈夫？」

お冷を配りながら、あかりはたずねる。

塔矢はうなずく。なるほど、あらためて考えたことはなかったが、彼女はなかなかの美人らしい。

（進藤がらみでしか逢ったことはなかったからな……）

今日の赤い浴衣もよく似合っている。思わず見とれてしまうほどに。

「俺、団子セットにする。塔矢は？」

「じゃあ……僕は雑煮セットで」

「かしこまりました。少々お待ちください」

鈴音が鳴るように笑って、あかりはぺこりと頭を下げた。

「ヒカルが食べ終わるころには交代の時間だから」

「おお、都合がいいな」

「そうじゃなくて、午後に来るって言ってたから、私が都合を合わせたの」

「おお、サンキュ」

その能天気な笑顔がなんだか気に入らずに、あかりは思わずつつとヒカルの頬をつねった。

「いてっ。いきなりなんだよ」

「別に」

つんとあかりは背を向けて、カーテンの陰に入ってしまった。ヒ

カルは首をかしげる。

「なんだかなー」

「君が悪いんじゃないか？」

あつさりと塔矢がいうので、ヒカルは面白くなかった。

「なにがだよ、塔矢」

「僕にわかるわけないだろう。ただ君は無神経なところがあるから、知らないうちに彼女を傷つけたんじゃないかってことさ」

「無神経とか、お前に言われたくねえよ」

「なんだと。僕のどこが無神経だというんだ」

「無神経だろうが」

「心外だ。取り消せ！」

「やなことだ！」

しばらく舌戦が繰り広げられた後、二人はにらみあう。すでに注目の的だった。どちらからともなく、ふう、とためいきをつく。決着は、これでつけるしかない。

「目隠し碁だ。いいな」

「いいだろう。先手はくれてやる」

「長考するなよ。早碁だ」

「当然だ。こんなところで時間を食うわけにはいかないからな」

あかりがセットを持っていったとき、すでに勝負は始まっていた。

「十一の８、オサエ」

十一の８、オサエ？

もしかして碁を打っているのか？

あかりは頭を押さえる。なんでまたいきなり……。碁盤もないのに。

頭の中で展開しているのだろうか。おそらくそうだろう。二人とも、あかりがきたことにも気づいていない。

碁のことになると、ヒカルの目にあかりは映らない。わかっていても哀しかった。

あかりは静かに皿をテーブルにおいて、さつさと裏に引っ込んだ。碁を打っているヒカルを見るのは好きだ。でも今日くらい、あかりを見て欲しかった。

せっかく浴衣を着ておしゃれをしたのに、ヒカルは何も言わない。

（そりゃあ、毎年一緒にお祭りに行くときに着てるから、珍しいものでもないけど……）

「あかり」

「美羽」

美羽が、興味津々にたずねてくる。

「あの二人、なにしてるの？」

「碁を打ってるの」

「ゴ？」

「囲碁」

「ああ、囲碁ね。そういえばあかりも囲碁部だったわよね」

「うん。私は、劇が忙しいから参加してないけど、久美子が行ってる。私も、これからヒカルと行こうと思ってただけ……」

「でも、石もなにもないじゃない」

「目隠し碁、ってやつじゃないかなあ。頭の中に石を並べて打つの」「そんなことできるの？」

「あの二人はプロだから」
「プロ？」

プロ？

美羽は一瞬、意味がわからなかった。

あかりは二人をまぶしそうに見つめながら、説明をしてくれる。

「囲碁の世界では高校生でプロなんて珍しいことじゃないんだって、あ、二人とも学校行っていないから、高校生じゃないけど……。ヒカルは去年試験に合格して……」

「じゃあ、二人の仕事って……」

「棋士」

「そう……」

世界が違う、と、美羽は思った。幼なじみで、同い年で……。ずっと同じ道を歩いていたはずの人間が、いつのまにか一人大地に足をつけ、自分の道を歩んでいる。

あかりの切ない視線から、そんな感情が簡単に見て取れた。

「……ヒカルってね、すごいんだよ」

独り言のように、あかりは呟く。ヒカルから視線をそらさないままで。

「この前は、北斗杯っていう国際大会にも出て……。韓国とか中国の代表と戦ったんだって。最近もね、対局、連勝続けて……。今、19連勝くらいで……。雑誌にも特集組まれたりとか、してるんだよ」

美羽はなににも言わずに、ぼんぼんとあかりの背中を叩いた。なに

も言わなくても、聞かなくても、わかってしまうこともある。

あかりは、ヒカルが好きなのだ。文化祭に呼ぶくらいだから、もしかしたらもうつきあっているのかもしれない。それでも、無尽蔵にわきあがる思いがある。

あかりは今、その思いをはかりかねているのだろう。

二人の対局が終わったようだ。なにがなんだかよくわからないが、ヒカルがガッツポーズをしている。

「よっしゃ。五目半勝ち」

「……凡ミスをしてしまった……」

塔矢はがっくりと肩を落とした。

「ああ、あそこな。塔矢らしくなかったよな」

「不覚だ」

「まあ、たまにはそういう日もあるって。あ、もう団子来てる」

「ああ……。気づかなかったな」

「なあ、さっきのあの手だけだよ……」

光り輝くヒカルの瞳。――弱くなる。強くなりたいのに、思えば思うほど、とまらなくなる。

あかりはくるりと背を向けた。

「あかり？」

「ごめんなさい。お手洗いに行ってくる」

教室を出て、あかりは走り出す。苦しい。苦しい。苦しい。どうしてだろう？

片思いのころは、こんな気持ちになったことはなかった。「遠い世界」だと、寂しく思ったことはあったけれど。

こんなに深く、深く、心がえぐられるような痛みを感じたことはなかった。

眼をそらしても、そらしても、そらしても。……それでも、視線を向けずにはいられない。思いがあふれて、止まらなくなる。

好きだと、ヒカルが好きだと、全身が訴える。

身体が、ばらばらになってしまいそうだ。

あかりは嗚咽をこぼした。泣きたいのに、ヒカルの前では泣きたくないのに、自分が大声で本音を出せるのはヒカルの前だけなのだと——気づき、そんな自分に、嫌気がさす。

「今日はありがとう」

「囲碁部の先輩、喜んでたねえ。今をときめく塔矢アキラと進藤ヒカルだもんね。まさか塔矢君が来ると思わなかったから、私もびっくりしたなあ」

「指導碁、たくさん打ってくれてありがとう」

「明日は、とうとう劇本番なんだよ。緊張するなあ。失敗しないかな。ねえヒカル、大丈夫かな」

夕焼けがあたりを照らして、街も、ヒカルも、そしてあかりも、オレンジ色に染まっていた。

あかりの笑顔が、言葉が、すべてが、なんとなくしらじらしくて

——本当にわかりやすい。昔から、こういうところは変わってないんだ。こいつは。

隠し通すこともできないくせに、隠そうとするんだ。

それが、ヒカルには腹立たしい。

ぴたっとヒカルが立ち止まると、あかりも、その少し前で立ち止まる。不自然な空気。不自然なあかり。ほら、だって、ヒカルを見

ようとしな。

「——あのなあ、あかり」

少し不機嫌な声で、ヒカルはあかりに近づいた。

「……わかりやすいんだよ。お前は」

少し前なら躊躇して、戸惑って、結局なにもできなかった。けれど今は、「つきあっている」という名分があるから。ヒカルはひょいっとあかりの手を取る。指を絡ませて、ぐっと力をこめた。

「俺が、なんにも気づいてないと思ってるのか？」

はつきり言って、気分が悪かった。怒っているわけでもない。不機嫌なわけでもない。

泣くわけでもない。ただ、心を——隠す。

それは見られたくないからだろうけれど。それは、ヒカルには隠しておきたい心だからだろうけれど。——それはわかるけれど、わかりたくなかった。

わがままだと、エゴだと、自覚はある。それでも、ヒカルは許さない。

ヒカルの中に、知らないあかりをつくらない。せめて一緒にいるときくらい、あかりの全てを知っていたい。

「あかり」

名前を呼ぶ。ヒカルは知っている。

あかりは、ヒカルに名前を呼ばれると、弱くなる。やさしく、強く、その名前を呼ばれると、弱くなる。

留めていたものが、押さえていたものがあふれて、止まらなくなる。

あかりを「あかり」と呼べるのは、特別な意味をこめて呼べるのは、ヒカルだけだから。

ヒカルを「ヒカル」と呼べるのも、あかりだけのようにな。

「——あかり」

「……わかんない」

そう言ってふりむいたあかりの眼には、涙が滲んでいた。

「同じところを——ぐるぐるぐるぐる、まわっちゃうの……」

開いた片手でごしごしと眼をこする。でも、あかりには涙をとめることができなかった。

本当に——心が、抜け出せない。

ヒカルの手ぬくもりがあたたくくて——変わらなくて。ここにいるのは確かにヒカルだと、そう思えるのに。思える瞬間があまにも儚くて。

「……ヒカルが好きなの」

好きで。ただ、好きで。

心が通じ合って、思いが募れば募るほど。

独り、取り残された気分になるなんて。

「でも、好きすぎて、辛いよ……」

痛い。

苦しい。

こんな思いは知らなかった。

そんなふうには、自立しているヒカルの背中によりかかることしかできないあかり自身が、とてもいやだった。

あかりはただ、好きでいたただけだ。好きで、好きだから。手を繋ぎたいだけだ。同じ場所です。

あかりには、棋士になることはできないけど、まっすぐに前を見て、自分の足で立ちたいだけだ。

そして、ヒカルの隣を歩きたい。

なのに、どうしてそうすることができないんだろう。思いばかりが強くなる。

「——あかりは」

ヒカルはまっすぐにあかりを見据えた。こんなとき、ヒカルは決して逃げない。

いつからだろう。ヒカルは、もう、なにからも逃げなくなった。そんな姿さえ、やっぱり遠かった。

「あかりは、俺の気持ちを疑ってるのか……そういうんじゃないよな」

あかりはふるふると首を横にふる。

言葉が、うまく口にできなかった。

「じゃあ、なにが辛い？　好きって——俺はうれしいよ」

ヒカルが幼なじみだったら。

この気持ちをずっと、閉じ込めたままでいられたら。

きつと、平穏で平和な日々と気持ちを、手に入れることができただろう。

でも、それはもう無理なのだ。知ってしまったから。

ヒカルの隣にいることの本当の心地よさを。思いを与え、返される幸福を。

あかりはただ泣くことしかできなかった。

だから、言いたくなかったのだ。こんなふうにヒカルを困らせてしまうから。

こんなふうに、ヒカルの重荷になってしまいうから。でも、ヒカルに名前を呼ばれたら、心をさらけ出せと求められたら——あかりには拒めない。

ぼろぼろと、涙は簡単に扉を突き破る。

「……ヒカルの……」

「え？」

「ヒカルの見てるものが……私には……見えないの……」

「……あかり？」

「私……ヒカルの道を遮りたくない……」

一人で立つこともできない。

ただ「好き」という気持ちしかない。いつか、ヒカルを、ヒカルの輝く未来を、汚してしまう気がする。

「……ヒカルが暮を打つてるとき……ヒカルを、すごく遠くに感じるの……。私が、なにもできない、子供で……ヒカルのそばにいる資格なんかない、ただの子供なんだって……実感するの……。こんなじゃ、いつか、ヒカルのこと……邪魔しちゃうよ……」

それだけはいやだ。絶対にいやだ。

繋いだ手を離さないように握りしめて、あかりは涙をこぼす。矛盾、していると思う。

そう思うなら、この手を離せばいい。「さよなら」を言えばいい。

でも、そんなことできない。——そんなことは、できない。

「じゃあ別れるか？」

——ヒカルの声が、やけに冷静な響きを持っていた。

言われたくない言葉。言いたくない言葉。どれだけ追い詰められても、絶対に絶対に、聞きたくなかった言葉。

心が、ぱきん、と、綺麗な音がして、壊れた気がした。

「別れて、ただの幼なじみに戻る？」

繋がれていた手から、力がぬける。ヒカルは手を離した。

「——あかりは、そうしたほうがいいって思ってるのか」

手を。

お願い。

離さないで。

この手を失くしたら。この手が、なくなってしまうたら。

あかりは涙でゆがむ視界の中で、必死にヒカルの姿を探す。

見えない。ヒカルが見えない。

どこにもいない？

もう、あかりのそばには。

「……やだあ」

考えたら怖くなって。

自然に言葉がこぼれた。

「俺だっていやだよ」

声はすぐ耳元でした。顔を上げると、呆れたヒカルの顔が映って、あかりはぼかんと眼を瞬かせる。

「あのなあ、泣くほどいやなら、最初からそういうことは言っくなよな」

あかりはそのまま、ヒカルの胸に飛び込んだ。ぎょっと驚いたヒカルだったが、すぐに受け止め、やさしくその背中をなでてやる。

「なーんか、難しいな。お前って」

「……」

「気持ちを疑ってるとか、そういうんなら、まだ怒りようとか証明しようとかあるのに」

「……」

「……俺の知ってるあかりはさ」

子供をあやすようにあかりの頭をなでながら、ヒカルはぽつりぽつりと、ひとつひとつ思い出すように話し始める。

「明るくて、誰からも好かれて、素直で、やさしくて、でもちゃんと、自分の意思をはっきり言えて——って、そういう奴だよ」

「……そんなこと……ないよ」

「あるって。だからさ、そんなふうに卑屈になるなよ。だいたい、邪魔とか思ってるみたいだけどな。そんなこと、全然ないんだからな」

前にも言ったぞ、と、ヒカルは無然として答える。

「あかりが隣にいないと、俺は俺じゃいられなくなるんだよ」

「……なんで？」

「……って、言わせるつもりかよ。……あかりに、ずっと逢ってなかったとき。暮を打ち終わった後、なんだかすっきりしないんだよ。どんなに内容のいい暮を打っても、打っても、打っても、すっきりしないっていうか……。俺が暮を打つのは俺のためで、過去と今と、未来を繋ぐため……。証、みたいなものなんだけど——でも、他の誰より、その、俺の証を、あかりに見てもらいたいって、思う……」

言わせるかなあ、こういうことを。

ヒカルは真つ赤な顔をして、ベリつとあかりを引き剥がした。ぼろぼろぼろっ。

あかりの眼から、大きな涙がこぼれおちる。

ヒカルは頭を抱えた。だから、どうして泣くんだろう。こっちが泣きたくなってくる。

「だからあ、泣くなつてば……」

ヒカルがぼんぼんとあかりの頭を叩く。

「——邪魔なんかじゃないから。……必要だから。だから、もう、そんなふうに自分のこと思うなよ。……頼むから」

笑っていて。

ヒカルのそばで、ずっとずっと。

それだけで、本当に、信じられないくらいの力になるんだ。

「好き」があふれて、身動きができなくなっているのは、本当はヒカルのほうなのに。

制服を着たあかりがまぶしくて、遠くて。

その世界に、ヒカルはもういられなくて。——距離を、感じず

にはいらなくて。

あかりと同じ空間にいる「学生」が、うらやましくて……。

あかりが泣かなきゃいけないことなんてなにもない。必要だと思ってるのは、そばにいてくれないとダメなのは、ヒカルなのだから。

——でも、泣かせたのはヒカルなのだ。

伝わればいいのに。あかりが泣く必要なんかないってわかるくらいに、気持ち伝わればいいのに。思っていること全てが、心の全てが、届けばいいのに。

そうしたらわかる。そんなふうに泣かなきゃいけない理由なんかどこにもないって。

「……あかり。訊いてる？」

こくこく。

無言の肯定。けれど涙は止まらない。

「……明日、劇なんだろう？ 顔が腫れて、出れなくなるぞ」

こくこく。

あかりはただ、首をふる。

「……」

「え？」

耳を寄せると、か細く、小さく、あかりの声が響く。

「ヒカ……ル……が……好き……」

「うん。うれしいけど」

ヒカルのけろっとした物言いが、なぜか逆にうれしかった。

不安も、心に生まれた孤独も、消えたわけではないけれど。

ヒカルの言葉が、しんなりと心に落ちてきて。

うれしくて、うれしいのに、涙が、哀しいときよりずっとずっと止まらなくて。

ヒカルには、本当に泣かされてばかりだ。

「……一緒にいてもいい？」

「……いてほしい」

「……うん」

不安で。

心細くて。

いつか、この手を失ってしまうんじゃないかと。

ただただ、重荷になっているんじゃないかと。

それが、怖かった。

ヒカルの気持ちを、「好き」という気持ちを受け入れれば受け入れるほど――

――過去と今と、未来を繋ぐための証を、あかりに見て欲しい。

ヒカルの過去と今と未来に、あかりがいるように。

途切れないように。離れないように。

「……私も、ほしいな」

手を繋いで、家路をたどる。

あかりがぽつりと、呟いた。

「私も……ほしいなあ。それで、ヒカルに見ていてもらいたい」

未来に続く道。

繋がる世界。

その証。

ヒカルに「碁」という、そんな存在があるように。

——あかりにも。

「……そうだなあ」

見つかるよ。

俺にも見つかったんだから。

だから、あかりに見つからないわけない。

真っ赤に腫れた眼で、「えへへ」とあかりは微笑んだ。

ヒカルがずつとずつと見たかった、あかりの笑顔だった。

無理に何かを隠した笑顔じゃない、心からの。

愛しくて、ヒカルは繋いだ手に力をこめた。

11 愛に咲く花（後書き）

ヒカルが天然タラシになってきている……。でも佐為がいなくなつてから、ヒカルつてぐぐつと大人っぽくなつて、かつこよくなりましたよね。原作でも、あかりとうまくいってほしかったなあ……。続編ないかなあ涙。フラグだけなんて……。！

12 コイシイヒト（前書き）

文化祭二日目。ヒカルはあかりの学校に、劇を見に来ていた。しかし、それを美羽に見つかって――。

12 コイシイヒト

「へえ？」

「……なんだよ」

「別に。ただ、面白そうだと思っただけよ。ねえ——進藤ヒカルくん？」

帳美羽の不敵な笑いに、ヒカルはただ、頭を抱えるしかなかった。

——不覚だ。

場所は体育館の裏側。人気のないその場所に、二人はたたずんでいた。

「わあ、あかり、可愛い」

「そ……そうかな」

淡いピンクのドレスを身にまとい、あかりは頬を赤くした。まさか自分の一生の中で、こんなものを着る場面に遭遇するとは思わなかった。

普段はしない化粧もどこせば、鏡の中の自分は別人に見えた。男子生徒から「ほお……」というためいきがこぼれる。

——劇は最初、かぐや姫が城から月夜を見上げるシーンから始まるのだ。

「あかり。幕が上がるわ。所定の位置について」

美羽がぽんつと肩をたたく。あかりはふう、と深呼吸をした。

「がんばってね」

「う、うん」

「だいじょうぶよ。練習通りにすればいいの」

「——うん」

重いドレスのすそをもちあげて、あかりは舞台へ躍り出た。

拍手とともに、そろそろと重い幕が上がる。舞台の中心で、あかり——かぐや姫は月を見上げる。

「まあ……綺麗な月」

観客からは、かぐや姫のあまりの愛らしさに感嘆のためいきがこぼれる。裾ではその様子を見ながら、美羽が「してやったり」と微笑んでいた。

「美羽」

「なによ帝」

帝役の御影が、いぶかしげな顔で美羽をねめつける。

「……なにか企んでない？」

「いいええ。なんにも？」

「……だからさ、なにを企んでるの？」

「教えない」

美羽にっこりと笑顔で斬り捨てられると、御影はもう黙るしかなかった。やっぱり企んでるのか……。御影は頭が痛くなった。昔から、この顔だけはきれいな幼なじみはなんだかいやな予感がする——果たして、その予感は的中するのだった。

——かわいいとは思った。いつもとちょっと違って、大人っぽくて。きれいだなと、素直に。でも、それだけだった。ヒカルはどこか冷めたような気持ちで、舞台を見ていた。着飾っていないなくても、ヒカルの部屋でうんうんうなりながら暮を打つあかりのほうが、ヒカルにはかわいく見えた。

あそこにいるあかりは、ヒカルを見ていない。——それが一番、心が動かない理由だった。

ヒカルはそんなことを考えている自分に嫌気が差した。独占欲の塊で、醜い嫉妬が心を渦巻く。あそこにいるあかりは、ヒカルの知っているあかりじゃない。けれど、知りたいとも思わなかった。

「私と結婚したいなら、生涯私に触れないと約束できますか」

「私と結婚したいなら、あなたの持つている財産の全てをお捨てになると、約束できますか」

「私と結婚したいなら——」

自分に言い寄る求婚者に無理難題を言い、次々とその求婚をはねのけるかぐや姫。

それは、大好きな幼なじみがいるから。

それはヒカルじゃない。進藤御影——役では帝だが——が、かぐ

や姫の思い人だった。

「また断ったんだ」

「……帝」

「あいかわらず、かぐや姫はわがままだね」

「そうかな……」

「せっかく、お金持ちになれるチャンスなのに」

「……私、好きな人がいるの」

かぐや姫のまつすぐに人を射抜く眼に、帝は動けなくなる。ヒカルの胸がつきんと痛む。大きくはない、けれど鋭い痛み。演技でも——それでも、あかりがヒカル以外の誰かを見ている。その事実が耐えられなかった。

「——私は帝が好き」

「かぐや姫……？」

「帝が、世界で一番好き」

——ヒカルが好き。

ヒカルが好き。

泣きながら、微笑んで。愛しい愛しい言葉を紡ぎながら。

すぐにでも——あかりを抱きしめたかった。あかりをこの手に閉じ込めてしまいたかった。誰にも見せたくなかった。

どうしてヒカルはここににいるんだろう。どうしてあかりはあそこにいるんだろう。

——ただの芝居だ。芝居は真実じゃない。真実ではないのに、それでもその言葉を紡いでいるのはあかりだ。それもまた、事実なのだ。

『あかりが心配？——それとも自分が不安？』

帳美羽——あいつも何を考えているのだろう。相手が進藤御影ということ、別に何かを心配しているわけじゃないがやっぱりなんとなく気になって——都合よく手合いも仕事も入ってなかった、こつそり様子を見るくらいならいいだろうと忍び込んだところを後ろから声をかけられたのだ。

『何してるの？ 不法侵入？』

けろりとした物言いに、ヒカルはそろそろと美羽を見上げた。ヒカルが誰だかわかると、美羽はふうん、と不敵な笑みを浮かべたのだ。

『へえ？』

そしてなぜか——ヒカルはこの高校の制服を着て、堂々と劇を見ているのであった。

『木を隠すには森の中、でしょ。どうせなら、堂々とご覧になったら？』

『……なんで？』

『なんでって——そうね。私はあかりの友達だし、おもしろそうだし。なにより、あなたに興味があるわね。とても』

『は……？』

『人の好意は素直に受け取っておくものよ』

美羽の笑顔となんとなく断れない雰囲気、ヒカルはどこから調達したのかは謎だが、大人しく制服を受け取った。

そして現在に至るわけである。

久しぶりの制服は、なんとなく窮屈だった。考えてみれば、制服

を着たのは中学校のたった三年間だけだったのだ。

ぶかぶかの制服はいつのまにかぴったりになっていて——いつのまにか、あかりの背を追い越していた。

見上げていた顔を見下ろすようになって。

あかりの背は、もうヒカルを追い越すことはなかった。そのかわり、あかりはどんどんきれいになった。——きれいになっていく。きつとこれからも、もっとずっと、きれいになっていくんだろう。意識しなければ、意識しなかった頃はわからなかった。気づいたときには、もうめいっばいきれいになったあとだった。

『あなたって、そういうことで動じるタイプには見えないんだけどなあ。意外というかなんというか……』

美羽の言葉が脳裏をちらついて、ヒカルは「だあつ」と頭をかきむしる。むかつく。

なんだか口惜しい気持ちになる。見透かされていることも、こんなふうにあかりを求めてしまう自分も。

(……早く終わらないかな……)

そして、早く、ヒカルの知っているあかりに逢いたい。

ヒカルだけの——あかりに。

「進藤君」

「おわっ」

ほんと不意に肩をたたかれ、ヒカルは思わずぎよつと後ずさる。

「失礼ね」と美羽は眉をしかめた。

「ちょっと来てくれる？」

「は？」
「ちよつと来てくれる？」
「なんでだよ」
「ちよつと来てくれる？」
「だから、なん——」
「ちよつと来てくれる？」
「……はい」

有無を言わせぬ雰囲気、ヒカルはただうなずくしかなかった。

「はい。これに着替えて」
「は？」

美羽に差し出された服を受け取りつつも、ヒカルは首をかしげる。
なんなんだ。なにがしたいんだ？
飲みこみの悪い男ね、と、美羽はためいきをつく。

「劇に出るのよ。あなたが」
「は？」
「大丈夫。セリフなんてないから」
「……は？」
「だからとつとと着替えて」
「いや、じゃなくてなにをいきなり——」
「私が単なる慈善事業であなたを助けたと思う？」
「……」

ヒカルは頭が痛くなった。この美羽という少女、とんでもない曲

者らしい。なにより真意がまったくつかめない。

が、どこか逆らえないプレッシャーを持っている。だからヒカルは、しぶしぶ衣装を受けとった。

「……そんなことだろうと思ったよ」

「あら御影。いたの」

「いるよそれは……」

なんでいないと思うんだよ。

ついさっきまで舞台に出ていた御影は、こきこきと肩を鳴らしてためいきをつく。自分がこの青年を好いていないことくらい知っているだろうに……意地が悪い。

いやな予感が当たってしまったではないか。

御影はじろりとヒカルを一瞥すると、そのまま美羽に視線を移した。

「で、彼をどうするの」

「舞台に出すのよ」

「それはもうわかってるよ……。何の役で」

「最後に、かぐや姫が泣いてるでしょ。そのときに『かぐや様』って一声かける使用人」

「……そんな役あったっけ？」

「今作った」

「……なんのために？」

「面白そうかと思って」

にっこり。

そして御影は言葉を失うのだった。昔から美羽に勝てたためしはない。なのになぜ毎度毎度懲りないのだろう。

しぶしぶ使用人の服に着替えたヒカルを見て、クラスの女子が小

さく悲鳴を上げた。「かつこいい」と騒がれることにびっくりする。
……かつこいい？

小学生の時は、クラスの女子には「ちび」と馬鹿にされていたヒカルが？　というか、いいのだろうか、彼らは。いきなり部外者が入ってきて、舞台に出ようとしているのに。

「君は人の目を惹くからね」

「……は？」

御影がこそつと話しかけてきて、ヒカルは途端怪訝な表情になる。彼も、好意的に話しかけているわけではなさそうだ。いつもあかりに見せていた嘘くさい笑顔もない。

「女子はそれだけで満足みたいだよ。それになにより、美羽はああ見えて人望があるから」

「……そうかよ」

「君たちは、幼なじみだっけ？」

君たち、とは、もちろんヒカルとあかりのことだろう。考えてみればまともに御影と話するのは初めてだ。別に話したくもなかったのだが。

「……それが？」

「僕と美羽も、幼なじみなんだけどね」

「……だから、なんだよ」

「近くにすぎで、普通、そういう対象にはならないんじゃないかって思ってた。お互いに気を許せる存在ではあるけど——恋愛対象にはならないんじゃない？」

「ずいぶん、もったいぶった言い方だな」

売られたけんかは買う主義である。

ヒカルは一步も引かずに御影を睨みつける。その様子を見ながら、
「あら、面白そう」と、美羽は微笑むのだった。

「——二人はただ、思い込んでるだけなんじゃないかってことさ」
「……思い込む？」

「もっと、視野を広げてみるのもいいんじゃないかな。——二人だけの世界に閉じこもっていいないで」

二人だけの世界。

他の誰も入れない、二人だけの世界。

——そんなものがあつたら、どんなにいいだろう。

でも、ありえないのだ。そんな世界は。ヒカルの世界も、あかりの世界も、これからどんどん広がっていくのだろう。そうして重なっている世界が、どんどん侵食され、変わらないものなど、きっとほんの少しなのだ。

ヒカルはふつと笑みをこぼした。

「——それ、いいな」

「え？」

「二人だけの世界って奴。俺は大歓迎だけど？ ——俺は、あかり以外の女なんか、知りたいとも思わない」

あつさりとそういわれ、御影は虚を突かれる。

「進藤君。出番」

「ああ」

ヒカルが小走りでかけて行って、御影はふと、自分の片手を眺めやる。からっぽの手。なにも掴んでいない手。彼女の手を、掴む権

利のない、何の意味もない手。——どうしてもどうしても、手に入らないものがある。どうしてもどうしても、手に入れたいものがある。

でもやっぱり、笑っている顔が見たいから……。

「性格悪いのね。御影」

「……美羽に言われたくないな」

こつんと、形のいい頭が、御影の肩に寄せられた。その重さが、ゆっくりと御影にしみこんだ気がした。

「そんなにあかりが好き？」

「……うん」

「でも、私、思っただけけど。言ってもいいかしら」

「……聞きたくないなあ」

「思っただけけど」

「……わかった。聞くよ」

「——御影は、進藤君が好きなあかりを、好きになったんじゃないかしらね」

まっすぐに、ただまっすぐに。ヒカルだけを見つめていたあかりだから。

その思いがあかりを強くも弱くもする。そして危うい儚さと美しさを見せる。

「……それ、最悪」

かなわぬ恋なんて、御影は望んでいなかった。彼女がほしかった。心を、気持ちを、自分に向けてほしかった。でもなんとなく当たっているような気がして、こつんと、軽く美羽の頭に自分のそれをぶ

つけた。

——月はただの絵で、これは芝居で、この服も「衣装」でしかなくて。

でも、なぜだろう。なぜだか、目薬を使わなくても、あかりはほろほろと泣いていた。

意味など知らない。でも、大好きな人を思い出せないかぐや姫が、自分と重なった気がしたのだ。

あかりはヒカルを忘れない。忘れられない——だから、涙が止まらなくなる。

ここにヒカルがなくてよかった。恥ずかしくて見せられない。

「——かぐや姫」

不意に、後ろから声が聞こえた。あかりは戸惑いつつも顔をそちらのほうへ向けた。ここで、そんなシーンがあっただろうか。

ぶつかったのは、困惑しつつもまっすぐにあかりを見つめているヒカルの姿だった。

どうしてここにいるんだろう、とか。

ヒカルには見られなくなかった、とか。

頭をかすめた一瞬の疑問もふきとんで。

「——」

聞こえるか聞こえないかのかすかな声でヒカルの名前を呟いて、あかりはヒカルの胸に飛び込んだ。

観客がどつとわきおこる。

なにが正しいシーンなのか、ヒカルはまったくわからないので、とりあえずその背をなでてやる。

震える手が、愛しかった。

そして、幕は静かに下りた。

下りきった後も、あかりはヒカルを離さなかった。

次の日、あかりはクラス中のからかいの的になってしまった。

「誰？ 誰？ 彼氏？」

「あかりのあんなところ初めて見た！ 可愛かったけど」

「幼なじみの？ いつからつきあってるの？」

「かつこよかったよねえ。でも、あかりが心配で見に来てくれたんでしょ？ やさしいっていうか、愛を感じるね！」

「美羽もイキなはからいをしたもんよねえ。最初はびっくりしたけどさ！ 劇も大成功だったし」

おかげで一日中、顔が真っ赤でどうしようかと思つたものだ。

御影から仕掛け人は美羽だと聞き問いただと、美羽は悪びれる様子もなくあっさりと云つたのだった。

「ハプニングがあつてこそ盛り上がるものでしょ？」

につこり笑つてそう言われると、思い出すだけで恥ずかしくて死んでしまいそうなあかりには、もうなにも言えなくなってしまうわけ……。

「ねえあかり。あのあと二人で消えちゃったけど——なにがあつ

たの？」

「言わない！」

「なにかはあつたんだ。ふーん」

「……っ！ 美羽！」

「顔、ユデダコみたいよ。可愛い」

「みっ……みっ……美羽の意地悪！」

結果、「現代版かぐや姫」文化祭編」は見事人気投票一位を獲得したそう。

最後に出てきた使用人が誰なのか、しばらく女子の間では噂になったとかならないとか、あかりの「彼氏」ということで決着がついたとかつかないとか……それはまあ、ヒカルには知る由もない。

12 コイシイヒト（後書き）

……大昔に書いたもので、見直すものすごく恥ずかしい！なんて
恥ずかしい話を書いたんだ、私！ってなくらい恥ずかしかったんで
すが、まあ、だからって上げないのもなんなので、上げときます。
消えたふたりがどうなったかは次で。

13 イトシイヒト（前書き）

劇のあと、学校を抜け出したふたりはヒカルの家へもどり——そして、わけもわからず大げんかする。

13 イトシイヒト

「し、信じられない」

「……俺だつて信じられないよ……。つていうかなあ、いいかげん泣きやめよ！」

「なっ……なっ……泣かせてるのは誰よ！」

「別に俺はなにもしてないだろ！」

「したでしょうがー！」

「あれは不可抗力だろ！俺だつて好きでやったんじゃ——つかあれくらいでなんでそんな号泣してんだよ！意味がわかんねー！」

——進藤ヒカル宅にて、二人は色気もへったくれもなく、喧嘩を繰り返していた。

体育館の舞台裏で、泣きながらヒカルを離さないあかりと、知らない人間に取り囲まれ冷やかされながら、どうにかこうにか騒ぎの中を脱出して。

あかりはドレスだったので、でも教室はどこかわからないし、あかりは話にならないし、なによりまた人に囲まれることは眼に見えていたので、ヒカルはそのままあかりをタクシーに連れ込んだ。つくづく社会人でよかった、とヒカルは胸をなでおろす。なんだか最近、本当にこんなパターンばかりだ。……付き合う前も、付き合ってから、あかりはわんわん泣くし、なにも言わないで抱きついたり泣き続けるし……。

ヒカルはそれを懸命になぐさめるのだ。

ヒカルの家に着くと、ヒカルはそのまま母親の小言を無視してあかりを部屋の座布団に座らせる。……これも毎回のことだ。

そして沈黙。破ったのは、あかりだった。もちろん、まだドレス姿のままである。……どうにも、眼のやり場に困る。

「……どこまでタイミング悪いのよ」

「は？」

「し、信じられない」

ひつくひつくとしゃくりあげながら、あかりは顔を上げた。

うつとヒカルは目を背けたくなる。理性が一気に星を飛び越えてしまいそうだ。

ただでさえ今日は悶々といろいろ考えていたというのに——
具体的に言うと、「あかりを抱きしめたい」とか「あかりを閉じ込めたい」とかまあいろいろ……。そして結構叶ってしまっているこの状況……。

母親が（一階の台所にはあるが）いてよかった。

ヒカルは頭をふって、うーんとうなった。

「……俺だって信じられないよ……。っていうかなあ、いいかげん泣きやめよ！」

「なっ……なっ……泣かせてるのは誰よ！」

「別に俺はなにもしてないだろ！」

そう、ヒカルはなにもしていない。……あかり本人には。

ただ、勝手に劇を見に行つて、強制的に劇に出させられただけだ。

「したじゃない！ な、なんで、劇に……」

「……いろいろ事情があるんだよ」

「な……なによ……」

「なにつて——ええと、だから……。……だから……」

「馬鹿！」

一刀両断で斬り捨てられ、ヒカルは「むっ」となって言い返す。
後ろめたさや欲望はこの際二の次なのであった。

「馬鹿つてことはないだろ！ だいたい、泣いてる理由をまだ聞いてないぞ！ ちゃんと見えよ！」

「どうでもいいじゃない！」

「よくない！」

「ヒカルにはわからないのよ！」

「なっ……」

「そ……そうやって……いつも自分の好きなことばかりやって……わ……私の気持ちなんて……考えないんだから……」
「そんなこと——」

……ある……かもしれないけど……。
ヒカルは言葉につまる。確かに、結構好きなようにやってきたかもしれない……。

でもヒカルはヒカルなりに、あかりの事を考えて——それだつて、つめて考えれば自分の好きなようにしてるかもしれないけど……。

——考えたら、腹が立ってきた。

「お前だつて、いつも泣いてばかりじゃないか」

ヒカルはむうつと眉を寄せて、あかりの腕を取った。逃げようとするあかりを逃さず、ひきよせる。

「……っ、は、離して！ もう帰る！」

「んな顔のまま帰すかよ。ふざけんなよ」

「……どうせ、不細工な顔してるわよ」

「そういうこと言っでんじやないだろ！」

「じゃあなによ！」

「だから、お前だっでいつも——何にも言わなで、泣いてばかりじゃないか！それで、俺が悪いって言われたって、わかるかよ！」

「……だっ……」

「ずっとずっとずっと、最近泣いてばかりで、笑ったと思ってもすぐ泣いて——そのたびに、俺がどんな気持ちになるかなんて、お前は考えてないじゃないか！」

あかりが泣くたびに、涙を見るたびに辛くて。

どうにか笑って欲しくて。

頭の中がこんがらがって。暮を打つときの、心の水面がしいんと静まるような、そんな気配は微塵もなくて。

どうしようもできなくなって、でも眼をそらして逃げることもできなくて——

「……あかりだっで、なにもわかってないんだ」

「……ヒカル……？」

名前を呼ばれて、まるでそれが合図とでもいうように、ヒカルの中でなにか、音がした。

なにもわかってなくても、泣いても、たとえ「さよなら」を言われても。

——そんなの、ヒカルは許さない。

離れていくなんて、許さない。

軽く力を入れると、あかりは簡単にヒカルに押し倒されてしまった。いまや完全についてしまった力の差を、こんなふうに使うのは卑怯だと、頭の片隅で思う。

でもそれよりもなによりも、今は勝っているものがあって——

深く深く、その唇に口付ける。小さく抵抗する腕を、ヒカルは床に縫いつけた。

見開かれたあかりの瞳を、ヒカルはどこか冷めた気持ちで見つめていた。

「ヒカ——」

開かれた口から、無理矢理舌を侵入させて、あかりのそれを絡み取る。徐々にあかりの身体から力がぬけていく。ヒカルはそのまま口を下降させて、あかりの首筋に舌を滑らせる。

「ひゃ……っ」

あかりが身をくねらせてその感覚から逃げようとするが、ヒカルの腕に全身をしばられていて、それは徒労に終わった。

「ヒカル——」

細くて、やわらかくて、すべすべとした絹のような感触を楽しみながら、ヒカルの頭の中も真っ白になっていった。

——自分は、なにをしてるんだろう？

半分、理解できていなかったように思う。でも、ただ必死で。必死な分、それまでこらえていたものを制御することができなくて。

あかりの声が遠く、でも甘く、脳を中心に響いて。

まるで、酔っているみたいだと思った。

ぷちんと、背中のドレスのボタンがはずされた。

「ヒカル—— ココアいる？ いるなら持って行くわよ。あかりちゃんにも聞いてくれる？」

「……いない」

ヒカルの声がかぼそく、あかりの耳に届いた。へなへなと、ヒカルからも力がぬけて、そのままあかりの胸の上に落ちてくる。

「……ヒカル？」

ぴくりとも動かないヒカルが心配だったが、あかりは上にヒカルがいるおかげで動けなかった。

「……胸が気持ちいい」
「！」

べしつと、次の瞬間容赦なく、空いた手であかりのゲンコツが飛んできた。

ヒカルは仕方なく起き上がる。

「……痛いんですけど」
「馬鹿！」
「……はいはい」

ヒカルはベッドからそもそもシートをひっぱりだすと、ぼさつと起き上がったあかりにかぶせた。

「……」
「あかり？」
「……ヒカルのエッチ」
「……うん」

シートの隙間から、あかりの顔を覗き込む。本当は覗かなくても、どんな顔をしているかなんて、声でわかってしまったのだけれど。

「怒ってる？」

聞きながら、ヒカルはあかりの頬に手を寄せた。熟れた林檎のように真っ赤な頬は熱くて、でもその熱が逆に気持ちよかった。

「……私も、ごめんなさいを言わなくちゃいけないから……」

キスをせがむと、あかりはゆつくりと小さな唇を寄せてきた。ヒカルはそのまま、やさしくキスをする。

シーツに隠された小さな空間は薄暗くて、少し暑苦しくて、でも、静かだった。

やわらかくて細い髪が指に絡まって、けれどヒカルは気にもせず、にくいとあかりの首を抱き寄せた。

戸惑いつつも、あかりの腕がヒカルの背中を抱きしめるのを感じながら、二人は、二人だけのキスを楽しんだ。

「……で、泣いてた理由は？」

「……くだらないよ？」

「そんなの、毎度のことじゃないか」

「う……。だって……ヒカルがいきなり来るから」

「それで泣くのかよ」

「……ちよつと違うけど」

本当は、自分がかぐや姫のようにヒカルのことを忘れてしまったら。

この気持ちを、失ってしまったら。

あかりはきつと、かぐや姫のように強く生きることはいできない。
思いが大きすぎて、心が空っぽになって、ぬけがらのようになって
てしまう――

そんなことを考えていた。

だから、絶対に、なくさないようにしよう。

そう思っていたら、その思いに呼応するように、ヒカルが現れた
から。

そうしたら涙が止まらなくなったなんて――やっぱり、恥ずか
しくていけないではないか。

ヒカルが――あかりが泣くことで、ヒカルがそんなに心を痛め
ているなんて知らなかった。それはとてもうれしいことだけれど――
――やっぱり、悪いと思ってしまうから。

「……あー。ところであかり。怖くなかった？」

「え？」

シートにくるまってヒカルに抱きしめてもらいながら、髪の毛を
くるくるいじったり、ヒカルと軽く戯れながらの言葉に、あかりは
きよんとする。

怖い？

怖いとはやっぱり――

ぼぼんっ。

思い出すだけで、身体から火が出そうである。あかりはぼつと
シートに顔をうずめた。

「……びっくりした」

「まあ、それはそうだと思うけど……」

「……だから、突然はやめてね。心の準備ができないから」

「……気をつける」

「……怖くなかったよ。何にも考えられなかったから、よくわから

ないけど……」

「——俺も」

よくわからなかった。

シーツからもぞもぞと顔を出したあかりと眼が合って、お互いに吹き出した。

いやじゃなかった。

怖くなかった。

思い出すと、ただドキドキしてでも、また触れたいと思うから触れて欲しいと思うから。

——ヒカルだから。あかりだから。怖くないのだ。

踏み出そうと思う。

だから、きつと、だいじょうぶ。

ヒカルの母が部屋のドアを開けたとき、二人は幼い頃のまま、同じシーツに包まれて規則のいい寝息を立てていた。

13 イトシイヒト（後書き）

けつきよくいわゆる痴話げんかってやつで……犬も食いませんね。
はい。ヒカルは根が素直で率直なんで、ま、やるときはあんまり後
先考えずに行っちゃうような気はしますが。今回はオリキャラ出張
りませんでした。以降、ちょこちょこ出てきます。

14 祈り人（前書き）

どうしてこういうことになってるんだろう？ ヒカルは頭を悩ませていた。くうくうとしあわせそうに眠るあかりの寝顔。……じゃないだろ。勘弁してくれ、と、ヒカルは天井を仰いだ。

未成年の飲酒シーンがあります。

14 祈り人

——なにがどうしてこうなったのか。

ヒカルは暮の神に訊ねたくなった。

ソファに腰かけるヒカルの膝には、ころんとあかりの小さな頭が置いてあり、あかりはソファに寝そべって、くうくうと可愛い寝息を立てている。

短いデニムのスカートからは細くみずみずしいふとももがひょっこり顔を出している。まるで「やあ」とヒカルに笑いかけているようにも見える。……末期だ。

膝には触れた頬から、まだ残る熱が伝わってくる。すきとおった桃色の肌。そう、まるでかみつきたくなるような——

その衝動を、ヒカルは必死に抑えるのだった。しかし、これは大変な作業なのである。

さかのぼること数時間前——ヒカルは一本の電話を受け取った。

『あ、ヒカル？ あかね、今、大丈夫？』

『大丈夫って、なにが？』

珍しくもないあかりからの電話。

ヒカルは首をかしげる。

『今から、うちに来ない？』

ヒカルはぱちくりと目を瞬かせる。もう日も暮れて、外は薄暗い……というより、暗い。

「なんでいきなり」

『実は、今、お父さんとお母さんがいないの。あのね、親戚で急に亡くなった人がいてね。私は知らない人なんだけど……。お父さんとお母さん、お通夜とお葬式に出なくちゃいけないから、今日、そっちに泊まるんだって』

「じゃあ、お前一人かよ」

『うん……』

「……まさか心細いとか言うんじゃないだろうな？」

『う……』

あかりは案の定、言葉につまった。

(おいおい……)

ヒカルは呆れる。

「お前、いくつだよ」

『う、うるさいな』

「どうせおばさんたちには、だいじょうぶだよ！ とかオオミエきつたんだろ」

『うつうつ』

「まあそついうことならしかたねえか。確かにちよつと無用心だしなあ。わかった。今から行くから」

『本当？ ありがとう』

ヒカルは電話を切って、母親に声をかける。

「母さん。俺、今からちよつとあかりの家行ってくる」

「あかりちゃん？ もう夜遅いわよ」

「おじさんとおばさんが葬式だとかで、今、家に一人なんだってさ」

「あらあら……。そうなの。じゃあヒカル、お煮しめ持って行きなさい。お泊り？」

「んー。たぶん」

「そう。戸締りはしっかりね」

「へーへー」

母は手早くタッパにお煮しめをつめると、ヒカルに手渡す。

「じゃあ、行ってくる」

藤崎家とはもう家族ぐるみのつきあいだ。あかりの父や母には、ヒカルもずいぶん世話になったものだ。ケーキをごちそうになったり、野球につきあってもらったり……。

一緒にバーベキューをしたこともある。

そんなわけで、ヒカルは軽い気持ちで藤崎家に赴いたのだった。昔のように、不意に思いついて玄関のインターフォンを鳴らす。「あかりいますか？」するとあかりの母があかりを呼び、二人で遊びに行く――

そんなことを思い出しながら。

――それがまさかこんなことになるなんて、夢にも思っていなかったのである。

「ヒカル。いらっしやい」

「これ、母さんから」

「わあ、おいしそう。ヒカル、もうごはん食べた？」

「いや、まだ」

「私、ピザでもとってって言われたんだけど……」

「とれば？」

「お煮しめとは合わないんじゃない？」

「別にそれは、明日にでもおじさんたちと食べれば。冷蔵庫に入れておけよ」

「うーん。そうか……。じゃあ、そうしようかな」

つきあいはじめて数ヶ月、まだまだ初々しいと言っていい関係だが、会話にまったく色気はなかった。

彼女の家になつたりきりであるにも関わらず、ヒカルは普通にリビングでくつろいでいるし、あかりもいまさら緊張などしていない。

「俺、腹減った」

「わかったってば。しょうがないなあ……。ピザでいいのね？」

「うん。シーフード」

「えー。トマトがいいよお」

あかりがぷうつと頬を膨らませる。

「どっちも頼めばいいじゃん」

「食べられるかなあ」

「俺は余裕」

「じゃあ、残さないでよ」

「はいはい」

こんな会話も、実に穏やかな雰囲気の中とりおこなわれたのだ。そう、平和だった。

二人並んでソファでくつろぎながらテレビを見て、ピザの配達を待った。

その間、あかりは勉強をしたり、ヒカルにぺとっと甘えたりと……まあ、いろいろだ。

別にそれも平和の範疇だ。軽く戯れてキスを交わすのも、もう当たり前の出来事になりつつある。

それだけではほんの少し物足りなくなっている——のは、ヒカルだけだろう。無論ヒカルとて、あかりに無理強いするつもりはない。今のままで十分しあわせなのだ。

……つい最近暴走してしまった記憶はあるが、まあそれは封印しておくとして。

そうこうしている間にピザが届いて、あかりが冷蔵庫を開けた。

「ヒカル、ジュース飲む？」

「飲む」

「グレープとピーチがあるけど」

「グレープ」

「じゃあ、私はピーチにしようっと」

コップに注がれ、パチパチと炭酸のはじける音がする。

「はい」

何気なくコップを受け取り、ヒカルはくいつとそれを一気に飲み干した。

「！」

途端、くらつとめまいが起こる。ヒカルはとっさにソファの縁に手をかける。

めまい——というか、これは……。

「あかり、お前——」

「ヒカル！」

きゃっほーい、と、あかりは勢いをつけてヒカルの胸に飛び込んでくる。

「おわっ」

「あ、こぼした……」

顔を真っ赤にしたあかりは、ヒカルの服にこぼれてしまったジュース——正確にはカクテル——をじいつと虚ろな目で見つめる。

（……遅かった）

アルコールのせい、状況のせい、ヒカルは頭が痛くなる。ヒカルは酒など飲まないの——と言いかまだ未成年だし——あまり免疫がない。それはあかりも同じのはずなのだが——どうやらわかりやすく酔ってしまったようだ。

そんな馬鹿な。

あかりのコップを見るとすでにからっぽだ。どうやら一気に飲んでしまったらしい。

確かに、見た目ジュースに見えるから、間違ってもしかたない——かもしれないが、いまだきそんなベタな間違いをおかすやつがいるとは。

「へへへ。ヒカルー」

「なんだよ。くつつくな。水飲め、水」

「やーだ。いらなーい」

けたけたけた、と、あかりは大声で笑う。笑い上戸？

「酔うの早いぞ」

「えー？ 酔ってないよ」

「……酔っ払いはみんなそう言うんだよ」

「酔ってないってば。だって、お酒なんか飲んでないもん」

「だから、いま飲んだのはジュースじゃなくて——」

「脱いで」

「ああ、脱い……は？」

「しみになっちゃうでしょ！ 脱ぐの！ ほら！」

有無を言わせず、あかりはヒカルのシャツのボタンをぶちぶちとはずし始める。

ヒカルはあわててあとずさる。ちよつと待て。

「じ、自分でできるから！」

「駄目！」

「駄目って——おわわっ」

あかりに気おされて、ヒカルはバランスをくずして床に倒れこんだ。

頭をしかとぶつけて、ヒカルはよっこいしょ、と身体を——起こすことはできなかった。あかりがぺつとりとヒカルの腹の辺りにまたがっていたからだだった。

（げ……）

うつとりと頬を染めて、とろんと目を潤ませて。

——襲われたのかこいつは。

ヒカルは高鳴る動悸を抑えることで精一杯だった。とはいえ、今はヒカルが襲われているのか？

「……ヒカル、身体……硬い」

「は？」

「……私と違う」

「そりゃあ——」

当たり前だろう。

ヒカルに言わせれば、あかりがふにゃふにゃとやわらかすぎるのだ。今だって、腹に当たっているふとももの感触が——いや待て、考えてはいけない。

「……なんか、ずるい」

「は？」

「……なんか、身体……熱い」

「……酔ってるんだよ」

ヒカルの呆れた声に、「ひょえ？」とあかりは首をかしげる。

「酔ってないよ」

「酔ってるよ」

「……なんで？ 私、ジュースしか飲んでないのに」

「カクテルだったんだよ」

「……ああ……。お母さんがたまに飲んでる奴……。ジュースだと思っただのに……」

とろんとした目で、あかりは顔をゆっくり近づけてくる。視界がぼやけて、ヒカルの顔がうまく見えなかったからだ。

しかしヒカルはそう単純にはいかない。いつそ押し倒されたままではよかったのかもしれない。うまく身体を動かせない……。無理矢理がんばれば問題はないのだが——その可能性は排除する。

「ヒカルはどうして酔ってないの？」

「……お、俺はすぐに気づいたから……」

「……ずるい」

「なにがだよ」

「——なんでかな……」

さらりと、あかりの柔らかい髪が鼻をくすぐる。とくん、と、心臓が飛び跳ねた。

もう、ヒカルには自分の心臓の音しか聞こえなかった。

「すごく——ヒカルに触れていたいの……」

気づけばあかりは、首をヒカルの手に絡み取られ、下に組み敷いていたヒカルと唇を重ねていた。そのことに気づくまでに、数秒かった。

ぼんやりと靄のかかった頭で、キスされている、そう思った。でも、うれしかった。だってヒカルに触れたかったから。もっと、ずっと、ヒカルに触れていたかったから。

どうしてだろう？

アルコールが入って、少し甘えん坊になっているのかもしれない。でも、ヒカルは受け止めていてくれるから。

あかりはほくほくと心があたたかくなって、きゅうつとヒカルにしがみついた。

いつのまにかあかりはヒカルに押し倒された形になっていた。

キスがとめどなくあふれて、苦しいけれど、気持ちよかった。でも近すぎて、近いのはうれしいけれど、ヒカルの顔があまり見れない。

それはさびしかった。ただでさえ、ぼんやりと輪郭がぼやけるのに……。

「くっ……」

瞼はぴったりと閉じられ、身体はぐったりとヒカルにもたれながら、あかりは可愛らしい寝顔をヒカルの目の前にさらしていた。

（……あのな……）

あれだけ煽っておいてこれなのか……。

自覚がないのも罪だ。まったく……。ヒカルはひょいっとあかりを抱くと、ソファに寝かせた。離れようとするとがっかりとヒカルの服の裾を掴むので、しょうがないから膝にあかりの頭を乗せて、ヒカルは行き地獄を味わう羽目になったのだった。

——で、現在に至るわけである。詳細を思い出してみても、ヒカルのなんと不幸なことだろう。

たががはずれたのは断じてヒカルのせいではない。それに罪はもう十分に受けている気がする。ヒカルはあかりがすすう気持ちよく寝ているにも関わらず、その寝顔が気になって眠れないのだから、もう深夜と言ってもいい時間だというのに……。

（もしかして俺……あかりが起きるまでこのままかよ……）

いつそ寝込みを襲うか。

不穏な考えが一瞬頭をよぎるものの、すぐに却下される。今までの行動をかんがみたところ、あかりは別に嫌がってはいない。驚いてはいるものの、拒絶はしていなかった。

あとは恥ずかしさもあるが——まあ、恥ずかしがっているあかりはかわいいから、いいのだけれど。

そもそもヒカルだって十分に恥ずかしいのだ。

けれど寝込みを襲うのは少々やりすぎな気がする。嫌われたら元も子もない。

いいのだ。ゆっくりで。いいのだ。ゆっくりで。——いいのだ。いや、できるならなるべく早くがいいが。

昔とまるで変わらない、あどけない寝顔を見ていたら、その気も失せる。ふわっとその頬に手を寄せると、あかりは気持ちよさそうにその手に頬をすりよせてきた。

まるで猫のようである。

静かな夜。カチカチとただ、時計の音だけが響く。そして虫の声。テレビでもつけようかとも思ったが、あかりを無理に起こしたくはなかった。

そうこうしているうちに、ヒカルもうとうとと眠くなってくる。こんなふうに、二人きりで穏やかな時間は、そういえば久しぶりだった。なんだかんだとあかりはよく泣いたし、ヒカルには手合いがぎっしりつまっていたし——あかりが夜に電話してくるのも珍しい。

逢えなかったら逢えないで逢ったときに「寂しい」というくせに、「じゃあ言えばいいだろ」というと、「だって暮の邪魔はしたくないんだもん」と言うのだ。

家に帰ると、ヒカルの部屋の電気がついている。あかりの部屋の窓からも、その様子は伺えた。ずっと、ずっと、つきっぱなしの電気。

まだ打ってるんだ。まだ寝ないのかな？　ずっとずっと気になって、ようやく電気が消えるころには、夜はとつぷりと暮れていて。真剣な面持ちで碁盤に向かっていているヒカルを思い出して——すぐにまた、逢いたくなるけど。あかりは必死に自分をこらえた。だから、まあ……たまに逢えたときなどは、そんな気持ち之余計に膨らんで、不安になったりもしってしまうのだが。

ヒカルはそれであかりが泣くなら、逢いたいときに逢いたいと言って欲しいと思う。あかりに逢う時間くらいならいくらでもひねり

だせるのだ。

基本的には、部屋で一人閉じこもって碁を打っているだけなのだ……。もちろん、大切なことだけれど。あとは和谷家でのリーグ戦、手合い、指導碁、あとは塔矢の碁会所での対局——

けれど碁を打ち終わったとき、ふと帰り道、あかりに逢いたくなる。それは、逢いたいののはヒカルも同じで——けれど、ためらうのだ。なんとなく……。

ヒカルが逢いたいときに、あかりを束縛していいものだろうか、と。ただでさえ「学生」でないヒカルは、あかりに負担をかけているのに。

(……もしかして二人してこういうことを考えているから駄目なのか……？)

重くなる臉を必死にこらえながら、ヒカルはうとうとと考える。

そうか。あらためて考えてみたら、二人そろって「逢いたい」と思いながらも、受け皆部分が多かった。そうか。逢いたければ、逢いに行けばいいのだ。

そうしても、きっと二人の関係は壊れない。わがままだけれど、わがままじゃない。

(——なんだ……)

そして、ヒカルの意識は一気に眠りの国へと旅立った。

あかりが目を覚ましたとき、ヒカルはあかりにひざまくらをしたまま、こっくりこっくりと肩を揺らしていた。

ずきずきと頭が痛む。おぼろげな記憶の中で、お酒を飲んだのだ、と、思っていた。

おかしいなあ。ジュースだと思ったのに。

あかりは起き上がって、ぶるりと肩が震えた。そういえば、もう夜は冷える季節になったのだ。あかりはあわてて客間から毛布を持つてくると、ヒカルの肩にかけた。

ずいぶん気持ちよく眠ってしまった気がする。ヒカルがずっと膝枕をしてくれていたおかげだろうか。

（ピザも食べてないのに……）

届いたピザはもうひんやりとしている。おなかはずいいているけれど――

（まあ、いいか）

あかりは自然にこぼれる笑みを押さえ切れなかった。ヒカルは眠っていて、でも眠っているのはあかりの家のリビングのソファで。ヒカルが当たり前のようにあかりの家にいることが、少しくすぐつたくて、とてもうれしかった。

（こんな単純なことであわせになるなんて……やっぱりやさしいなあ）

ヒカルには、もうずっとこんなくやしい思いをしてばかりだ。気持ちが大きくなればなるほど、負けている気分になる。

ヒカルよりも、あかりのほうがずっとずっとヒカルを好きで。今の瞬間にも、その思いは大きくなるばかりで。

あかりはふと思い立って、もそもそとヒカルの毛布にもぐりこむ。ことん、とヒカルの肩に頭を乗せる。ぬくもりと熱が伝わって、

またほくほくと心があたたかくなった。胸がドキドキする。

——どこまで、大きくなるんだろう？

子供の頃より、気持ちを初めて自覚した頃より、昨日より、ずっとずっと。

君が好きだから。

祈る思いも、願いも、心も、夢も。

ただひとつ。

静かな静かな、二人だけの夜が過ぎる。

14 祈り人（後書き）

お酒を飲むときは、自分を失わない程度に飲みましょう。私は飲んで記憶トバしたことないんですけど、どういう感じなんでしょうね。足元ふらふらになっちゃったことはあったけど、それでも記憶ははっきりしてたなあ。あかりはお酒、ぜんぜんだめな体質、という設定です。カクテル一杯で酔います。逆にヒカルは強いです。まあ、ラブラブなのはいいことです。

15 ひとり、ひとつ。(前書き)

「旅行に行こう」——恋人同士になつてはじめてのクリスマス。
唐突なヒカルの提案に、あかりはぽかんとした。

15 ひとり、ひとつ。

十二月二三日。

ヒカルは唐突に宣言した。

「よし。旅行に行くぞ」

「……はい？」

あかりの口から、ぽろ、と食べかけのおせんべいがこぼれた。

そして次の日。十二月二四日。いわゆるクリスマスイブ。

あかりはヒカルとともに、とある温泉旅館のフロントに、旅行用の大きいバッグを持って立っていた。

え。なんで？

事態が飲み込めないまま、ヒカルはてきばきと手続を済ませていく。

あかりはぼけつとその様子を眺めていただけだった。なんとなく、うなずいて。わけもわからないまま、久美子にアリバイを頼んで。

——異様なテンションだったような気はするが、よく覚えてはいない。

頭がうまくついていなくて、でもヒカルにうながされて、「どうして？」と訊いたら、当たり前のように「イブだから」と返されて。「ああそうか」とぼうつとしている間に——

気がつけば旅館だった。そんな馬鹿な。

「あかり。部屋行くぞ」

「あ、う、うん」

ヒカルに至極あつさりとした物言いに、急に心臓がバクバクしてくる。

（あわわわわ……）

あかりは思わず顔を背けた。顔が真っ赤になっているのがわかった。なにせヒカルへの気持ちを意識し始めた頃から、顔が赤面することはよくあるのだ。この感覚には憶えがある。

いいかげん慣れてもいいはずなのに、なぜだろう。全然慣れない……。ヒカルの一挙一動に敏感に反応して、ときどきする。——今日は特に。

（うつ……ヒカルはなんだか余裕なのになあ……）

暮の仕事で遠出にも慣れているのだろうか、ヒカルは緊張することもなく、けろりとした表情だ。あかりは、友達とだって温泉旅行なんてしたことはない。

まだ学生だし、お金もないし、バイトもしていないし。そう告げたら、ヒカルはあつさりと言った。

『別にいいよ。俺が出すから』

『そ、そういうわけにはいかないでしょ！』

『なんで？ 心配しなくても、俺、金ならあるから』

『なにそれ。イヤミ？』

『ちがうって。地方に行くときはお金出るしさ。基本、家との往復だろ？ タバコも酒もパチンコもやらないから——未成年だし。』

金、ぜんぜん使わないんだよ」

『でも、だからって——それに、ふたりで宿泊なんてできるの?』

『うん。前に使ったことある旅館だから。話つけといた』

『でも、やっぱり』

『細かいなあ。あかりは』

『ヒカルがおおざっぱなの!』

『わかったわかった。じゃあ、あとでなにか埋め合わせしてもらうから。な?』

とまあこういった問答が繰り返されたのだが……結局、あかりが根負けしてしまったのだった。ヒカルには負けてばかりだ。やっぱりくやしい。

今だって、あかりはいっぱいっぱいで、余裕なんかないというのに……。

部屋は落ち着いた和室で、窓からは綺麗な景色が広がっている。冬で葉は散っていたが、その分広い広い白い空が広がっていた。

「あかり。風呂は?」

「え? お、お風呂?」

「そう。温泉」

ぼけっとその空の突き刺すほどの白さに見とれていたあかりは、後ろから声をかけられてびくつとふりむく。

「ここ、肌にいいんだってさ。美白? よく知らねえけど」

「そ、そっか。うん、楽しみだな。え、え、えーと、その……」

「うん」

あくまでも自然体のヒカルに、あかりはむうつと眉をひそめる。でも、「くやしい」という気持ちさえ見透かされてしまうのはくや

しくて――

「……後にする」

「そっか。じゃあ、俺は入ってくるな」

ふっと笑って、ヒカルは部屋を出て行った。やっぱり、全てを見透かしたようなくしゃっとした笑い顔で。

「……ご、暮馬鹿のくせに……」

あかりはへなへなとその場に座り込む。両頬に触れると、手がびっくりするくらいに冷たかった。――それは頬が、びっくりするくらいに熱かったということだ。

顔が真っ赤なのだから、ヒカルだってわかってしまうわけだ。あかりが緊張していることが。……緊張、ではない、と思う。厳密に言う。

否、緊張もしているのだが。それとは違う気持ちがあって――あかりだって、鈍いとは言えそこまで破滅的に鈍いわけではない。温泉で一泊。二人きり。というのはつまりそういうわけで……うわけでああいうわけで……。

（きゃああああああっ！）

一度だけ、そんな雰囲気になったときのことを思い出し、あかりはさらに顔が赤くなった。思い出すと身体に悪いから、できるだけ思い出さないようにしていたのに……。

でも、「いやだ」なんて思うどころか、ヒカルをもっともって求めている自分が存在して――

好きという気持ちがあふれて、自分だけじゃどうにもならないから。……というのはちょっと変かもしれないのだが。

ただずっと、ヒカルが好きで。——だから触れてたくて。ずっとずっと一緒にいたくて。離れたくなくて。……だから旅行の話を聞いたときも、びっくりはしたけれど、それでもやっぱりうれしくて。

顔がほてるのを止められなくて、それが恥ずかしくて、でも、自然と手を繋いでいて。

「……こんな調子で、二日ももつのかしら。私……」

ぺたりと、あかりは畳にねところがつた。畳の草の匂いがして、幾分か心を落ち着かせてくれた。

もっと、もっと、近くにいられるだろうか。もっともっと、ヒカルを近くに感じられるだろうか。——この旅行が終わったら。始まったばかりで、もう心臓発作で死にそうなのだが。

「ヒカルは今頃、お風呂でゆったりしてるんだろうな……。私も入ろうかしら。なんだか気に入らないし……」

それにしても、ヒカルはどうしてああも余裕があるのだろうか。やっぱりもう「社会人」だからだろうか。心構えとか、平常心とか、学生であるあかりよりもずっとずっと成長してしまったのだろうか。そんな、ちよつと男らしいところとか、昔には見られなかった冷静なところとかも、やはりカッコいいと思ってしまつて——

（……末期だわ……）

たまになら昔からあつた。大きな犬を追い払つてくれたとき、運動会、泥にはまつたあかりをおんぶして家まで帰つてくれたとき。けれど今は、本当に頻繁なのだ。時たま見せる穏やかな笑顔や、碁盤に向かう鋭い眼差しや、軽くキスをせがむ仕草や——おかげ

で、あかりには気が休まる暇がない。

おもむろにむっくりと起き上がって、そなえつけのポットと急須でお茶を入れる。

身体の芯にじんわりと熱いお茶がしみこんで、あかりはようやく一息をつくことができた。

「あかり」

「きゃあっ！」

「……なんだよ」

ふりむいて、あかりはまたどきんと胸が高鳴ってしまった。

しっとりとぬれた髪、青い旅館の浴衣が似合っていた。ヒカルの浴衣姿なんて、もう久しく見ていなかったから、不意打ちで静まりかけていた心がまた騒ぎ出す。

「は、早いね」

「俺、長風呂って苦手だもん」

「ああ……そういえば、そうだった」

直視できずに、あかりは目を泳がせる。どうしよう。ドキドキが止まらない。昔は一緒に浴衣を着て、よく夏祭りに行っていたものだ。今でも毎年行っているが、浴衣を着るのはあかりだけになってしまった。

何年かぶりに見たヒカルの浴衣姿は、なんだか色っぽくて、かっこよくて――

……だから心臓がもたないというのに。

「あかりも入ってくれば？ 気持ちよかったぜ」

「……うん。じゃあそうしようかな」

ふらふらとあかりが出て行くと、ヒカルはこらえきれずに「ぷつ」と吹き出した。

そして急須から茶を注いで、一息ついたのだった。

温泉は確かに気持ちよかった。しかしずっと考え事をしていたの
でなんだか頭がふらふらするあかりだった。

（情けない……）

二人並んで座っていると、豪華絢爛な料理が運ばれてきた。おい
しかったような気はするが、おぼろげにしか覚えていなかった。

あいかわらずけりとした様子でぱくおいしそうに料理を食
べるヒカルが腹立たしくて、思わず首を絞めたくなってしまう。

食事も終わって、こちこちと、ただ時計の音だけが響く。あかり
は話題を見つけられずに押し黙り、ヒカルもまたなにかをしゃべろ
うとはしなかった。

「——きゃあっ」

知らぬ間に距離をつめていたヒカルに、あかりはいつの間にか抱
きすくめられたいた。

「あかり……」

「え、え、え、えつとその——」

耳にかかる甘い吐息に、あかりは身体に力が入らなくなる。

「……お前、ガチガチだなあ」
「へ？」

するりとヒカルは腕を緩めて、また「ぷっ」と吹き出した。
あかりが真つ赤なのに対し、ヒカルは顔色一つ変えない。おたおたしているのもドキドキしているのもあかりだけだ。それが、とてもくやしい。

「……ヒカルって今日、意地悪だよ」

「そうか？」

「そうだよ」

「……あのさあ。そんなに気負わなくても大丈夫だぜ？」
「え？」

ふわりと笑うヒカルの穏やかな微笑みに、あかりはまたどきりと胸が高鳴った。

ヒカルはぽりぽりと頬をかく。

「俺、ただ、あかりと二人になりたかったただだから」

ほんと、ヒカルはあかりをあやすようにその頭に手をのせた。

「それだけだから——いや、まあ、いろいろと下心がないわけじゃないんだけど……。別になにもしないって。安心しろよ」

「……ヒカル」

「だから、ちゃんと楽しもうぜ？ 俺は楽しかったけどさ。面白いあかりが見れて」

面白いだと？

ぺいっとあかりが肩をたたいた。

「だってお前、ものすごくテンパって……」

ぺち。

ぺちぺちぺち。

「……あかり？ あ、えーと、面白いていうのは、その」

やっぱり腹が立つ。あかりはむうつと顔をしかめて、おもむろに後ろを向いた。

「あかり？」

あかりは無言で押入れのふすまを開け、布団を敷き始める。ぺしぺしとシーツを広げ、毛布をばつさりとかぶせた。

「……あかり？」

ヒカルは呆気にとられる。無言で黙々と布団の準備をし続けるあかりに、ヒカルはついていけなかった。

「あかり……えっと」

「座って」

「え？」

「座って。ここに」

布団を敷き終えて、あかりはくりとヒカルのほうに向きなおった。

ヒカルは言われるまま、あかりの真正面に腰をおろした。

……？

……???

静かな静かな、湖のように透き通った瞳に見つめられ、ヒカルは射抜かれる。

「——キスして」

「へっ」

「駄目なの？」

あかりがむうつと眉をひそめると、ヒカルはあわてて首を横に振る。

あかりはにっこりと微笑む。

「よかった」

ヒカルはゆつくりと手をあかりの頬にすべらせる。閉じられた瞼に、ヒカルは優しく口付けた。

そして額に。頬に。——唇に。

触れるだけのキスを交わした後、ヒカルはその手を離す。するとあかりは不満げにヒカルの浴衣の裾をひっぱった。

「もっと」

「……ももっとって……お前な……」

あう、とヒカルは天井を仰ぐ。

ヒカルは確かに「一緒にいたいだけ」と言った。

言っただけだったが、それはこういう状況など想定してはいなかった上での発言だ。こんな悪魔のような行動に惑わされない自信は、はつきり言っていない。

あかりがきゅっとヒカルを抱きしめると、ふにふにとしたやわらかい感触がヒカルを包み込む。衝動的に背中に回された腕をぐつと

押しとどめて、ヒカルは深呼吸をした。
待て。暴走するな俺。

「……あかり。離れて」

「いや」

「いやじゃなくて——」

「ヒカル、わかってない」

「は？」

怒ったような、呆れたような、でもやっぱり怒っているような声。
ヒカルはきょとんと首をひねる。何の話だろう。いきなり。

「ぜんぜんわかってない。ばか」

「……は？」

「どうして、そうばかなの？　ちよつとは成長したと思ってたのに、昔っから、そういうところはちつとも変わってないじゃない。人の話訊かないで、自分の中で完結しちゃってさ。ばか」

「……そこまで言うか？」

「いやじゃない」

「——へ？」

「いやだったら、そもそも、こんなところまで——来ない」

胸にうずもれていたあかりが、ひょっこりと顔を出す。恥ずかしそうに顔を赤らめて、笑う。

「うれしいんだよ。ヒカルと一緒に」

花のように。甘い甘い香りを放ちながら。ヒカルを惑わす。

「ヒカルに触ってるの、大好きなんだよ。だから、恥ずかしいとか、

真っ赤になっちゃうとか——そういうのはあるけど……。でも、それくらい大目に見てよね」

まだ少し湿り気の帯びたあかりの髪を、さらりと撫でる。
その手にもたれて、あかりはうっとり微笑んだ。

「……今日は、『またね』って言わなくてもいいんだね」
「え？」

「ヒカルに逢つてると、『さよなら』を言いたくなくなるから……。今日は、すごくうれしいなあ……」

ヒカルは少し驚いた。——ヒカルも、いきなりあかりを旅行に誘ったのは、一日くらい、あかりに「さよなら」を言わなくてもいい一日が欲しかったからだ。

そんなことを言うあかりが可愛くて、愛しくて、……止まらなくなる。

頬に触れると、きゅっとヒカルの服の裾をあかりが握りしめる。
そうして二人はキスをした。

——始まりのキスを。

倒れこみながらもキスを求め合う中、そういえば今日はクリスマス・イブだったのだと、頭の片隅でヒカルは思い出した。

「——あ。忘れてた」

朝、荷物をまとめていると、ヒカルは鞆から細長い箱を取り出した。可愛いリボンでラッピングされている。

ヒカルは無造作にそれをあかりに差し出した。

「ん。やる」

「……なあに？」

「クリスマスプレゼント。忘れてた」

「あ、私も……。ちよつと待って」

あかりもあわててバッグからプレゼントの入った袋を取り出す。昨日の夜に渡そうと思っていたのだが——まあ……その……。同じことを思い出したのか、二人は同時に真っ赤になった。

「……どうぞ」

「……どうも。これもどうぞ」

「……どうも」

お互いにプレゼントを受け取って、無言になる。どちらからともなく、ごそごそとラッピングを取り始めた。

ヒカルからあかりへのプレゼントは、まるで赤い林檎のついたネックレス。ころんと手に乗った林檎は光に反射してキラキラ輝いている。

あかりからヒカルへのプレゼントはマフラー。淡いクリーム色のシンプルなマフラーだったが、さわり心地は抜群によかった。

「ありがとう」

あかりが笑うと、ヒカルも笑った。

——いつもどおりの二人になる。なにも変わらない。世界も、二人も。

「俺も、ありがとう」

「うん」

ヒカルはあかりの手からペンダントを取ると、あかりの首につけてやる。「えへへ」とあかりが頬を染めて笑うと、ヒカルはまた愛しさがこみ上げてくる。

「ええと……。また、来る？」

「うん」

「じゃあ、来るか」

「うん」

なんの迷いもなくうなずくあかりの手を、ヒカルは握りしめた。まだうまく、目を合わせる事はできなくて。でも、しばらくしたら、またいつもの二人に戻るだろう。――変わったものなど、なにもないのだ。

変わっていくものはあるけれど、それはあたりまえのように毎日の出来事にあることで。変わることが「特別」なことじゃない。

ヒカルはマフラーを首にまいて、歩き出す。

空気は冷たかったけれど、日差しはやわらかく、あたたかかった。繋いだ手からはぬくもり。

光も、空気も、世界も。まるで全てが生まれ変わったような気がするけれど。

――変わらない。ヒカルとあかりも、二人を繋ぐものも。

「……でも、やっぱりなんか恥ずかしいよね……」

「……お前、それはしょうがないだろ……」

「でも、また来ようね。でもそうだなあ。今度は北海道とか、京都とか」

「お、いいな。ラーメン食いたい」

「……ヒカルって、ラーメンからどうして離れられないの？ ロマンチックじゃないなあ」

「お前、そういうのを俺に期待しても無駄だからな。言っておくけど」

「いまさら期待なんかしてないよ」

「……それもム力つく」

大丈夫、ラーメン好きだから、とあかりが言つと、ヒカルは子供のように笑った。

15 ひとり、ひとつ。(後書き)

暗転。いい言葉です。高校生の分際で旅行とは……ヒカルはでも、もう社会人ですからかまわないんですね。いやーしかし、ヒカルはいまいち決まりませんね。あかりはかわいいです。原作、続きとか、ほんとないかな……。

16 神さまのいない場所（前書き）

一月一日。お正月。初詣。せっかく振袖を着たのに、ヒカルはなにも言ってくれなくて。しかも人ごみの中はぐれてしまった。出逢ったのは――。

16 神さまのいない場所

「あ」

「……あ」

目の前には下駄の緒が切れた振袖姿の帳美羽。

——ええと？

ヒカルは思わず、目を瞬いてしまった。

一月一日。お正月。

今日はあかりと近くの神社に初詣——だったのだが、途中で人ごみにはぐれてしまった。だから探していたのだが——代わりに別の人物に遭遇してしまうとは。

なんたる偶然。いやすぎる。

「……ちょっと。いやなやつに逢ったなあ、って顔、やめてくれる？」

「……そんなことはないけど」

しまった。顔に出ていた。

「肩」

「は？」

「肩、貸してくれる？ そのベンチまで」

「……はあ」

断る理由もないので——あまり精力的ではないが——ヒカルは美羽に左肩を貸した。

よろよると、美羽はベンチに腰かける。

「一人なのか？」

「御影と一緒に。でも、はぐれちゃって」

「……ふうん」

「あいかわらず、仲が悪いのね」

ヒカルの心の中を正確に読んだようで、美羽はにやりと笑った。
う、とヒカルは言葉につまる。仕方がないではないか。「進藤御影はヒカルの中でもう「いやな奴」にカテゴリされてしまっているのだから。

これはもうしょうがないのだ。「あかりを好き」という時点で、御影がどんなに品行方正な好青年だとしても関係がないのだ。実際、腹黒でいやみなやつだし。

「今日は、あかりと初詣？」

「……まあ、そうだけど」

「仲がいいのね。こちらのほうは」

ヒカルはあえてノーコメントを選択した。どうも、美羽といるとペースをくずされてしまう気がする。

「別に黙ってたってわかつちゃうわよ。あかりは結構わかりやすいから」

「……なんのことだよ」

「別にー。ただ、最近あかり、前にもまして艶っぽくなったとか色気が増したというか……おかげで男子からわんさか告白されているよ」

「わんさか？」

ヒカルは顔色を変える。そんなことは聞いてない。……まあ、あえて言うことでもないが。断っているわけだし。……だよな？
美羽は「面白くてたまらない」といった顔で微笑む。

「大丈夫よ。断ってるから。軒並み全部。一刀両断。『つきあっている人がいるから』」
「……あそう」

ヒカルはほつと胸をなでおろす。あかりを信じていないわけではないが、いやもちろん、信じてはいる。——きつと今、あかりだけが、ヒカルを心から信じている。あかりだけが、ヒカルの全てを受け入れてくれる。きつと他の誰にも、ヒカルは心の全てをさらけ出せない。

それでも、不安はきつと消えない。あかりを好きでいる限り——
——消えないのだ。
それは、しかたがない。表裏一体の感情なのだから。

「でも今頃、御影と逢ってるかもしれないわね」
「え？」
「あら。ありえない話じゃないんじゃない？ 現に私もあなたと逢ってるんだもの」

……それはそうだ。だが、そんな偶然があつてたまるか。
薄く口の端を上げた御影の笑顔がぼんつと脳裏に浮かんで、ヒカルはいてもたってもいられなくなった。

「別にいいわよ。探しに行っても」
「え？」
「そわそわしてるわよ。どうぞ？」
「……でも、一人で大丈夫か？」

「大丈夫よ。御影が見つけてくれるもの」

昔から、御影は美羽を見つけるのは得意なのだ。どうしても知らないが、いつのまにかひょっこりとそばにいる。

こうしてはぐれてしまったときなどは便利だ。

ヒカルは素直にうなずいた。少々気が引けるが、今はもう頭はあかりのことでいっぱいだった。

「じゃあええつと——じゃあな！」

あつというまに人ごみにまぎれてしまった美羽はひらひらと手をふった。「またね」も変な話だ。もう、逢うこともないだろう——と思うのだが。

「あいかわらず、からかいがいがあるなあ。二人そろって」

美羽は不敵に微笑むと、大人しく御影を待つことにしたのだった。

「すごい人だね」

「……そうだね」

ヒカルの危惧したとおり——というか美羽の予想したとおり——あかりは御影と一緒にであった。とりあえず人ごみからぬけて、様子を見る。

「美羽はどこかなあ……。美羽はよく迷子になるんだよな。好奇心が強いから。そのくせ、ぜんぜん悪びれない」

「悪びれないの？」

「『私の行動をしつかり把握できない御影が悪いのよ』」
「……美羽なら言いそう」

探すほうの身にもなつてほしいよ。
御影は心からためいきをつく。

「進藤君は、美羽と一緒にだったんだ」
「うん。毎年の恒例行事なんだ。家、隣同士だしね」
「そう……」

進藤君と美羽か……。
幼なじみだし、仲もいいし、やっぱりどうしても、自分とヒカルを重ねてしまうあたりだった。でもお互いその気はないといっていたし……。

（よ、余計なことは言わないようにしよう。うん）

御影は心を見透かすのが本当に得意だから。幼なじみそろって、いやな特技である。

それよりもヒカルを探さないと――

「藤崎さん、振袖可愛いね」
「えっ。そ……そうかな」
「うん。似合ってるよ」
「あ、ありがとう」

面と向かってほめられるのは慣れていないので、あかりはてれつと頬を染めた。

ヒカルはなにも言ってくれなかったし。せっかくがんばって着付

けをしたのに。

まあ、浴衣と同じで振袖も毎年のことだから、仕方ないのかもしれないが……。

つきあう前も、毎年ヒカルとは一緒に初詣に行っていたのだ。それは幼なじみなのだからしょうがなく、それがうれしくないわけではなく、だから初詣がいまさら特別なイベントになるかというところというわけではなく――

今日のヒカルの第一声は、「毎年毎年、動きにくくないか？ 着物って」だった。

「可愛い」とか「綺麗」とか言ってくれてもいいのに。

ヒカルがそういうことを言わない性格だということは知っていたが、それでもやっぱり哀しくなってしまう。

「じゃあ、僕はそろそろ、本格的に美羽の搜索を始めようかな」

「え？」

「お迎えも来たみたいだしね」

御影が指差す方向に目を向けると、ヒカルがぜえはあと荒く肩で息をしていた。

「……ヒカル」

「……み、見つけた……」

ヒカルは苛立つ気持ちを懸命にこらえる。よりにもよって、予想通りに懸念どおりに御影と一緒にでなくてもいいではないか。

「また新学期に、学校で」

「あ、うん。進藤君、ありがとう」

御影はヒカルが来るまで、あかりの相手をしてくれていたのだ。

御影も美羽を探さねばならないのに。その心遣いがうれしくて、同時に少しだけ胸が痛んだ。

本当は気づいている。御影が隠そうとしないから——気づいてしまう思いがある。でも、あかりは絶対、応える事はできないから。御影がいなくなってから、あかりはちらりとヒカルを見た。予想通り——不機嫌そうに眉をしかめている。

(う……)

ヒカルが御影と相性が悪いのは知っているつもりだが——いや、あかりとて決断していいわけではないが——怒っているヒカルは、苦手だ。

一緒になってあかりも怒っているときはいいのだが、そうでないときはその迫力に気おされてしまう。

「あの、ヒカル——」

「いい。なにも言わなくて」

「え？」

あかりの言葉を遮って、ヒカルはすうと息を吐く。ようやく呼吸が整ったようだ。汗でびっしょりだ。——一生懸命探してくれたのだ。その事実、あかりは胸が熱くなる。

「わかってるから。ええと——帳だっけ。あいつも、そいつとはくれたんだろ」

「……なんでわかるの？」

「逢ったから。帳に」

「そう。あ、じゃあ、教えてあげればよかった……」

「帳を見つけるのは得意分野らしいから、大丈夫だろ」

「そうなの？」

「知らない」

なんだそれは。

あかりは首をかしげる。でもまあ、いい。ちゃんと逢えてよかった。

「ほら。そろそろ帰るぞ」

「うん」

それがあたりまえのように、ヒカルは手を差し出す。そしてあたりまえのように、あかりはその手を取った。

手を繋ぐことに、もう躊躇や戸惑いはない。でも、あいかわらず、あかりの胸は熱を覚える。それがうれしかった。

どれだけ時間が経っても、あかりはヒカルにドキドキしたい。この気持ちを、失くしたくない。全部、全部、あかりの大切なものだから。

(……ヒカルもそう思ってくれてるのかなあ)

あまりドキドキはして——いなさそうだ。ヒカルの横顔は、まだ少し不機嫌そうだった。別にあかりに怒っているわけではないよ。うだが。

(ちえ)

ここに、あかりがいるのだから。あかりが一緒なのだから。ちゃんとあかりを見て、笑って欲しい。——一緒にいられる時間は、昔と違って本当に少なくなってしまったから。

ヒカルには暮がある。そして、ヒカルはどんどん強くなる。それは、あかりといられる時間が減るということだ。それは寂しい。と

ても寂しい。

だからといって、ヒカルに暮をやめて欲しいわけではもちろんなくて。ずっと見ていたくて。——矛盾する気持ちは、一生消えないのだろう。ヒカルを好きでいる限り。

「……あのさ、あかり」

「え？」

人ごみをぬけて、ようやく二人並んでゆつくりと歩けるようになった頃。ヒカルはポツリと呟いた。

「ごめんな。心狭くて」

「……狭い？」

ヒカルが？

——まあ、確かに広くはない気はするが。

「駄目なんだよなあ。俺。——本当に駄目なんだ」

「……ヒカル？」

「——あかりが欲しくなる」

心を、繋がれた幸福を、知ってしまったから。

知る前よりずっと、心は貪欲になっていく。

あかりが自分以外の男と、たわいない話をしている。——それだけで苛立ちを隠さずにいられなくなる。いつからこんなに弱くなったんだろう。いつから、こんなふうに、あかりを縛りたいなんて思うようになったんだろう。

深く深く、侵食は止まらない。

「……ごめん」

呆氣にとられてばかんとしているあかりに、ヒカルはふいつと顔を背けてばやいた。

「変な意味じゃなくて、その——いろいろさ。この頃、本当にいやになる。……独占欲が強くて」

「……ヒカルって……ばかね。本当に」

「……悪かったな」

ふりむくと、あかりは穏やかな表情で微笑んでいた。本当に——ヒカルはばかだ。

ヒカルはその笑顔から眼がそらせなくなる。——いつから、あかりはこんな顔をするようになっただろうか。透き通った、ただどこまでも美しく——なにもかもを、ヒカルの何もかもを、受け止めてくれる笑顔。

「じゃあ、ええと、そうだな……」

あかりは「ふむ」と考えこむ。

そうだなあ——どうしようか。本当はもう、答えは決まっているけれど。

「あ」と、あかりはうれしそうにほくそえむ。

「ねえヒカル。この着物、かわいい？」

「……え？」

「似合ってる？　かわいい？」

「……なんでいきなり」

ヒカルは少々顔を赤らめつつ、まゆをひそめる。——そんなの、いまさら、言いたくない。あかりが可愛いことなんて、着物なんか

着なくても、ずっと可愛いことなんて、ずいぶん前から気づいてる。

——でも、なんだか言いたくなかった。

これは意地だろうか？——ただ、認めたくないだけかもしれないけど。そう、認めたくないのだ。あかりが綺麗だなんて。

あかりは「むう」と顔をしかめる。

「たまには、褒めてくれてもいいじゃない。いつもいつも、なんにも言ってくれないんだから」

着物も浴衣も、いつも、どうしてあかりが自分を着飾るのか、ヒカルはわかっているのだろうか？

「ヒカル。私がほしいんじゃないの？」

「は？」

怒った顔でヒカルを見上げて、あかりは言う。ヒカルはどきまぎと視線を泳がせる。

まっすぐなまっすぐな、あかりの瞳。——でも、言っている意味が理解できない。

「ヒカルがかわいって言うてくれたら、私、ヒカルのものになる」

「なっ……」

「いないならいい」

ぱっと手を離して、すたすたと先に歩いていってしまうあかりを、我に返ったヒカルは懸命に追いつがった。まだ頭は追いついていないけれど、必死に。

あかりの腕を掴むと、あかりはくるりとふりむいた。

「……いる」

真っ赤な顔でぶすつと言うヒカルに、あかりは笑った。

にっこりににっこに。

『人がいるところでは言いたくない』

と断固としてヒカルが言うので——別にだれも聞いていないと思うが——二人はヒカルの部屋にいた。あかりは着物のまま、ちょこんと正座をし、ヒカルはその正面であぐらをかいてほほを染めたままうつむいていた。

(……恥ずかしすぎる)

ヒカルは必死に自分の中の羞恥心と戦っていた。ちろりとあかりを盗み見ると、にっこにこと笑っている。……そんなにうれしいものなんだろうか。

うれしい——のだろう。わざわざ催促してくるということは。あかりがうれしいと思うなら、言ってもいい……と思う。本当は、あんまり言いたくないけれど。あかりが可愛いなんて——あかりを可愛いと思うなんて。自分だけで、ありたいから。その事実さえ、ヒカルの中にだけ、閉じ込めておきたいから。

よし、と決意を胸に、ヒカルはあかりに向きなおる。

じいつと真剣な顔で見つめれば、あかりはかあつと頬を赤らめた。

(あ、恥ずかしがってる)

そうとわかればヒカルのものだ。主導権を握れたことに安堵しながら、ヒカルはじりじりとあかりに近寄った。あかりはびくつと体をこわばらせると、じりじりと後ずさる。

少し考えれば、後ろには壁しかないことに気づくはずなのに。案の定、あかりは簡単に壁際に追い詰められてしまった。

「……なんで逃げるかな」

「だ……だってその……や、やっぱり……あらためてって言うのは……」

「……恥ずかしいのは俺だと思っけどなあ」

横にも逃げられないように、あかりをはさんで両手を壁についた。顔を近づけると、「ひえええ」とあかりは目をぎゅっとつぶる。

（面白いなあ）

そして——その全てが愛しくてたまらない。あかりは、どこまでわかってるんだろう？

ヒカルのものになる。どんなつもりで言ったんだろう。でも、どうでもよかった。

その言葉だけが、甘く甘くヒカルを支配した。

「——あかり」

耳元に唇を寄せ、ささやく。全てを奪うように。全てが——ヒカルのものになるように。

……でも、やっぱり恥ずかしい。

「……かわいい」

「……卑怯者……」

ぎゅうつと栗のようにちぢこまって、あかりはばやいた。――
反則だ。こんなやり方で来るなんて。

ヒカルはふに落ちない。言えと言ったのは誰だ。少々むっとしながらも、ヒカルは耳元に唇を近づけたままたずねた。

「で、あかりは俺のものになるの？」

「……」

あかりはおずおずと顔を上げる。真っ赤な顔で、最初はむうつと眉をしかめて、目をそらして、ちよつとまたうつむいて、そしてまたおずおずと顔を上げて、恥ずかしそうに、でもはにかんだように少し微笑んで。

「――うん」

ことん、と、ヒカルの頭が、あかりの肩に落ちてきた。そつと、あかりはヒカルの背に手をそえた。顔は熱くて、言葉の余韻が、まだあかりを満たしていて。

誰よりも、誰よりも。ヒカルの言葉が、一番あかりの心に響く。ヒカルはあかりを抱きしめる。その全てがヒカルのものだと、まるで主張するように――自分のものだと、安心するように。

ただ、お互いを抱きとめたまま。

ただ、お互いを感じたまま。

――お互いしか、そこにはいないかのように。

まるで神さえ、存在することはできないかのように。

ただ二人は、二人を信じて、二人だけの場所にいた。

「あかりに逢ったの？」

「うん。振袖着て、可愛かったよ」

美羽は面白くなさそうにぼやく御影に、「やれやれ」とためいきをついた。

「まだ諦めてないのねえ」

「……美羽にはわからないよ」

「わっかりたくもないわよ。そんなもん」

この人でなしめ……。

御影は泣きなくなつた。

「御影つて一途だったのね。知らなかったわ」

「僕も知らなかったよ」

あんまり、人に執着したことがなかったから。

「まあ一途っていうより粘着質？ ストーカー体質よね」

「……」

「でもまあ、いいんじゃない。好きなだけ好きでいたら」

「……いきなりやさしいね」

あら、と美羽は言い切る。

「だって、あんたみたいに無駄に複雑な男、あかりを諦めてもすぐに次にいけるとは思えないもの。不健康じゃない。逆に。まあ虚しいけど、御影がそれで納得してるなら、私は横で面白がって見てあげるわよ」

「……美羽って人でなしだよね」

「あら。私ほど心優しい幼なじみはいないわよ」

「……どこが優しいんだよ」

「じゃあ、あかりが幼なじみのほうがよかった？」

「……うーん。美羽でいいけど」

大して考えることもなく、御影の中ではあっさりと結論が出た。
美羽はくすりと笑う。

「そうね。私もよ」

16 神さまのいない場所（後書き）

時期ではないですが、初詣ネタ。ヒカルとあかりは、立場がころころ逆転します。それでバランスとってるのかなあと思います。

17 きみのもの（前書き）

雨が降っていた。妙な胸騒ぎがした。いつもは杞憂に終わる胸騒ぎ。なのにどうして、ヒカルを思い出すんだろう？

17 きみのもの

本当に、ヒカルには泣かされてばかりだ。

いつか身体中の水分が、枯れてしまうんじゃないかと思うほど。思うだけで、涙なんか簡単に止まらなくなる。

白い天井。

薬のにおい。

——うまく、身体が動かない……。

手を伸ばしたいのに。

ぼろぼろと、大粒の涙を、あとからあとから流すあかりに触れたくて。ビー玉みたいにすきとおった眼が綺麗で、でも、泣いているから——

あかりはぴくりとも動かずに、ヒカルをただ見つめている。

——ごめんな。

そう、ヒカルは言いたかったのに。声が出なくて、ただ、祈ることしかできなかった。

胸がつまる。あかり——泣かないで。

あかりが泣くと、どうしたらいいか、わからなくなるんだ……。

(あ、雨……)

窓の外では、静かに雨が降っていた。あかりは教室から、灰色の雲を見上げた。

雨は、嫌いじゃない。けれど今日の雨は、なんだか胸騒ぎがした。たまにそんなときがある。ただの杞憂だ。いつも、杞憂で終わるけど。たまらなく心細くなつて。雨の音で、心をかき乱される。

あかりは目を閉じる。心がざわつくのを、必死で押さえた。

雨が降る。――雫が、波紋が。広がって。

心が、雨に濡れていく。

『――あかり』

そういえば、昨夜はヒカルに逢いに行った。今はリーグ戦が始まって、ヒカルはとても忙しくなつて、あかりも逢うのを控えていた。さすがに一筋縄ではないかない相手ばかりらしく、ヒカルの眼も、いつもとは違って見えた。緊張よりも、気負いよりも、ただただ、神経の全てを暮に集中させて――あかりなど、もう眼には入っていないくらいに。

『ねえヒカル。私、邪魔？』

『なんで』

『……リーグ戦が終わるまで、逢わないほうがいい？ 暮に集中したい？』

『だからなんで？』

『……だからあ、邪魔じゃないかなあって』

ヒカルは眼を瞬かせると、ぺちつとあかりの額を軽く叩いた。

『来いよ。来たいときに』

あっさりと放たれた言葉。受け止めるのに、数秒かった。

『——俺も、たまにあかりに逢って、下手な指導碁打って、気を抜きたいし。勉強したいときは、そう言うからさ』

『……ひっかかる言い方だなあ』

それでもうれしくて、逢えないのは寂しいから、うれしくて、あかりは笑った。

それを見て、ヒカルは勝ち誇ったように言う。

『寂しいんだろ？』

『……う。そ、そんなことは……』

するりとヒカルの手が伸びてきて、あかりの頬に触れる。まるでそれが合図とでも言うように、ヒカルはキスする前には、必ずあかりの頬に触れるのだ。

ひきよせられ、軽くキスを交わす。ヒカルはいつも突然だから、あかりは目を閉じる暇もない。

余裕の表情で、ヒカルは手を離れた。

『というわけだから、変な遠慮なんかするなよ』

『……卑怯者』

『知らなかったっけ』

『……卑怯者』

そんな会話の後、ヒカルは勝ったり負けたり、でも、がんばっていた。だから「来てもいい」と言われたけれど、なんとなく自粛してしまっていた。でも、昨日はどうしても逢いたくなって、逢いに行ったのだ。

『……ヒカル？』
『遅い』

少しまゆをひそめて、ヒカルはあかりを小突く。顔色が、少し翳っているように見えた。

『……ヒカル、大丈夫？』
『なにが？』

『……具合悪そう』
『大丈夫だよ。ちよつと、疲れてるだけ』
『……ちよつと？』

あかりにじつと見つめられて、ヒカルは薄く微笑んだ。ぽんぽんと、今では頭一つ分あかりより高くなったヒカルは、目線の下にいるあかりの頭を軽くたたく。

『大丈夫。心配？』

こつくり。あかりは素直にうなづく。その素直さが、ヒカルは愛しかった。

ベッドに座ると、あかりを手招きする。自分の膝の上に。

『……なに？』
『こつ。座つて』
『……なんで？』
『うーん。充電かな』

ヒカルに見つめられると、逆らえなくなる。あかりはためらいつつも、ちょこん、と差し出された場所に座った。ヒカルは満足そうに微笑むと、後ろから軽くあかりを抱きしめた。あかりはただ、そ

のぬくもりを受けられるだけだ。
耳元で、ヒカルの声が聞こえる。

『なんで、逢いにこないんだよ。来てもいいって言ったのに』
『……邪魔したくないから』
『邪魔じゃないって言っただろ』
『そうだけど』

でもやっぱり、なんとなく。
というか、そんなこと言うなら、ヒカルが逢いにきてくれればいいのに。

『……久しぶりだなあ。あかりに触るの』
『……ヒカル、少しいやらしい』
『そうかな……』

くたりと、ヒカルの体重を背中に感じる。心地のいい重みにあかりはきゅゅと回された腕を握りしめた。

『……疲れてる?』
『うん……。少し』
『……無茶しないでね』
『——無茶じゃないよ。楽しいんだ。すごく』

強い強い力と、真っ向から向き合うことが。鋭い一手に、鋭い一手を返していく。

力と力がぶつかって、高みへ。遥かなる高みへ。——神の一手に。

この一手が繋がっていると思うと、胸がときどきする。やめられない。止まらない。

もつと、もつとと、心が求める――

『……碁馬鹿』

『呆れる？』

『いまさら……』

『――いいな』

ヒカルは、抱きしめる腕に力をこめた。

『あかりって、俺のものなんだっけ？』

『……聞くかなあ。そういうことを』

『……聞きたい』

何度も何度も、何度でも、聞きたい言葉だから。

あかりの柔らかい髪。頬。瞳。唇。細い腕。心も、身体も、全部、それはヒカルのものだというのなら。

『私、ものじゃないんだけど』

『知ってるよ』

ほかのなにも、あかりの代わりにはならない。そんなこと――
ずいぶん前から気づいている。

あかりは目を閉じる。答える代わりに、ヒカルにもたれかかった。
何度も何度も、確認なんかしなくても。――あのとときヒカルが、
「可愛い」と言ってくれなくても。

とつくに、あかりはヒカルのものなのだ。その、全てが。ヒカル
のものになりたいと、ずっとずっと願っていた。離れないように。
繋がったままでいられるように。

これから先も。

――雨は激しくなることも、やむこともなく、ただ静かに、窓

をぬらしていた。音はさらさらと、耳に心地よく響いて。それが逆に、あかりにはいやだった。

昨日ヒカルに逢えて、声を聞いて、触れることができて。とてもとてもしあわせだったのに、どうしてこんな気持ちになるんだろう。

『……ヒカルのだよ』

『うん』

口にするのは恥ずかしくて。でもとてもうれしかった。

『明日は対局？』

『うん』

『強い？』

『弱い人なんかいないよ』

『がんばってね。……言わなくてもがんばると思っけど』

『——うん。がんばる』

穏やかに微笑んだヒカルが、脳裏に焼きついて離れなかった。

「ただいま」

「あ、あかり。おかえりなさい」

家に帰ると、母がぱたと駆けてきた。なんだかとても焦った様子に、あかりはざわりと心臓に鳥肌が立った。

……なに？

「あかり、病院に行つてきなさい」

「病院？」

「ヒカルくんが倒れたんですって」

「——え？」

母に教えてもらった病院は、昔からあかりがよく行っているなじみの病院で。

あかりは傘を握りしめると、鞆を放り投げて家を飛び出していた。

過労からくる貧血だって

ヒカルくんのお母さんも心配してて——

でも、大丈夫みたいだから

あかり、聞いているの？

あかり——

母の声の余韻が耳に残って。

でも、そんなことはどうでもよくて——

傘を握りしめたまま、さすことも忘れて、ただただ握りしめて。

——必死に何かをこらえるかのように。その支えのように、ただ、傘を握りしめて、走った。

病院のロビーに着いたとき、あかりはびしょぬれだった。

ぼたぼたと、髪から、服から、雨の雫がしたたりおちる。その音で、和谷はあかりが来ていることに気づいた。続いて伊角、本田が気づく。

病院の廊下は少しだけ騒がしくて、でも静かだった。

けれどあかりがヒカルのなんであるかを知っているのは、和谷だけだった。傘を持っているのにびしょぬれで、でもその姿がどこまでも美しくて。三人は一瞬見とれてしまった自分を、否定できることはできなかった。

こつん、と、あかりがおぼつかない足取りで近づいてくると、三人ははっと我に返る。

「あの——ヒカルは？」

その言葉で、伊角と本田は彼女がヒカルの知り合いであることに気づいた。あかりはまっすぐに和谷を見つめる。あまりにも強い光にいぬかれて、和谷はどきんと胸が高鳴った。

幾度か、和谷はあかりを見かけたことがある。かなりの美少女だと思った。けれど、まさかこんな——

あかりは泣きそうな目で、和谷に追いつがった。

「ヒカル——ヒカルは、どこですか」

「……あ、えっと、病室は……二階の二〇三号室。貧血と、寝不足と、過労が重なっただけだって。ぐっすり眠ってたっぷり栄養を取ればすぐによくなるって。今、点滴打って……あの、君こそ、大丈夫？」

「……ありがとうございます」

いたわりの言葉などまるで耳に入ってなどいないように、あかりはヒカルのことを教えてくれたことにぺこりと頭を下げた。そしてそのまま、伊角と本田にも頭を下げると、そのまま階段を上ろうとし——見かねた看護婦がタオルを貸してくれ、そのことにまた虚ろに礼をして、あかりは三人の視界からあつというまにいなくなってしまった。

ぽかんとただ、あかりの美しさに魅入られて——我に返ったとき、三人はしみじみとヒカルをうらやましがったのだった。

薄暗い病室で、ヒカルはすやすやと寝息を立てていた。その姿に、

あかりはへなへなと張り詰めていた糸がゆるんでしまったように、「ほっ」と息をついた。

ベッドの脇においてあるパイプ椅子に腰かけると、キシ、と音がした。雨の雫は、まだあかりを濡らしていて。見かけた看護婦に貸してもらった白いタオルを頭からかぶると、音を立てることもなく、雫がタオルにしみこんでゆく。

機械的に落ちる点滴の音。——昨日、顔色が悪いことには気づいていた。

『疲れてる？』

『大丈夫』

そんなやりとりを、何度も何度もした。じいつと見つめると、ヒカルは微笑んでやさしいキスをくれた。——あかりは、どうすればよかったんだろう。

無理矢理眠らせればよかったんだろうか。栄養のあるものを食べさせればよかったんだろうか。それとも、病院に連れて行けばよかったんだろうか。

あどけない寝顔は昔と変わってなくて。でも、やっぱり大人っぽくなった。けれどそれが今は——とても怖い。まるでこのまま、眠ったまま、目を覚まさないのではないかと。そう思うのは、ここが病院だからだ。

人の生と死をつかさどる場所。喜びと哀しみ、ふれあいと容赦のない別れ。病院にいと、いつもより少し、「死」を身近に感じる心に「死」がすんと落ちてくる。

そんなことはない。ヒカルは死なない。ただ、眠っているだけだ。でもいつか——いつか本当に、ヒカルはあかりを置いていくのかもしれない。

こんなふうに、静かに、目を閉じて。あかりを見ないままで。考えたくもないのに、黒い闇は生まれ、あかりを包んでいく。目

をそらしたいのにそらせなくて、あかりの開かれた瞳からは、涙がこぼれた。

ぴくつと、ヒカルの指先がかすかに動き、あかりははっと口元を押さえた。

「ヒカル」と、名前を呼んでしまいそうになる。でも、なんだかいけないような気がした。ヒカルの眠りを邪魔したくない思いと、早く目覚めて欲しい思いが同時に生まれて、あかりはふるふると頭をふった。

——ヒカルの瞼が何度かゆれて、そしてゆっくりと開かれた。ヒカルに視界いっぱいにあかりが映る。涙がぼろぼろとこぼれて、ヒカルは必死に手を伸ばそうとするのに、身体が動いてくれなかった。

だから、声を出そうとする。

「——かり」

それにもかすれて、うまく名前を呼べない。どうしてだろう。ここはどこだろう。

ヒカルはぼんやりと考える。なんとなく予想はつく。ここは……病院だ。

「病院」という単語で、ヒカルは自分が対局のあと、倒れたということを思い出す。

ギリギリの勝負をして、勝利をもぎとって、うれしくて、そうしたら気がぬけて。まわりの声が遠ざかって——気づいたらここにいた。

そして、あかりが泣いている。

「……ヒカルは」

ぴくりとも動かなかったあかりが、ぼつりとヒカルの名前を呼ん

だ。涙は止まらずにとめどなくあふれ、柄でもなく、ヒカルはただ、その美しい光景を泣きたい気持ちで見つめていた。

心が弱くなる。好きになって、ヒカルを好きになって——こんなにももろくなる、心があるのだ。強くあるうと、強くなりたいと願うたびに。

「——ヒカルが私をヒカルのものにしたなら、ヒカルは、私をずっと、大事にしなきゃいけない……」

「……あかり」

「……こんなふうに私を泣かせるなんて、しちやいけないんだよ……」

「……ごめん」

「ちゃんとずっと——そばにいなきゃ駄目なんだから……」
「……うん」

あかりはヒカルの手を握りしめると、きゅっと自分の額に当てた。涙で手がぬれる。そのなまぬるい感触が、ヒカルを抱きしめる。

あかりがヒカルのものなら。

ヒカルはあかりのものだろうか。確約も約束もないけれど——
ヒカルはそうありたいと願った。

「……あのさ、あかり」

「……え？」

ようやく自由に動くようになった唇で、ヒカルは言葉を紡ぐ。

「……勝ったよ。今日」

「……碁馬鹿」

「知らなかった？」

「……知ってる」

あかりがようやく少し笑ったので、ヒカルはほっとする。まだ涙は止まっていなかったが。眼が覚めて、隣にあかりがいる。……それが、たとえこんな状態でもうれしく思った。ようやく、ヒカルはあかりがぬれていることに気づく。

「……あかり、ぬれてる」

「大丈夫」

「風邪ひいても知らないぞ」

「ヒカルが看病してくれればいいよ」

「……」

「返事は？」

「……はい」

抱きしめたかった。あかりを強く強く。身体が動かないことが、もどかしかった。

また眠くなる。瞼が重くなる。疲れが、完全にぬけきつてはいないのだろう。それでも眠りたくなかった。ずっとあかりを見ていたかった。抱きしめたいと思う。

なのに、身体は言うことを聞いてくれなくて――

「……眠っていいよ」

「……やだ」

子供のようにすねるヒカルに、あかりは笑った。よかった。もう大丈夫だ。

「起きるまでいるよ。しかたないから」

「……しかたないってなんだよ」

「ヒカル、子供みたい」

くすくすとあかりが笑う。ゆっくりと、軽く、やさしく、ヒカルの頬にキスをこぼした。

「……おやすみなさい。ヒカル」

まるで睡眠薬のように、甘く優しい声がヒカルを包んだ。そして重い瞼が閉じられた。

求めなくても、手を伸ばさなくても。

あかりはそこにいる。その心地よさが、安心感が、ヒカルを安らかな夢の世界へといざなった。

そうしてたつぷり眠って眼が覚めたとき、あかりは約束をたがえることなくヒカルのそばにいた。ただ、起きてはいなかった。

ベッドにもたれかかって、すうすうと眠っていた。ヒカルはこぼれる笑みを抑えることができなかった。

17 きみのもの（後書き）

ヒカルは体力馬鹿なイメージがあるんですが、根詰めすぎて倒れることもあるんじゃないかなーと。まわり見えなくて。心地よい疲労でしょうが、恋人にしてみたらたまったもんじゃありませんね。あかりはとにかく、美少女って設定を貫きます。実際かわいいし。

18 欠片（前書き）

久しぶりにデートをすることになったヒカルとあかり。しゃれっけの強い場所が苦手なヒカルのために、あかりが選んだデート先は…。

嵐は、いつでも唐突にやってくる。

「本当？」

「本当」

「本当に本当？」

「本当に本当」

「本当に本当に本当？」

「本当に本当に——って、あかり、しつこい」

何度も何度も念を押すあかりに、ヒカルはうんざりとして答えた。そんなに信用していないのか、と、少し腹が立つ。「暇ができたから遊びに行こう」と誘っただけで、どうしてここまで疑われなくてはならないのか。

ヒカルの言っていることがどうやら事実だと見て取ると、あかりは「えへへ」とうれしそうにはにかんだ。

その笑顔を見ると、ヒカルは「まあ、しょうがないか」と怒りを抑えた。あかりの「えへへ」には弱いのだ。泣き顔にも弱いが。

しばらく対局がたてこんでいて忙しかったのだが、最近になってそれもようやく落ち着いてきたのだ。倒れて心配もかけてしまったし、ここらへんで一つ株を上げておこう、とまあそういう邪なくらみなわけである。

「どこでもいいの？」

「どこでも」

「本当？」

「本当」

「本当に本当？」

「本当だっつつてんだろ。本気でしつこい！」

「ええー。だつてさあ」

あかりは「むう……」と腕を組む。行きたいところ——行きたいところはあるが……。

「ラブストーリーの映画」

「うっ」

「ショッピング」

「げっ」

「おしゃれなカフェでおいしいケーキとお茶を楽しむ」

「ぐぐ」

「……カラオケとか」

「……」

あかりが出した提案に、ヒカルは頭を抱える。まあ、予想はしていたので、あかりは笑った。

「じゃあ、ラーメンでいいや」

「へ」

「最近新しいお店がオープンしたの。だから、ヒカルと行きたいなあと思ってたんだ」

「でもラーメンって……」

ヒカルはむむう、と口をへの字に曲げる。映画もショッピングもカラオケもカフェも苦手分野だ。カラオケなどはいやな思い出が蘇って絶対に行きたくない。

けれど、あかりが行きたいというのなら——
そんなことを考えていると、あかりがみよいん、とヒカルの頬をつねった。

「ラーメンでいいったら」

「よくない。それじゃ、俺が行きたいところになっちゃうだろ」

「別に映画もショッピングもカラオケもカフェも、行きたいわけじゃないもの。ひとりで行こうと思えば行けるし。友達もいるし。ただちよつと、ヒカルを困らせたかっただけ」

「……性格悪くないか？」

「だって、どこでもいいって言うから」

でも、ヒカルはやっぱりに自分に正直だ。こういうことは、全部顔に出る。

いまさらあかりは幻滅などしない。わざわざ、ヒカルの行きたくないところにヒカルと行ってもうれしくない。あかりだって、やっぱりヒカルが笑っているところが見たい。

それはヒカルに合わせるわけではなく——そこが、あかりの「行きたいところ」でもあるのだ。

「私もラーメン食べたいもの」

「……俺に合わせて無理してるとかじゃないだろうな」

「私がそんな殊勝な性格してると思うの？」

「それはそうか」

あっさりとヒカルは納得する。それはそれで面白くない。あかりはふくれつつもヒカルの腕に自分のそれを絡めた。

「あかり、決まった？」

「うん。……うーん。ええっと……ちょっと待ってね」

「俺、もう決まったんだけど……」

「う……。だって、メニューがたくさんあるんだもん……」

店に入ってから二〇分。あかりはいまだにメニューを選べないでいた。ヒカルはあっさりとその日の気分で塩ラーメンに決まったのだが、どうして女というものはメニューひとつさつさと決められないのだろう。

「……よし。みそラーメンにする。もやし多めで」

あかりはようやく顔を上げた。ヒカルは呆れつつも手をあげて、注文する。

おてふきで手を拭きながら、あかりは「楽しみだね」と笑った。店内をぐるりと見渡せば、大勢の人であふれている。

「開店したばかりだからかな。結構繁盛してるみたい」

「そうだなあ。不味かったらいやだなあ。わざわざ来たのに」

「大丈夫だと思うけど……。久美子も前来たんだって。おいしいって言ってたよ」

久美子、というのは、確かあかりの中学のときからの友達か……。同じ囲碁部だったが、顔はぼんやりとしか覚えていない。文化祭のときにも逢ったが——あの時はあかりの様子が変だったことが気がかりで顔などろくに見ていなかった。

（つくづく俺って……）

ヒカルはあかりをじいつと見つめる。

さらさらの黒髪も、白くて細い指も。赤い果実のような唇も。笑った顔も、泣いた顔も、怒った顔も。……ずっと見ていたくなる。

(……あかりが好きなんだなあ)

しみじみと、ヒカルは自分の気持ちを確認した。他の誰にも、こんな感情を持ったことはない。嫌われたくないとか、そばにいてほしいとか、誰かに自分がそんな感情を抱くなんて、考えたこともなかった。

しかもそれが、子供の頃からずっとそばにいたあかりだなんて――

こうして、対局の合間を縫ってまであかりと一緒にいたいと思うのも、とても不思議だ。

「……なに？」

視線に気づいて、あかりが首をかしげる。ヒカルはにっこりと笑った。

「別に」

「……なに？ 気になる」

「どうしても知りたいって言うなら教えてやってもいいけど、後悔するなよ」

「ええ？」

あかりは目を瞬かせた。後悔？

そんなこと言われても――

ヒカルはニヤニヤと笑っている。あかりはその余裕が癪に障った

ので、ぷいとそっぽを向いた。

「別にいい」

「あっそ」

「……ヒカルの意地悪」

「うん。俺もそう思う」

ヒカルはあっさりと認める。自分が、あかりに対しては少々意地が悪くなってしまうのは、自覚がある。こんな感情も、あかり以外に感じることはない。

あかりが見せる、「ヒカルだけに」見せる表情が、心が、言葉の全てが、ヒカルを「好き」と言っているよう。つい、確かめてしまいたくなる。

自動の扉が開いて、新しい客が入ってくる。入り口に向かって座っていたヒカルは、あからさまに顔をしかめた。……最悪だ。

その顔を見て首をかしげながら、あかりも入り口のほうをふりむいた。——そして、納得する。

入ってきたのは、御影と美羽だった。二人もすぐにヒカルたちに気づいて、御影は眉をしかめ、美羽は「まあ」と顔を輝かせた。

「美羽。進藤君」

「あかりたちも来てたのね。進藤君は——正月以来ね。おひさしぶり」

美羽が艶やかに微笑むと、ヒカルは力なく笑う。駄目だ。どうもこの女は苦手だ。

不意に御影と眼が合ってしまう。ヒカルは条件反射で睨みつける。

……この習性はもう、しょうがない。きっと一生直らないと思う。

「こんにちは。藤崎さん」

あからさまにヒカルを無視して、御影はあかりにっこりと笑いかけた。

「美羽がラーメン大好きなんだよ。新しい店には、いつもつきあわされるんだ」

「だって、友達誘うのも悪いじゃない」

美羽はけろっと言いつ切る。

「……僕には悪いと思わないんだ」

「思わないわね。不思議なことに」

「……あそう」

御影はげんなりとする。特にラーメンが嫌いなわけではないが、こんな美羽を見ていると心底嫌いになりたくなる。

「御影にそういう遠慮をする必要がなくてうれしいわ」
「……」

そんな二人のやりとりを、ヒカルはなつかしいものを見るような目で見ていた。

ヒカルとあかりも、幼なじみだ。……けれどもう、ただ、気安い「幼なじみ」でいることはできなくなった。その道を選んだのはヒカルとあかりの意思だ。後悔はない。

でも、やはり懐かしいのだ。遠慮も、意識も、なんの隔たりもない世界。緊張も不安も、ただ「親しい」、親でも兄弟でもない存在。家族のような、けれど家族ではない、曖昧だけれど確かな存在。

「お待たせいたしました。みそラーメンと塩ラーメンになります」

店員がラーメンを運んでくる。彼の意識はラーメンに集中しており、美羽は目に入らなかった。おかげで足元が留守になってしまったのだろう。

彼は足を絡ませて、美羽にぶつかる。

「きゃあっ」

——それは一瞬で。

考えることなどできなくて。思考も何もかも、働くことはなかった。

気づけば店員はラーメンを床にぶちまけてすっころんでおり、彼にぶつかられてヒカルの座っている席に倒れこんだ美羽の腕を、ヒカルが支えていた。

あかりは、ヒカルの正面に座っていた。——だから、見ないようにすることはできなかった。身体がこわばり、それでも——眼をそらせなかった。

ヒカル自身、なにが起こっているのかわからなかった。倒れこんでくる美羽を条件反射で支えて——そして、柔らかな何かが唇に当たった。

それくらい感覚しかなかった。だから、あかりが立ち上がるまで。その眼に涙がにじむまで、自分が美羽とキスをしているということに——気づかなかった。

ヒカルはあわてて美羽を引き剥がす。美羽も、少々呆氣にとられた顔をしている。

「……美羽。大丈夫？」

御影の声で、ようやく我に返ったようだ。すぐに平常心を取り戻すと、ヒカルに向きなおる。

「……ごめんなさい」

「……いえ」

としか、ヒカルは言いようがない。

「あかりも——ごめんなさい。……あかり？」

あかりは固まったまま動かなかった。

どうして。

どうして。

どうして。

気持ちが、うまく働かない。直視したくない現実を、目の前にさらけ出されて。

——あかりに、どうしろというのだろう。

「……やめて」

「……あかり？」

ぼそりと言ったあかりの言葉に、ヒカルはふりむく。

「駄目……」

じんわりと、涙が滲む。こんなことで泣くのは卑怯だ。そう思ったが、止まらなかった。

美羽に怪我がなくてよかった。やけどしなくてよかった。事故なんだから。

その答えは正しい。けれどあかりには——そんな正義は、ほしくなかった。

「やだぁ……」

ぼろぼろぼろと、頬を涙が流れる。

「……ヒカルは、あげない」

「へ？」

「碁以外に、ヒカルはあげない……。あとは全部、駄目……。あげない……」

あかりが許すのは、許せるのは、碁だけだ。

ヒカルの心が他に奪われてしまっても、「しょうがない」と許せるのは。

愛しさをこめて見つめていられるのは「碁」だけだ。

それ以外は駄目だ。心も、キスも、ヒカルの全ては。

あかりはヒカルのものなら、ヒカルはあかりのものなのだ。

「あか——」

「馬鹿っ！」

「ごめんなさいっ」

涙眼で怒鳴られて、ヒカルはとっさに謝ってしまう。いや、故意ではないから謝らなくてもいいのだが——

あかりはごしごしと目をこすると、そのまますたと歩いていて、店を出てしまった。ヒカルはあわててその後を追っていく。ラーメンが食べられないのは……まあ、しょうがない。後でにしよう。

今は、あかりが最優先だ。わざとではないにしろ、あかりを泣かせた。哀しませた——その罪悪感が、ヒカルを襲う。

残された二人は、仕方がないので二人がいた席に座った。

「もうしわけありません。お客様」

店員が頭を下げて謝ってくる。ラーメンは美羽にはかからなかったし、特に被害はない。靴が少し汚れてしまったが。しかし。

「気をつけてくださいね」

あかりを泣かせてしまった原因である店員に、美羽は冷ややかに微笑んだ。一方御影も、「やめなよ」と美羽を制止するつもりはない。この店員のせいで、あかりは泣いたのだ。

「じゃあとりあえず、醤油二つ」

御影の意見も聞かずに、美羽はさつさと注文する。御影はラーメンの中では醤油が一番好きで、美羽に付き合ってオープンしたばかりの店に行くときはいつも醤油を頼むことを知っているからだ。二人で座って、しばし無言になる。口を開いたのは美羽だった。

「追いかけていい？」

あいかわらずいやみな幼なじみだ。御影はむっとしながらも、冷静を装った。

「僕が行ってもしょうがない」

「そうね。見せつけられるだけだもんね」

「……美羽」

「あら、傷ついた？」

美羽の微笑みに、御影は力なく睨みつけることしかできなかった。まざまざと見せつけられる——その痛みが、御影を襲う。あか

りが、学校にいるときには絶対にしない表情で笑い、御影には絶対にしない表情で泣く。

あんなふうに泣いたあかりを、御影は知らない。無理矢理キスしてしまったときでさえ、あんな顔で泣いてはいなかった。あんな——ヒカルしか、目に入っていないような顔で。

どうしてだろう。

どうして御影は、こんなにあかりが好きなのだろう。

そして——諦めることができないのだろう。もう、心を手に入れることはできないと、わかりきっているのに。

「あかり！」

人ごみを掻き分けて、泣きながら前を歩くあかりを、ヒカルはようやく捕まえる。

「……あかり」

あかりはふりむかない。顔が見えないことにいらついて、ヒカルは無理矢理あかりの顔を向かせた。そして固まる。

いつものように、ぼろぼろと涙を流すわけでもなく、透明感のある透き通った瞳をしているわけでもなく——必死に涙をこぼすまいとこらえながらも、止まらない涙が頬を伝って。眉をひそめて、顔を真っ赤にしながらも、必死に涙をこらえるあかりから——目を離せなくて。

呆気にとられていると、あかりの手が飛んできた。べしっといきおいよく頬を叩かれる。

「馬鹿！」

あかりは掴まれた腕を振り払うと、そのまま走り出す。

「あかり！」

ふたたび、二人は追いかけてこをする羽目になった。しかしあかりがヒカルに脚でかなうわけもなく、ヒカルはふたたびあかりを捕まえると、有無を言わず家に連れ帰り、部屋に押し込んだのだった。

あかりは後ろを向いてベッドの上に座り込んでいる。

ヒカルは声をかけるのをためらって、しばし気まずい雰囲気の流れる。

「……馬鹿」

ぼそりとあかりが呟くと、ヒカルは頭を抱える。そんなに馬鹿馬鹿連呼しなくてもいいではないか。大体、あれは事故だ。なんでそんなに責められなくてはいけないのだ。

「あかり。あのなあ——」

「……なんでキスなんかされるのよ……。馬鹿……」

「あかり……」

ぽかっと、あかりはヒカルの胸を叩く。何度言っても足りなかった。何度でも言いたかった。言っても言っても、心は晴れない。

焼きついて離れなかった。どうしてもだろ。どうしても、涙が止まらないんだろ。

「……なあ。もう泣くなって」

ヒカルは困りきってしまった。だから、何度も何度も言うが、ヒカルはあかりの涙に弱いのだ。もうとことん弱いのだ。どうしていいかわからなくなる。

「ヒカルは泣かないの？」
「は？」

涙眼で見上げられ、意味不明なことを言われ、ヒカルは首をひねる。

「私が他の誰かにキスされても、ヒカルは泣かないの？」
「……泣かないけど、怒る」

あかりと御影のキスを思い出して、ヒカルはあからさまに不機嫌な顔になった。自然、声も低くなる。

「同じだよー！ だから、もう、ヒカルの馬鹿！」
「悪かったつてば……」

たとえ事故でも、あかりが事故でも誰かとキスしたらなんて、想像したくもない。

「じゃあ、泣くくらいいいじゃない。泣くくらいくやしくて哀しくて、事故だってわかってるけど、自分勝手だってわかってるけど、それでも哀しいんだからー！」

「う……はい」
「なんでキスなんかされちゃうのよー。しかも美羽なんて……。ひどいー」

「……だから、ごめんなさい」

「誠意がない！」

「誠意って言われてもなあ……」

「ばかー」

それから小一時間、あかりは目が溶けるんじゃないかと思うくらい、わんわんと泣き続けた。ヒカルは困りはてながらも、ほうつておくことも慰める事もできずに、ただ見守ることしかできなかった。そしてくすくすんと泣き声が小声になって、ヒカルが手持ち無沙汰にしている頃に、爆弾は落とされた。

「キス」

「は？」

「——キスさせて」

「………はい？」

いつのまにか、あかりはベッドから降りてずずいっとヒカルに近寄っていた。

まだ、涙で瞳がぬれている。

「……よくよく考えてみたら、いつもヒカルばかりだもの……。そんなのずるい。たまには、私だってキスしたい」

なんだその主張は。ヒカルはわけがわからない。

でも、そんなことを言うあかりがいつも——数倍可愛く見えてしまうのも事実で。理性が、がらがらと音を立てて崩れていきそうだ。

ヒカルはふるふると頭をふる。

「駄目？」

「駄目じゃないけど……」

口は正直に、本音をさらけ出す。

（いや、駄目だろ。俺）

この状態であかりにキスなんかされたら、はっきり言って理性的な砂の城だ。

「……駄目じゃないけど、なに？」

しょぼんと、あかりがうつむく。

駄目じゃないけど——ああ、もう、なんでもいいや。あかりにはかなわない。

ヒカルは微笑んだ。

「——いや？ どうぞ」

そして目をつぶる。あかりはごしごしと目をこすって、ヒカルを見つめる。

こうしてみると、ヒカルは本当に整った顔をしているのだ。まっげは長いし、肌は綺麗だし——手入れをしているとも思えないのに。くやしくて、でも魅せられて、以前ヒカルが「キスしたい」と言った気持ち、遅まきながら理解できた。

いつもいつも、受身だったけれども。でも、一度くらい、こんなことがあってもいい。毎回は——さすがに恥ずかしくて駄目だけれど。

ヒカルがいつもしてくれるように、あかりはまずヒカルの瞼に口付ける。左、そして右。

ゆっくりと唇を下降させ、やさしく唇に触れる。軽く、鳥がつかむように。

何度も何度も、じゃれあうように、触れあう。——いつしかそれは、深く深く、互いを求めるキスになっていた。

互いの腕が、互いの首と後ろに絡みつく。かたん、と小さく音がして、ヒカルはバランスをくずさないように片手を床に着いた。空いている片腕であかりを抱きしめる。

しかしもどかしくなったのか、ヒカルは支えていた腕をあかりの腰に回した。大きくヒカルは倒れこみ、その上で、あかりが小さく声を上げた。

しかしすぐにヒカルは唇をふさぎ、少しだけあかりは抵抗したが、やがてはヒカルを受け入れたのだった。

「気はすんだ？」

「……全然」

ヒカルに抱きすくめられながら、あかりはそれでも不満げに呟いた。……この状況でまだ言うか。

けれどヒカルは上機嫌だ。

「あそう。俺は結構満足だけだな」

「ヒカルが満足してどうするのよ……」

「あーのーなあ。お前、自分だけ被害者とか思うなよ。俺だって、別にキス魔なわけじゃないんだからな」

「……？」

別に、そんなふうにしたことはないが……あかりは首をかしげる。

なんでこいつはわからないかな、と、ヒカルは首筋にがぶつと噛

み付いた。

「きゃあっ」

「馬鹿」

「い、痛いじゃないのよ。ヒカルのエッチ！」

「男はみんなエッチだよ」

「……その言い方って、ずるくない？」

「——とにかく、俺はな」

ヒカルはずれかけた話を戻す。

「お前以外とキスしたってなんとも思わないし——したくないよ。……それくらい、わかってくれてもいいと思うんだけど」

それは真実だった。現に美羽とキスしても、驚きはしたがそれ以外の感情はなかった。ただ、唇が触れた。肩が触れるのと大差ない。ただの皮膚接触だ。

あかりとのキスに感じる鼓動や高揚感、そして充足感はない。あかりだから、キスしたいと思うのだ。あかりだから意味がある。

——まあ、それでもあかりがあそこまで怒る理由は、逆の立場だったらヒカルもそうなると思うので、責める気にはなれなかったが。

「……本当？」

「嘘だと思うのかよ」

「——ううん。うれしい」

「おう。素直でよろしい」

そして二人は、またキスをした。

18 欠片（後書き）

ものすごく間を空けてしまいました><

なるべくコンスタンスに更新できるようにがんばりたいのですが…

…。すみません。

ちょっと波乱？な感じですね。

19 世界がはじまる日（前書き）

デートらしいデートなんて、数えるほどしかしたことがない。
たいていはヒカルの部屋か、ラーメン屋さんか。だけど、不満に思
ったこともない。それって変なのかな？

19 世界がはじまる日

生まれた気持ちを、どうすればいいだろう。

決して、決して、叶わないと知っているから。

けれどそれでも、生まれてしまったなら。

殺すことなく、咲かせたいと願ってしまうのだ。

誰を傷つけても。

——どんなに傷ついても。

最初に目に映ったのは、鋭い眼光だった。写真の中からさえ感じる光。美羽は思わず、その雑誌を手を取った。『碁界を沸かす十代棋士』というタイトルで特集が組まれている。

特に進藤ヒカルと塔矢アキラが囲碁界をひっぱる若き獅子として大々的にとりあげられている。何度か逢ったことがあり、話したこともあり、そして美羽の友人であるあかりの恋人である——そんな存在が、こんなふうに雑誌に載っている。

——彼に初めて逢ったのは、去年の文化祭だった。塔矢アキラと言ひ争いをしているところを、美羽が声をかけたのだ。目立つ二人だった。

容姿もそうだが、なによりも空気が。凜としていて、鋭くて。

けれどヒカルのほうは、あかりと一緒にいるとそんな空気が一瞬で和らいでしまうのだ。おそらく無自覚なのだろうが——あかりもあかりで、ヒカルと一緒にのときは顔が全然違うのだが。まあ、その辺の分析は御影にでも任せることにしよう。

再会はあるけなくやってきた。次の日の一般不参加の文化祭二日目。あかりが心配だったのか、ただあかりの「かぐや姫」を見たか

ったのか——おそらく前者だろう——ヒカルは学校に忍び込んだのだ。

それを美羽が見つけた、退屈のぎに手助けした。まあ、理由はそれだけではないのだが——結果は、予想以上のものだった。

そして正月。初詣でばったりと逢ってしまった。なにか、縁でもあるのだろうか。美羽は御影と、ヒカルはあかりと、人ごみの中はぐれてしまったのだった。鼻緒の切れた美羽を心配しつつも、自分に正直なのだろう。あかりを探しに、人ごみの中に消えていった。

一人のときは、からかいがいがあったけれど、やっぱりあの、初めて逢ったときの凜とした空気があった——

(……御影も、多少問題はあるけど、なかなかいい男だと思うんだけどねえ……)

あかりももしかしたら、ヒカルがそばにいないければ、御影を好きになったかもしれない、とさえ思う。あかりにヒカルがいたから、その前提があったから、御影は自分の黒い部分をあかりに見せざるを得なかったけれど、でもヒカルがいなかったら、おそらくはもっと慎重に距離をつめていたはずだ。

御影はそういうところ、粘着質で計算高くてしつこいのだ。でも根はやさしいところがあるから、好きになるだろう。ヒカルがいなかったら——そう、きっと、あかりは御影を好きになっただろう。まあ、おそらくは御影と出逢うよりずっと前から、ふたりの間には強固な絆があったのだろうから、そんな仮定に意味はないのだが。

ヒカルを好きなあかりは、御影を見ることはないだろう。万が一別れるなんてことになっても、ないような気がする。理由は、うまく説明できないけれど。

御影は少々厄介な性格をしている。素直じゃないし、粘着質だし、いやみだし、頭がいくせにガキっぽいし、幼なじみである美羽だって、ずいぶん苦労したものだ。

進藤ヒカル——彼はそれに比べると、とてもまっすぐだ。彼には彼なりの心の闇はあるのだろうが、それを自分の力で乗り越える力を持っている。けれどその力が衰えてしまったとき、一人でがんばり続けることに疲れてしまったとき——彼には、あかりが必要なのだろう。

枯れた泉を潤すように、虚ろな心を照らすように。

そんな二人をうらやましいとも思うし、……少し、面白くもないと思う。

「はあ？」

「？ そんなに変かな」

「変ね」

美羽はきつぱりと言い切った。とはいえ、美羽も誰かと付き合い合った経験はないので、あまり偉そうなことは言えないのだが——いくらなんでもつきあって半年以上も経つのに、ラーメン屋以外デートに行ったことがないなんて……それはそもそもデートなのか。あかりは「う、うーん」と腕を組む。

「だってヒカル、映画は眠くなっちゃうし、カラオケは嫌いだし、水族館は……魚は食べるものだと思うてるし。遊園地は好きだけど、ヒカル、丸一日空くってあんまりないから。たまに一日休みがあっても、そうだと遊園地なんて疲れちゃうでしょ。だから……」

「家で逢ったり、ラーメン食べたたり？」

「……駄目？」

本当は温泉旅行に行ったことがあるのだが、さすがにそれを告白

することはできない。

美羽はうつむ、と考える。

「駄目……ではないけど。あかりはそれでいいの？」

「え？ うーん……。うん」

あかりはさして迷わずに、こつくりとうなずいた。そりゃあ、あかりだってヒカルと一日めいっぱい遊びたいときもある。ロマンスクなムードに浸りたいときもある。

恋愛映画と一緒に見て、じんわりとストーリーに感動して、ヒカルの手を握りたいと思うときもある。

——でも。

「ヒカルとは、のんびりいつもどおりっていうのが、一番気楽だし、一番楽しいよ」

「……あかりは無欲ねえ」

「そう？ そんなことないよ。わがままだよ、私」
「たとえば、どこらへんが？」

つめよられて、あかりはまた「うーん」と悩む。言葉にするのは、なんだか恥ずかしい。それにしても、美羽は何でそんなことを聞きたがるのだろう。

新聞部だから知的好奇心が高いことはわかるが……。

「……美羽、なんだか変じゃない？」

「変？」

「どうしてそんなこと聞きたがるの？ 今までは、そんなことなかったのに……」

「——駄目？」

美羽はくるんとあかりを見上げる。あいかわらず、どんな角度で見ても美羽は美人だ。同じ女の子なのに、どうしてこんなに違うんだろう。あかりはきめこまやかな美羽の頬をつねりたくなった。むう、と自然に顔が歪んでしまう。

「駄目じゃないけど……」

——ヒカルは、こんな美羽とキスをしたのだ。思い出したくもないけれど、あれは事故だ。美羽も、ヒカルも、責めることはできない。理性でわかつてはいても、納得はできなかった。……ヒカルには、ちよつとわがまを言ってしまったが。

「で、わがままつて、どのあたりが？」

美羽は唐突に話を戻す。う、とあかりは言葉につまる。わがまな自分、ヒカルに対するわがまな自分は本当に情けなくてみっともなく——思い出すだけで顔が熱くなる。

「……顔が赤いわよ？ あかり」

「……う。だって……」

「——つきあい始めて、半年以上経つのよね？ もう」

「う、うん。ええと……それくらい……かな？」

あかりは指折り数える。改めて考えると、それも恥ずかしいものだ。

「幼なじみ」が「好きな人」になって、そして「恋人」になった。そう、まだ、半年ほどしかたっていないのだと気づく。ずっとずっと、ヒカルは「幼なじみ」だったのだ。

そう考えると、「好きな人」だった時期が一番短い気がする。否、ヒカルは今も「好きな人」だから、「片思い」の時期、といえはい

いのだろうか。

あかりが悶々と思考の迷路をさまよっていると、美羽が話を元に戻す。

「普通それだけつきあっていれば蜜月も通り過ぎてそんな赤くなるようなこともないと思うんだけど……」

「……ええっと……。別に、つきあいはじめも、そんな、蜜月とか、そんな感じはなかったよ」

「なかったの？」

それは意外だ。美羽は身を乗り出す。

あかりはこくりと頷く。

「幼なじみだったから、そのう、一緒にいて特別にドキドキとか、そういうの、なかったし……。手を繋ぐときはドキドキするけど――」

――

「キスは？」

「キ……っ！」

あかりはゆでだこのように真っ赤になってがたんと椅子を鳴らす。

「キスは？」

美羽は冷静にさらにつっこんでくる。あかりはうつむいた。ああ、死ぬほど恥ずかしい

「……キスも……ドキドキするけど……」

「まだ？」

「……まだ」

「恥ずかしいの？」

「は、恥ずかしいとかそういうんじゃない。そういうのもあるけど……。一緒にいると、安心するんだよ。ヒカルの部屋も、ヒカルの手も、ヒカルの空気も、昔からずっと知ってるから——でもそのう、やっぱり、いろいろ、昔とは違うところもあって……。うま、く言えないよう。言わなきゃ駄目？」

「別に言わなくてもいいわよ。ニユアンスは伝わったから」

「……そう？」

「うん」

とりあえず、半年経つても変わらずに、というよりも幼なじみだったころから蜜月なのはわかった。あかりは、本当に可愛いと思う。こんなに可愛い女の子を見たのは、美羽は初めてかもしれない。外見もそうだが——なによりも、中身が。あかりは、大切なものを大切にできる女の子だ。そして、見失わない。だから、きっと御影も好きになった。

進藤ヒカルも、好きになった。それは、好きにもなるだろう。小さいころからこんなに可愛い幼なじみがそばにいたら、他の女の子なんて目に入らないに違いない。

美羽と御影も、一応似たような関係ではあるのだが——駄目だ。どう考えても、あかりとヒカルのようなロマンスは生まれようもない。

「そこまではつきり断言するって、僕に失礼じゃない？」と御影がこの場にいたら言うかもしれないが、そう思ってしまうものはいくつかない。

確かに親しみはあるし、御影が幼なじみで、その偶然に感謝したい気持ちもある。しかしそれは、あかりがヒカルに、ヒカルがあかりに抱くものとはかけ離れたものだ。大抵の幼なじみは、近すぎてそうなってしまうのではないだろうか。

兄妹のように、ずっとずっと一緒にいた存在だから。だからもしかしたら、失くさないために「そんな存在」を守るのかもしれない。

けれど。

(……まあ私の場合は、単に御影に男を感じないだけなんだけどさ……)

結局美羽は、あかりからなにを聞いたかったんだろう？

なんだか、二人の話を聞きたかった。それだけなのだが——なんだか、心にしこりが残ってしまった。

それでもそれ以上追求はせずに、美羽は別の話を始めたのだった。

——そういえば、自分は進藤ヒカルとキスをしたのだ。そんな事実を、ふと思ひ出し、そして消しながら。

(……うーん……)

じいいつとヒカルを見つめながら、あかりは考える。

キス？

手を繋ぐ？

——抱きしめてくれる、感触。

どうしてこんなに、ドキドキするんだろう。それって、何か変なんだろうか。

慣れちゃうものなんだろうか。こうして、一緒にいることに慣れるように。

暮を打つ背中が大きくて——たくましくて。いつからか、そんなふうに、ヒカルはあかりを追い越した。昔は、背の高さも、背中の大きさも、手も、同じだったのに。

ヒカルは暮に夢中になると、こんなふうにあかりがじっと見つめていても気づかない。ベッドの上に寝転んで、その背中を見つめ続

けていることに、なぜかあかりは飽きを感じなかった。ベッドはふかふかで、大好きなヒカルのおいがした。

穏やかな気持ちはある。こんなふうに、たくさん感じる。それは「幼なじみ」だった頃感じた「平穏」とはほんの少し違うのだ。どこがどうとは、具体的に言うことはできないけれど――

(……まあ、いいか)

この部屋にいと、うつらうつらと眠気が襲ってくる。こんな気安さは、やっぱり「幼なじみ」だからだろうか。――幼なじみであることを、後悔したことはなくて。

その感情も、消えずに残っている。ただ、色を変えただけだ。深みを、増しただけだ。ずっとずっと、一緒にいよう。その願いは、出逢った頃から持っていた気がする。色を変えて、形を変えて、今もまだ胸に抱いている。

「――あかり。あかり？」

「……あれ。ヒカル？」

「あれ、ヒカル、じゃないって。よく寝てたな。お前」

「……眠っちゃったんだ……」

「お前、よく寝るよな」。人の部屋でぐーすか

う、とあかりは言葉につまる。確かにそうかもしれない。

でも、それはヒカルだって悪いのではないだろうか。あかりがいても、暮のほうしか見てないのだから……。それにヒカルのベッドは――くやしいから、そんなこと言っちゃらないけど。

あかりが「むうつ」と頬を膨らませると、ヒカルは苦笑する。

「でも前も言ったけど、他の男の家でそういうことするなよ」

「……ヒカルは私が、そういうことすると思ってるのね？」

「へ？」

「誰の家でも他の男の人の家でも平気で上がりこんで寝入ってしまう女だと思っっているわけね？」

「ずっとつめられて、ヒカルは「え？」と後ずさる。いや、そういう意味ではなく、いやそういう意味なのだが、だってあかりは本当に無自覚に人を誘惑するから——」

「だから、たとえヒカルの部屋だろうと、気軽にすかすか寝ないでほしいものだ。」

「他の部屋で眠るくらいならヒカルの部屋で——とは思うが。いや、頭の中で考えが整理されていない。」

「あかりはしかめつつらをしたまま、すくつと立ち上がる。」

「あかり？」

「帰る」

「おい、あかり……」

「問答無用でノブに手をかけるあかりを、ヒカルはあわててひきとめる。」

「ごめん。悪かった」

「ぴたつとあかりの動きが止まる。けれどヒカルのほうはむいてくれないので、ヒカルはあかりの顔を覗き込み、様子を伺い——ぎよつとする。」

「ちよつと待て、こんなことで泣かなくても——」

「あ、あかり」

「……ごめんなさい」

「ごしごしと目をこすって、あかりは謝る。」

「いや、謝るのは俺のほうなんだけど……」

「違うの。ちよつと、涙もろく……」

「……なんで？」

「笑わない？」

こくこくとヒカルが頷くと、「あのね」と上目遣いでヒカルを見上げる。……そしてヒカルは頭を抱えなくなる。

（……だから、そういうことを無防備にするから心配になるんだけど……）

ヒカルは理性を総動員して、自分の欲望を抑えた。なんだかあかりを好きだと自覚してから、自分をコントロールするのがうまくなったような気がする。うまくならざるを得ないのだが。おかげで暮を打っているときも動じることがは少なくなった。……なんだかうれしいような虚しいような……。

「……だって、しあわせだったんだもん……」

「なにが……。だから」

言ってる意味がさっぱりわからない。あかりはよくこういうことがある。きちんと最後まで話を聞かなければ呑み込めないことが多いのだ。

しかし、あかりは恥ずかしいのかもごとくも口ごもる。とりあえず立ち話はなんなので、あかりをベッドに座らせて、ヒカルもその

隣に座った。

あかりはぼつりぼつりと話し出す。

「……碁を打ってるヒカルの背中を見ながら、ヒカルのベッドで、なんだか、いいなあって思ってた……」

「……だから、なにが？」

文が繋がってないような気がする。ヒカルはさらに頭をひねる。

「……だから……だから……その……」

うまく言えないなあ、とあかりはぼりぼりと頬をかいてから、ちらりとヒカルを見る。だからその目は反則だというのに、どうして学習してくれないんだろう……。ヒカルがなにも言わないのにわかるわけないのだが。

「……もしもの話だよ？」

「うん」

「……ヒカルと結婚とかしたら、そうやって、ヒカルと同じ空気を吸って、ずっといられるのかなあと思ったら……しあわせだなあと思ってね……」

「——」

「なのに起きぬけにヒカルがあんなこと言うから……ちょっと哀しくなっちゃったというか、自然に涙が出てきたというか……。あ、やっぱり呆れてるでしょう。もう、だから言いたくなかったのに……。恥ずかしいなあ……。ヒカル？」

気づいたときにはあかりはヒカルにキスされていた。柔らかいその感触にあかりは一瞬頭がついていかない。ああ、キスをされているのだ、そう思ったときには、あかりの身体はベッドに沈んでいた。

唇に、額に、頬に、間断なく降り注ぐキスに、あかりは戸惑う。

「ひ、ヒカル——」

するりとあかりの服の中に手が入ったとき、あかりは思わずぺち、とヒカルの頬を叩いていた。

拒絶されたことに気づき、ヒカルは憮然とする。

「……なんで」

「なんでって——もう帰らなくちゃいけないし、おばさんも下にいるし……」

「……あかりって、本当にずるいと思うぞ」

ヒカルはそのままあかりに覆いかぶさる。その重さが、ここちよかった。

このぬくもりが、いつでも、「逢いたい」と言わなくても、この手の中にあつたなら。

……そんな未来があるなら、それはなんてしあわせなことなんだろう。

「ヒカル……？」

「煽るだけ煽つといて、寸止めかよ」

「あ、煽つてないよ！」

「じゃあ覚えろ。そういうのは、煽ってるって言っただよ。念を押すけど、お前、そういうこと、俺以外に言っなよ」

「……泣いてやるわよ」

ヒカルがあかりの泣き顔に弱いのは、昔から知っている。ヒカルはごろん、とあかりの横に寝そべった。

「……わかっていても、言葉で確認したいときもあるんだよ」

すねた声で、ヒカルは言う。

「俺は——あかりの時間全部、ひとりじめできるわけじゃないから」

望んでも望んでも、絶対に叶わない願いだと知っていても。

だから、言葉で、君の口から、全ての願いを。——それさえもエゴだと知ってはいても。やっぱり、欲しくなる。

「……そんなの、私も一緒なのに……」

「……知ってる」

「ヒカルって、ばか」

「うん。あ、それから——」

「え？」

「する？ 結婚」

「え……」

何気なく、あっさりと、ヒカルは言った。あまりにもあっけなく言われたので、あかりは思わず「うん」と二つ返事で頷いてしまうところだった。

「……いや？」

ヒカルが不安げに見つめると、あかりはふるふると物言わぬ首ふり人形になってしまった。

「さすがに、いますぐ、とは言えないけど」

いつからだろう。自然に、もう、決まっていた感情。

君以外に知らないからだろうか。もっともっとたくさんの恋をしていたら、ためらっていたのだろうか。「まだ早い」とか、「まだ想像もつかない」とか。

——ただ、ヒカルはもう、喪失の痛みを知っているから。大切なものを失わないために、後悔をしないために、もう、大切なものを見逃さないように。

「俺、あかりと、ずっといっしょにいたいからさ」

てつとりばやいのは、やっぱり結婚じゃん？

ヒカルはなんでもないことのように、けらけらと笑った。

二人でベッドに寝そべって、とてもとても近い距離で。そこにはなにもなかったけれど。ロマンチックな夜景も、指輪も、なにもなかったけれど。

「そうだな、いつぐらいがいいんだろう。学生結婚っていうのもいいよな。俺は学生じゃないけど。ああ、どっちにしても、俺が十八にならなきゃ駄目だから、まだあと二年くらいは駄目か……」

一番早くて、十八の俺の誕生日か。その日にするか、とヒカルがおちゃらけて言うと、あかりは予想外にもこっくりと頷いた。

「——うん。その日がいい」

「そうかそうか。じゃあその日に——え」

「私、その日にヒカルと結婚したい」

何の迷いもなく、ヒカルを見つめて、あかりは言った。想像もしていなかったわけじゃない。ヒカルとずっとずっと、一緒にいられたら。けれどそれは、実現するかどうかも定かではない夢で。

もしも実現しても、遠い遠い未来だと思っていた。あかりなんか
が想像もつかないような、遠い未来の話だと思っていた。

だからうれしかった。ヒカルの言葉がうれしくて、同じ思いがう
れしくて、いますぐにでも、ヒカルと結婚したいと思った。

好きだから。一緒にいたいから。その気持ちだけで、どこまでも
いけると思った。

あかりのはにかんだような、でもまっすぐにヒカルに向けられた
笑顔に、ヒカルはもうなにも言えなくなってしまう。額にキスをこ
ぼすと、くすぐったそうに笑うと、それでもよりそってくる。

「三年って言ったら、大学受験だろ。高校受験より大変だと思うけ
ど」

「大丈夫」

「まだ、俺たちのことって、俺の両親もお前の両親も知らないよな
いや、気づかれてるような気もするけど……」

「平気」

なんだったら、今日報告する？

言わないのも、照れくさくて言えないだけだ。ヒカルと付き合っ
ていることが、親に後ろめたいわけじゃない。おそらく、ヒカルも
そうなのだろう。

でも、これだけ頻繁にヒカルの家に来ているのだから、ヒカルの
母なら気づいていそうだが――

「母さん？ そうだなあ、気づいてるかも……。なんにも言わないけ
ど。でも、もうなに言っても驚かないんじゃないか。俺、いつも突
然だから。母さんも、もう慣れたみたいだし」

「お父さん、驚くかなあ……」

「おじさんか……。どうかな……」

あかりの父は「威厳」とはまるで無縁な人で、おっとりとしていてのんびりとしていて、けれどそれでも、やっぱり睨むくらいはするだろう。

それくらいは甘んじて受けなければ、と、ヒカルはうんうんと頷いた。

「……俺、結婚とかって、ずっと遠い話だと思ってた」

「……うん。私も。まあ、ヒカルは忘れっぽいから、あんまり期待しないで okay」

「……お前なあ、ばかにしてる？」

「だって、そうだもん」

「……可愛くない」

そういいながらも、ヒカルはぎゅっとあかりを抱きしめた。

「——じゃあ、予約な。詳しくは後ほどということ」

「……本気？」

「駄目ならいいけど」

「駄目じゃない」

「ようし」

ヒカルは笑う。昔とは、まるで変わらない笑顔で。変わって欲しくないものは変わらずに、変わって欲しいものは少しずつ形を変えて。

そばにいられたらいい。

このぬくもりが、ずっとずっと、この手の中にあつたらいい。

遠い遠い過去に、同じ夢を見た。
そしてそれよりもきつと近い未来に、二人は同じ夢を見るだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6551/>

ひかりちる世界

2010年10月8日11時29分発行